
スーパーの吉村さん

立花愛莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパ―の吉村さん

【Nコード】

N6504Y

【作者名】

立花愛莉

【あらすじ】

時は2011年、就職氷河期——。スーパ―ニコニコでパートとして働く傍ら、正社員として求職中の魔術師【吉村幸音】は新人アルバイトの教育を任される。地元の国立大学に通う超優等生の「魔導師」は新人として非常に扱いづらい人間だった！トラブル勃発する愛すべき奇妙な仲間達が集うスーパ―で、次から次に生じる事件、事故に真っ向から立ち向かいつつ何とかコミュニケーションを図ろうと画策するのだが、その渦中スーパ―を二分する大問題が生じてしまう。幸音は無事、年内就職を果たし新人アルバイトと人

間らしい関係が築けるのか――！？

登場人物紹介（前書き）

真面目な物語を書いていると、ついつい、こういうおぼかな物語が書きたくなります。

楽しんで書いておりますので、生暖かな目で見つめていただき、スーパーの愛すべきバ力達と一緒に物語を巡っていただければ幸いです。

また、スーパーでこんな椿事が在ったなどという情報がございましたら、是非是非教えてください。

なお、この物語は6割がたの事実、設定を基にして描かれております。

あなたの街のどこかに、たぶんきつとモデルになったスーパーがあると信じております。

登場人物紹介

「スーパーの吉村さん」登場人物一覧

吉村幸音よしむら さちお

本作の主人公。スーパーニコニコに勤務するパート。仕事の傍ら就職活動中。今年の抱負は「年末までに就職を決める」こと。「魔術師Aライセンス」取得。

西山三月にしやま みつき

スーパーニコニコの副店長。天然ワカメの黒髪が自慢。属性は「眼鏡ドジッ子」。外見は陰湿根暗長身瘦躯。機械と極度に相性が悪い。最近マゾヒストの世界に目覚めた。

倉科悠馬くらしな ゆうま

地元の高校、魔術科に通う普通の高校生。スポーツが得意で秀才、イケメンだが陽子が引くほどのDM。仕事ぶりは真面目で有能。副店長と仲がいい。

庄野由貴しょうの ゆき

新人アルバイト。地元の国立大学魔術学部に在籍する優等生。百年に一人の逸材だが堅物で貧弱。人間不信で融通が利かずしばしば幸音と対立する。「タレ目」。

すがわら
菅原陽子

スーパーニコニコ社員。レジ部門チーフ。生物の常識を無視した童顔少女。高良によれば「外面大王、八方美人」。勤務中はポニーテールがトレードマーク。DS。

みほ たかよし
美宝高良

スーパーニコニコで働くフリーター。渾名は「高良さん^{タカラ}」。重度のロリコンだが陽子は問題外存在。機械にめっぽう強く、店舗のコンピュターは彼の専売特許。

店長

スーパーニコニコの不在店長。陽子でさえ半年に一度見るか見ないかというほど存在が希薄な人物。時折登場し、ひっそりと去っていく。

もともしえみこ
元森恵美子

悠馬の同級生。スーパーニコニコでアルバイトとして働く。快活な性格で常識が迷子。ホラー映画が大の苦手で「怪談話」に絶叫する。見えないものを信じない。

よつじとおる
四辻透

幸音の家にわけあって居候している紙袋。幸音の母、悦子の代わりに家事全般をこなす「母親的存在」。紙袋の他に、目出し帽、般若の面、ライダー仮面等を活用する。

うしおしずお
潮静男

スーパーニコニコ、鮮魚チーフ。女装が趣味の変態男。勤務中は赤毛の絶世美女に返信する。女性よりも女性らしく、最近入手したアイテムは「豊胸ブラジャーCカップ」

いしざき
石崎二郎

スパーニコニコ、惣菜チーフ。剛毛なライオンの鬣のような髪の毛を持つ某県地方弁の男性。剣道五段、柔道三段、合気道二段の猛者。ゲテモノが苦手。

まだまだいます。

スパーニコニコ、従業員募集中。

第一章 魔術師に明日はない

—— 今時、魔術師だからってねえ。

コチ、コチ、コチと規則正しく時計の音が鳴り響く。

音に被さるように溜め息混じりに男は言った。

光を反射する油を塗りたくった頭皮に張り付くか細い縮れ毛。

日々、大切に大切に育てているのが聞かずとも容易に想像でき、
吉村幸音^{よしむら さちお}は失笑をこらえるのが大変だった。

己の喉がかすかに震えるのを感じつつ、彼女は神妙な面持ちで男の言葉に耳を傾ける。

十二畳ほどの鉄筋コンクリートの室内に二人の人間が向かい合っていた。

ブラインドカーテンで四つの窓全てが覆われた窓側のテーブルで両肘について滔々と話を続ける初老の男と、その向かいの痩せたパイプ椅子に身を縮めて座るリクルートスーツの少女である。

身じろぎするたび悲鳴を上げる油さしの悪い鉄パイプの心許なさに嘆息するセミロングの茶色の髪の少女。年のころは16歳前後に見受けられるが、実年齢は21歳。来年の3月で22歳となる成人女性だ。

ほっそりとした顔の輪郭に、少し勝気そうな吊り目の赤茶の双眸。やわらかく引き締めた桜色の唇の口角はその両端が上がっているが、かすかに引き攣っているようでもある。

「このご時勢。魔術師ライセンスなんて誰でも持つてる資格だけじゃ、就職、難しいよ。もちろんうちだけじゃなくってさ」

「はあ」

「魔術師じゃなくて、せめて上位ライセンスの魔導師だって言うなら話は別だけどさ。ちよつと短大出たくらいじゃ、せいぜい魔術師止まりだよねえ」

「はあ」

侮蔑入り混じる声音で失笑されているのは幸音自身だが、本人はいまいち緊張感がなかった。実感がわかないというより、話に意識を傾ける価値を見出せないのである。

しかし、喉からこぼれ出る声にいまいち覇気がないのは、何も幸音だけではなかった。

表面が薄汚れたクリーム色の長机を挟んで対面に座す、有限会社シマムラモーターズの社長もまた、同様だった。

溜め息交じりに何度も片手で耳の穴をほじくりながらぼんやりと天井を眺めている。仕方なくしづしづ、面接せざるを得ないという心中が嫌というほど察せられ、面接開始一分目から幸音は即効で踵を返しお暇を告げたかった。

社長の左脇に放置されている白い封筒は、入室の際幸音が社長に手渡したもので、その中には写真貼り付けの幸音の履歴書、職務経歴書、職業紹介状の三セットが丁寧に封じられたままだ。

手渡した直後、机に放り投げられたとき、よくぞ自分は怒鳴り散らさなかったものだと言音は自分の性格を知るがゆえに拍手喝采を自分に贈りたかった。

社長はもとより採用する気がないのは火を見るよりも明らかで、幸音としても「御免蒙る」気満々である。

いったいどういう気まぐれ心を取り出して幸音の面接をする氣になったのか、開始から約体内時計で一時間が経過する今でもなお、幸音は男の真意を図りかねていた。

「短大とはいえ、その他におたく、何の特殊技能もないんでしょ？　うちはね、この私が一代で築き上げた会社なのよ。そりゃもう、会社設立に当たっては聞くも涙、語るも涙の苦労話があつてねえ」

よろけたダークスーツに黄ばみかけたシャツ、空色と濃紺の縞々のネクタイを弄りながら得意げに話し出そうとする禿オヤジのどろりとした鯨臭い顔から視線を外し、幸音は埃かぶったブラインドカーテンの横、柱の丈夫に打ち付けられた時計を見つめる。金の縁取りの古びた時計の針は午後三時半。

部屋に入室したときの時間も確か、三時半。

「・・・」

「うちの会社が創立五年目で倒産しかけたとき、俺は反対する従業員に言っちゃったんだよ。モーターズを名乗るくらいなら、工具も工場も一流じゃないといけないうてね」

社長の語る自慢話を右から左に聞き流しながら、幸音はまじまじと時計の長針、秒針を見つめた。丁度文字盤の「2」と「3」の間で死に掛けの魚が如く、びく、びくと針が振動している。

——間違いない。

あの時計は時を刻むことを拒否していた。

「スナップオンという工具メーカーを君は知っているかね」

なんということだ。

事実を知るなり幸音は凍りついた。

一時間経過したということは、現在の時間はおよそ四時半。最悪、五時に近い。

一張羅のリクルートスーツを着込む背中に伝う脂汗。背もたれと接し生暖かいはずなのに、氷が滑ったように冷たく感じる背中。幸音は心底肝が冷えた。高校二年生から短大在学中、そして現在に至るまで何とかご縁のある仕事先に、一度たりとも遅刻欠席したこと

のない幸音に有るまじき大失態。

無連絡での遅刻。

その結末が生じさせるものは、幸音のスーパーでの権力の失墜と信用の完全放棄を意味する。

マズイ。マズイ。マズイ。

——それだけはなんとしても避けねばならない。

たとえ、この受かるはずもない面接で礼を失することになったとしても。

決意は固まった。幸音の人生にとってこの男の話が今後、どのような影響力や価値をもたらすのかはもはや問題ではない。

現在、目の前に降りかかり解決すべき問題はただひとつ。

可及的速やかにこの場を脱出し、仕事先に全速力で駆けつけるだけである。

「君。さつきからずっと黙って、ちゃんと聞いているのかね」

尖った声に幸音はすぐさま顔を上げた。

真直ぐ相手を見据えると、くりっとした男の丸びた瞳にうつすら
苛立ちが浮かんでいるのが見て取れる。

しかし、彼以上に苛立ちをこれまで我慢し続け、心に溜め込んで
いたのは他でもない、吉村幸音である。

幸音はだらけていた姿勢を正し、唇を引き結んだ。

艶やかな髪の毛をかすかに揺らし、極上の笑顔で微笑み――。

「君」

男の言葉を先んじて静止、幸音は毅然と声を放った。

「仕事の時間がありますので、申し訳ございませんが、ここで失礼
させていただきます」

椅子から立ち上がり、姿勢を正して一礼する。

頭を下げながら、幸音はぐと目を瞑った。

結果はどうせわかりきってる。

あとはもう、知ったことか。

面接する気がないなら、わざわざ最初からしよつと思つな。

「貴重なお時間、ありがとうございました。——失礼いたします」

笑顔の裏に尖った針をも沈める毒々しい沼を含ませた言葉を胸中で大声で叫びつつ、幸音はあっけに取られる男をまるきり無視して、自主退出に成功した。

豊国佐伯郡大町町、国道二号線沿いに位置する大型風味のスーパー。
I。

スーパーニコニコ。

ガソリンスタンドと併設する寂れた印象のチェーン店のひとつである。橙色の外装に白と緑の二本ラインが引かれ、開けた空間を利用して蕪、人参、南瓜、胡瓜、茄子、トマト、バナナなどの色鮮やかなイラストが描かれ、その中央にどや顔のニコニコマークが燦然と輝いていた。

証明写真印刷機の設置された建物側の駐輪場には、買い物ラッシュ時を除いて毎時十台前後の自転車やスクーターが停車している。真新しい高機能の電動付き自転車がある一方で、いったいどこから盗んで来たのかという代物まで多種多様だ。

売り場敷地面積は140平方メートル。これがスーパーでも広い部類に入るのか、狭い部類に入るのか、幸音にはわからない。駐車場スペースはおよそ四十台前後。

昼間ともなれば、スーパー南東の位置に居を構える事前注文制配送サービス「ナマ協」の職員がわんさか昼食を求めて店に訪れる。ニコニコスーパーの裏手には大町町支部事務所と集積配収場が設置されている。多くの中型トラックが並び立ち、配送開始時刻ともなれば「ナマ協」トラックで二号線はちよつとした渋滞が生じる。

その他に、徒歩で二十分、自動車等交通手段を用いれば十分圏内に存在する大学や高校から、暇を持て余した大学生や高校生がこれまた暇を潰すために来去する場所でもあった。

店に訪れる客の年齢層は十代前半から七十年代後半までと幅広く、田舎と学問施設が隣り合う場所としては当然のことかもしれない。

そのおかげで店は生鮮食品はもちろんのこと、流行のちよつとしたアイテムや新発売の商品の入荷にも力を入れており、電車で十五分の距離にある隣のスーパーよりも圧倒的な品揃えを誇っているのだった。

ただ、唯一絶対の難があるといえば、施設が古いということだ。

店外を見るまでもなく、店内はありとあらゆるところがとにかく老朽化している。窓ガラスはいうまでもなく、天井や棚、床は掃除をしているものの隠しようもないキズとひび割れ、黒いガムを潰し

たような跡がそこかしこに存在していた。

二年前の地震の影響でひびが入り、台風の豪雨によって天井が雨漏りしたことを受けて、それはまずいだろつとようやく店長が重い腰を上げた。すぐに慎ましやかな補修工事が入ったのだが、それ以来目立つた改修も行われていないのだった。

その薄汚れたスーパーは今年で17周年を迎える。

「それじゃ、吉村さん。もやし明日分はいらないから」

「あ。はい。明日もやしなしですね。わかりました」

深緑色の籠を自動ドアの前で片付けていた少女はしゃがれた声に顔を上げて笑顔で答えた。

セミロングの髪の毛をうなじでひとくくりにして、人懐っこい笑顔を浮かべた幸音は小さく頷いた。

黒いトレーナーに濃紺のエプロン。砂色のズボンに白いスニーカーというスタイルである。寒い時にはこの上にさらに萌黄色の店、ロゴ入りのジャンバーを羽織ることもある。

「よろしく」

パンチパーマで背に観世音菩薩が後光を放つ黒ジャケットを着た男は、渋い顔に深い皺を刻み、片手を上げて幸音の横を通り過ぎる。「その道の人」、というあだ名がついているスーパールの常連客、仲川さんだ。

いつも大体夕方の四時から四時半にかけて、特注のもやし420円分を購入してくれる。

幸音はふと、視線を自分の黒い腕時計に向ける。

今は五時半を二分過ぎたところだ。

一時間も遅く、仲川さんが訪れるのは半月に一度あるかないかというところなので、幸音は少し不思議な心持でパンチパーマの観音様を目で見送った。

「ありがとうございましたー」

面接の時間が予想以上に押していたため、正直仕事先に間に合わないと思ったのだが、幸運なことに魔術師である強みを最大限に生

かした結果、5時5分前には職場で仕事に着手することが出来た。
間に合ったとはいえ時間ギリギリであったことには間違いない。

そのせいか、妙な違和感が幸音の心に去来していた。

「幸音さん、なーに、黄昏てんスか？」

ぼん、と幸音の肩に振動とずっしりとした重みが走る。

「わっ、なに！？」

「へっへー、油断大敵っスよ」

「なにもう。びっくりした」

急に声かけられて幸音が全身をびくつかせて跳ね上がり背後を振り返ると、人懐っこい顔をした長身の少年がへらりと笑って立っていた。

身長が今年の9月には180センチに迫ると万歳三唱をしていた高校生アルバイト、倉科悠馬^{くらしなゆうま}である。目にかかる焦げ茶の頭髮は女の子の髪のように細く艶やかで、肌などは運動をしているせいか健

康的に焼けている反面、女性の幸音が羨むほどきめ細やかで見るだけでつねりたくなってくる。

年頃の少年らしく、悪戯っぽい笑みを含ませた二重の双眸を幸音に向けながら、悠馬は買い物カートを片手に大きくその長身を反り返らせ欠伸をした。

「ふああ。ねむ」

「倉科くん、今日も学校帰り出勤？」

黒いトレーナーに濃紺というエプロンは全く同じだが、筋肉がついている割に細長い体をしている柳のような少年は体を揺らすと撓った竹のように見える。

悠馬は生返事を繰り返しながらようやく正した姿勢で欠伸涙垂れる目尻を拭った。

「そうっす。もうマジ鬼畜っすよ。この時期、来年は受験生だからって二年連中にも先生容赦なし。鬼のように課題を出しまくった拳句、来月はクリスマスぶっ潰して冬期休暇前テストやるみたいっすから」

ああ、めんどくさい。だるい。

しかし呟く悠馬の表情はどことなく楽しそうだ。どんなに学校が忙しくても、悠馬はアルバイトを休まない。遅刻もしないし、仕事ぶりはいたって真面目だ。おまけによく気がついて有能で、頭の回転も速い。忙しければ忙しいほど、大変ならば大変なほど「萌えてくる」とは彼の口癖で、かなりのDMに幸音も少々引ほどだ。

見た目は麗しく、中年主婦層に大人気の高校生アルバイトの唯一の欠点は、悪魔も恐れるマゾヒストっぷりだった。

「流石に来週からの一週間はマジ、超アリエナイくらい大変なんで、勤務時間チーフに変更してもらいましたけど」

「ヨーコさんに？　大丈夫なの、今未曾有の人手不足なのに」

「そうっすね。でも、大丈夫でした」

悠馬は頷きながら、蛇行していたカートの列を真直ぐ一列に揃え始める。

「なんか、明日？　から新人アルバイト君入るかもしれないって言ってたじゃないっすか？　菅原チーフ。確か言ってたの、三週間くらい前だったかな・・・」

左に大きく首を傾けて悠馬が同意を求める。

幸音は眉根を寄せて右側に首を傾け「はて、そうだったか」と記憶を手繰り寄せた。ほどなくして、レジ部門担当チーフこと菅原陽子のおっとりとした微笑を思い浮かべた。

「ああ。そういえば、ヨーコさん言ってた言ってた。一人、新しく夜間のアルバイトさん入るかもしれないって」

「夜間、今人数キビシイっすからね。俺と、元森と高良さんと、三月さんと……。あと幸音さんだけっすからね。チーフと社員の岡本さんは基本五時上がりだし、店長は万年不在でどこ逃走してんのかわねえし。他社員つっても、ヤローと規格外ばっかだし。実質、店取り仕切ってんのチーフと幸音さんじゃないっすか」

「いやっ。そういうわけじゃないよ。チーフはともかくとして、たかだかパートの分際のあたしに権限ないしねー」

急に何を言い出すのやら、と幸音は誤魔化すように後頭部を掻いた。

悠馬は唇を一度閉じて、真直ぐに幸音の引き攣った笑顔を注視する。

本人は謙虚にもそう主張するが、実質スーパーニコニコの夜間などというものは彼女を軸に回っているといっても過言ではなかった。

チーフやパートのおばちゃんたち、その他社員が帰ってからの電話クレームがあれば誠意凛然と対処し、客からの相談が入れば「い」の一番で駆けつける。発注や在庫整理、日報処理なども彼女の仕事となっている。そのため、バイトの連中はもとより、社員や他パートのおばちゃんたちからの信用も厚い。

「まあともかく、広くもなく夜になれば客も少ないスーパーっすけど夜間を回す分に一週間五人だけじゃ正直キツイところがありますね。言っても元森と俺は学生だし、高良さんや幸音だっていつもいられるわけじゃない。副店長の三月さんは、正直言ってあまりレジに入って欲しくない」

「うわあ。倉科くん、えげつないこというね」

「幸音さんだつてそう思ってるんじゃないっすか？ 社員のクセに、ありゃ、使えないっす。正真正銘、使えないレジっす。8月のアレ、思い出すまでもなく三月さんは使えないっす」

副店長こと、西山三月にしやま みつきは聞けば驚くほど使えない、というか「レジに向かない」人材だった。

幸音はあの、見ているだけで陰鬱になりそうな外見と雰囲気を出し、口から砂を吐く勢いで両頬を痙攣させる。

「た、確かに」

「俺だつて、この目で見るまでは元森の三月副店長使えない説は否定してたんすよ。だつてあの、外見はああで、勤務中もああです

けど、人間としては出来て……ないかもしれないスけど、いい人ですからね。たぶん。とりあえず、フィーリングが合うっつーか」

「いい人？　なんだけどねえ」

「……………。流石に目の前でレジを爆発させるとは思ってもみませんで。ハイ」

悠馬の表情は今でも信じられないという色を浮かべている。長い前髪の合間から除く鋭い瞳に同情と切なさが入り混じっていた。

「電子機器と相性の悪い人間くらいいくらでもいるっすけど、流石にあそこまではないっつーか。俺のじいちゃんだって、テレビの接続不良よく起こしたり、買ったばかりのマッサージュチェア誤作動させてしまったことはありましたけど、あそこまではないです。今時、魔術師でも電子機械に触れられませんか？　言う人間の方が珍しい……………」

さめざめと噓泣きをし、口元を片手で覆う悠馬に静かに同意を示しながら、幸音は顔を動かしカートの向こうに直立する赤い自動販売機を見つめた。自動販売機の横には証明写真印刷機があり、今まさにそこへ向けて、人が歩を進めていた。

彼女はすぐさま顔を悠馬に戻し嘆息する。

悠馬も幸音の言わんとするところが理解でき、同じように長い息を吐いた。

「レジの次は自動販売機がよって、盛大に突っ込んだ自分が今でも憎いっす」

自分はボケ担当なのに、と悠馬がぼやく。

「あたしも雪崩の如く缶が取り出し口から出ては詰まるところ、マンガかアニメの世界だけかと思ってたよ……」

両手に抱えきれないほどの缶を手に、「あつつつ」「つめたあ」と交互に叫びまわっていた副店長の様相を思い返し、幸音は再び溜め息をつく。

西山三月副店長が、通常通り金銭を自動販売機のアルミの口に飲み込ませ、出始めたばかりの「あった力ボターじゅ」という商品名の力ボチャのポタージュのスイッチを押したのは、レジ破壊騒動からおよそ一カ月後の9月の半ばのことだった。

正確には9月11日、午後7時17分を数秒回った辺りだった。

防犯ブザーを示す音が店内にまで響き渡り、カウンターで配送の手続きをしていた幸音は「すわ犯罪か」と泡を食って店外に飛び出した。すると、呆然とする悠馬の体越しに「タスケテエ」と情けない悲鳴を上げる副店長の姿を見つけてしまう。

両腕から零れ落ちる大量の缶と、足元に転がり流れる缶。

一瞬、幸音は三月が自動販売機の鍵を開けて中を整理していたのかと考えたが、それは全く不可能な事実に気が付く。外付けの自動販売機は「サンモリー」や「ゴジコーラ」の担当員が補充、棚替え、集金作業をするからだ。店員が自動販売機なぞの鍵を持っているはずがないのだ。

とすれば、行きつく結論はただひとつ。

極度に電子機器と相性の悪い副店長が、再びやかしたと考える他ない。

呆気に取られ、助けることも出来ず顎を落としてた幸音の傍らで同じく様子を見に来た同僚の高良青年が「中年野郎の眼鏡トジツ子属性なんてもの、俺は断じて認めん！」と意味不明な言葉を叫び逃走（仕事に戻る）。

長いアルバイト、そしてパート生活で三月の史上最大の問題点を熟慮していた幸音でさえも、踵を返して業務に戻りたくなくなる椿事だった。

「ともあれ、実質四人で一週間回すと、商品の前出しとか賞味期限チェックなんかもグダグダになっちゃうんスよね。そうすると、また先月みたいなクレームが起きるともいれませんか」

「う・・・」

副店長レジ爆発事件、自動販売機暴走故障事件、そしてクレーム問題。

簡潔に説明すれば、ちと厄介なとある常連客に賞味期間近の商品が渡ってしまったことである。
賞味期限は購入日から二週間後。

日持ちのする食べ物だったのだが、あとたった二週間で食べきれはすもないというクレームだった。製造年月日から消費期限までが一年半と非常食としても人気の看板商品だが、この手の商品は消費期限、あるいは賞味期限の一ヶ月前になると店頭から取り除き、代わりに同商品の製造年月日の新しいものと入れ替えることになっている。

しかしこの時期、賞味期限チェックを可能とする人員が少なかったことと、例年にも増して仕事が増加し業務が滞ったこともあり（レジ爆発事件が元凶）、幸音たちは不運すぎるミスを犯してしまった。

当時まだアルバイトでなかった元森を除いた実質三人（高良、悠馬、幸音）で四苦八苦、七転八倒しながら何とか夜間を回していた時のことだ。

よりもよって「クレームおばさん」のところへ、切れていないとはいえ消費期限間近の商品が手に渡ってしまうなどと。

クレームの電話を受けたのは、もちろん幸音だ。電話口で一時間程度つかまり、首が痛くなるまで謝罪の言葉を繰り返し、電話が終了するなり速攻で店長に電話をかけ副店長とチーフの指示を仰いだ。もはやクレームはたかがパートで処理できる範囲を超えていた。

クレームおばさんからのクレームということで、レジ問わず鮮魚、青果、生肉、惣菜等全部門、店員一同に凄まじい衝撃が走った。

が、無論「お客様は神様ではない」ことを熟知している幸音や社員一同は、深く項垂れ、おばさんと自分たちの能力不足への怒りを押し隠し、己の不運を呪った。

クレーム内容はいたって簡単だ。一人暮らしの老人の身の上では

「干し肉アンパン16個入り」を二週間で食べることが出来ない。大体、製造年月日がほぼ一年前のものをいつまでも店頭においておくとはいったいどういうことか。

先方の意見にもある程度の正当性があり、こちら側にも非があることから即座に新しいお品物との交換と謝罪のため、副店長と社員岡本が「クレームおばさん」の家に即刻訪問した。副店長と岡本社員は二時間半ほどお説教と世間話を聞き、悄然と項垂れて店に戻った。

アレからというもの、少ない人員を浚って人海戦術で賞味期限チエックを行い、幸いにして昼間のパートのおばさんたちの尽力もあって、賞味期限間近の商品は10点以内の発見のみに留まった。

そしてその渦中、有力戦力であった高良が過労で倒れるというありえない自体が勃発し、先月10月21日に元森恵美子を新人アルバイトとして迎えるまでの約二週間、幸音と悠馬の二人で夜間を回し続けるはめとなった。

あまりの事態を見かねてチーフや社員の岡本も助力はしてくれたが、朝七時から流石に夜の九時まで働かせるわけにはいかず、幸音はこの間の穴を埋めるため臨時で従兄弟の兄を召還し、己も無賃金で補填に入った。

嵐のような日々を思い返し、幸音は腐った魚のような瞳を悠馬に

向ける。

「アレは、ほんとに、死ぬかと思った」

「そうですかあ？ 俺は、死ぬほど楽しくって胸が痛いくらいでしたよ。張り裂けそうだったな。あのクレームおばさんのときの緊張感といったら」

「変態め」

ち、と舌打ちしてにこやかに微笑む少年を睨みつけると、悠馬は胸に両手を当てて恍惚とした表情を浮かべて体を震わせた。

「でもまあ、俺としては、あんまし入って欲しくないんすケドネー」

ちらりと悠馬が伺い見る先には頭ひとつ分身長の低い幸音の頭頂部がある。

いい年齢のクセに絶対治癒不可能の童顔を発病している年上の女性性は、本人には非常に申し訳ないのだが「中学生」か、良く見積もっても「高校生」くらいの印象しかない。実際、悠馬自身の友人連中が口を揃えて幸音のことを「どこの高校生？」と指差して尋ねてきたほどだからだ。なお、その際の回答は「中学生」とした。

可愛らしさではもちろん菅原陽子に敵うべくもない普通の、平凡な20歳なのだが、顔と言動がいちいち幼い印象を悠馬に植え付けていたのだった。身長も四捨五入してようやく150センチという脅威の小ささがそうさせているのかもしれない。

「何言ってるんだか。夜間がないと困るのはあんた達でしょうが」

両腰に手を当てて口を尖らせる幸音はやはり、どう考えても普通の高校生にしか見えなかった。

そんな悠馬の心情を知らず、幸音は憐憫めいた瞳で真直ぐ自分を見下ろす少年の顔を見上げる。

「ほらほら。仕事に戻る」

くだらだ喋っていたのは自分も同様なので幸音の声音はどこか柔らかだ。

彼女が悠馬越しに店内に視線を向けると高良がカウンターと隣接する1レジでストック袋を作りながらぼんやり天井を見上げていた。丁度お客の波が途切れてきたところなのだろう。

「はい。わかりましたー。ところで、実に真面目な話、幸音さん今日の面接どうだったんスか？」

悠馬を先導するように店の自動ドアをくぐった幸音の背中に、至極のんびりとした声が降りかかってくる。幸音は一瞬表情筋を停止させたが、嘘について誤魔化すのも癪なので乾いた笑いを洩らしながら扉横の酒を眺め渡す。

「島」と呼ばれる酒が集中する区画の擦れたポップを真直ぐに戻しながら、少女は答えを待って背後に張り憑く高校生に向き直った。

「成功したと思う？」

「本音を言っていっスか？」

「どつぞ」

えへら、と緊張感のない笑い顔を引き締めてこれ以上ないほど真面目に悠馬は頷いた。

「成功するはずがないっス」

「・・・」

「幸音さんが普通の企業で普通に面接？ ハッ、成功するはずがま
ずないっす。プライドが高くて気が強そうで、これといって特に資
格も取り得もない吉村幸音という人間を、俺が普通会社の社長なら
絶対に採用しないっす！ これは断言できます。ってことで、今回
も見事に失敗、面接ぶち壊しましたネー？」

後頭部で両手を組んで片足でバランスを取る見た目はそこそこ、
頭脳もそこそこ、オブラートという言葉を己が辞書から永遠に追放
放棄した少年に向けて、幸音はこれ以上ないほど優しく、柔らかい
口調で言葉を放つ。

「死ねばいいのに、お前なんか」

「ああっ」

両腕を抱いて快感に身もだえする変態高校生をまるきり無視し、
幸音は酒類補充の仕事を開始した。

生物の常識を無視した童顔、ということでは幸音は彼女の足元にも及ばない。

本日も三時間以上越えの残業を果たしたレジ担当チーフ、菅原陽子には――。

「幸音ちゃん。ゴメンー。オネガイー。ちょっと、助けてー」

午後8時7分前。

甘ったるく耳につく声が配送伝票を処理していた幸音の耳に届く。

カウンターの横でレジ業務と平行しながら、合間を縫って雑用職務に勤めていた少女は走り寄って来る白いブラウスと黒いカーデigansの女性に目を細めた。

ぱたぱたと足音をあてながらやや慌てた様子で小学生くらいの女の子がやってきた。

「ヨコさん。今日はなにやらかしたんです？」

彼女こそスーパーニコニコ社員、レジ部門担当チーフ菅原陽子である。

薄桃色のさくらんぼに見立てた髪留めを愛用している彼女は、ポニーテールを箒の先のように揺らしながら焦りを浮かべた表情で幸音の手元を見つめた。

「あつ。ゴメン幸音ちゃん、何か処理中だった？」

「ハイ。ああ、でも、もう終わりがけですし、暇を持て余しての行動だったので問題ないです。どうかしたんですか？」

幸音が誰もいないスーパーを見渡しながら問いかけるのは、レジに客が訪れるか否かのタイミングを計つてのことだった。お客に「すみません」と呼びかけられたら終わりだと幸音は勝手に思っている。

「高良ちゃん、もう帰っちゃって……。あのね、明日の特売の値段変更のね、処理がね。ちよつとわかんなくなっちゃって。別に、副店長みたいに機械が苦手なわけじゃないんだけど、なんかこう、

あの手の機械って完全に私を馬鹿にしてる気がする」

パソコンの画面を開いて、変更したい商品を探して値段を打ち込んで更新ボタンを押せばいいだけの作業が、何故出来ない。と、高良のような毒舌を幸音は吐いたりしない。

人には確実に向き、不向きがあり陽子がまさにそれだった。

レジ部門においては他の追隨を許さぬ陽子も苦手なものがあるのだ。

いつものことなので、殊更に騒ぎ立てもせず幸音は低く唸って周囲を見渡した。夜間アルバイトは本日悠馬だけだ。高良は昼から出て七時半には業務を終了し帰っている。今日はとても大切な用事があるため、大体だらだら九時までいるところをさっさと仕事を終わらせて帰ってしまったのである。

高良の重要な用事などというものは、幸音の計り知れぬ次元にひっそりと存在することは承知していたので、彼を責める気もなければ陽子を責める気もない。

「家のパソコンとか、ネットカフェのパソコンは平気なんだよ。高良ちゃんもぐうの音が出ないくらい見事に使いこなすことが出来るもん。でも、うちの事務所のパソコン旧式だし」

旧式であろうがなろうが、反応速度が遅いだけでパソコンという物質には変わらないのだが、と言っ言葉は幸音の胸底にそっと納められた。

「ホント迷惑かけてゴメンネ、幸音ちゃん」

「いいえ。気にしないで下さい」

両手を祈るように組んで真直ぐ見上げてくる陽子に幸音はふんわりと笑みを零す。

ただ困ったのは、陽子の頼みを聞くためにはレジを離れなければならないこと。

そして、現在食品の売価チェックを任務としている悠馬をいかに呼び戻すか、である。

「あれえ？ 幸音ちゃん。今日は1レジ幸音ちゃんじゃなかったよね？ 仕事の面接に行くからってシフトの組み換え、確かに変更したと思っただけど、もしかして私変更してなかった？」

ゴメンネ。

小さな声でしょぼくって謝られて、幸音は小さく悲鳴を上げそうになった。

隣立つと幸音よりも低い身長歩く人形、菅原陽子は大きな二重の双眸に大粒の涙を浮かべてふるふると体を震わせている。形の良い眉毛を膨らませ、心底申し訳なさそうに幸音を仰ぎ見ていた。

幸音は戦慄しながら慌てて声を放ち弁解する。

「い、い、いやあ。そんな、違うんですヨーコさん。ヨーコさんはちゃんとシフトチェンジしてくれてましたよ。お忙しいのに、こっちの勝手な事情を汲んでくださって本当に感謝してます」

「でも……。幸音ちゃん、今1番レジにいるし……」

しおしおと塩でも振られた青菜のように肩を寄せる陽子に、幸音は地雷覚悟で首を振った。

「違うんです。ホントに。陽子さんが間違っただんじゃなくて、ええと、なんというか」

「——そういえば、倉科くんがいないね」

ぞつとした。

陽子はキョロキョロと注意深く周囲を窺うと問題の人物の姿を探したが、どこにもいない。

幸音は顔に笑みを貼り付けたまま、口を深く嚙む。

一番レジの近くにある栄養ドリンク専用の棚から、モーターを回転させるブーンという音だけが静かに鳴り響く。

「・・・・・・・・」

幸音が何も言わないので、陽子は遠慮なくカウンターに入ると伝票や打ち間違い返品レシートを貼り付けるファイルなどが入れている白い箱に目を向けた。箱は、カウンター備え付けの扉のない棚の一番上に設置されている。右から白、青、黄色と三色の色彩を持つプラスチックの箱である。

微動だに出来ない幸音の横を素通りし、陽子は白い箱から緑色のファイルを取り出した。ファイルの中には一週間分のシフトと日割

りのレジ振りが明確に示されている。

黒いカーディガンの女性は緑色のファイルを開いて、今日のレジ振りに目を通すと幸音に声をかける。

「——幸音ちゃん」

低く、風が唸るような声に幸音は両肩を跳ねさせた。

ヤバイ。

マズイ。

命が危うい。

幸音でなく、悠馬の命が。

「シャープ9番。呼び出し、倉科悠馬」

「了解でありマス！」

冷然たる口調で下された炎も凍りつかせるほどの声音に、幸音が抗う術はない。即効で指示された行動を遂行しなければ、今度は幸音の命が危うい。

元凶は幸音というよりむしろ悠馬のほうにあったので、今回ばかりは彼女も庇うことはできなかった。ただし、僅かばかりの同情心

と友情はあったので、心の中だけで少年に謝っておくこととした。

幸音は白いカウンターの歪曲する台上、一番右部分にぽつりと置かれた電話に手を伸ばした。受話器を取り上げ、ぷるぷると小刻みに震える指先でシャープ、数字の9を押す。

『ピンポーン』

店内アナウンスの準備はこれで完了した。

幸音は背後でファイル片手に待機する陽子に、腰を90度折り曲げ両手で受話器を差し出す。

陽子は無言で頷き悠然と受話器を手に取ると、真直ぐに切り揃えられた前髪の下の瞳を伏せ、唇をゆっくりと開いた。

『本日もスーパーニコニコをご利用いただきまして、誠にありがとうございます。業務連絡します、倉科さん、倉科さん。4番です』

キラキラと輝かしいまでに瞳を光らせて陽子は非常ににこやかかつ、滑舌よく手本となるべき口上を店内放送に載せた。最後の言葉を切ると、接続でも悪いのかスピーカーが大声も出していないのにワーンと鳴いた。

傍に控える幸音はまるで怒りの余波のようだと唾を飲み込む。

「幸音ちゃん」

「はっ」

通話終了ボタンを右人差し指で押し、受話器を静かに置きながら陽子は幸音を振り返らずに声をかける。

「しばらく、店内一人になるけど。いいかしら？」

常の子供じみた声音でなく、年相応のレジ部門チーフたるに相応しい声音に、幸音は即座に両足をそろえて直立不動で姿勢を正し、軍隊の号令のように鋭く声を上げた。

「問題ありません！」

「結構。それじゃ、幸音ちゃん。三十分、レジ、ヨロシクね」

足に合っていないのか、いつも歩くたびにぱたぱたと音を響かせ

る陽子のパンプスが半長靴が如く硬質の音を生じさせる。

やがて悠馬に訪れるであろう恐怖を想像し、幸音は普段より大きく頼もしく見える陽子の背中に敬礼を送り続けた。

きっかり三十分後。

奇妙に上擦った店内アナウンスに呼び出された幸音は事務所のバツクヤードに訪れていた。探すのは無論、陽子であるのだが時間に正確なはずの彼女が何故かいない。代わりに副店長、西山三月がコア片手にのんびりと応じた。

「やあ。来たね。お疲れ吉村さん」

天然ワカメのような黒髪が自慢の丸眼鏡、瘦身長躯といった他に目の下に年中大きなクマを引つ下げ、栄養失調のため両頬がこけ、唇が紫色でパサパサという外見の一人の男が三台あるうちのパソコンの前でレンズを光らせていた。

「あれえ？ どうして三月さんがいるんです？ 六時くらいに帰ったんじゃないかったですっけ？」

陰鬱な表情で死神に取り憑かれた勢いで「帰ります」と申告して

帰ったはずの副店長が、何故いるのだろうと幸音は至極まともな疑問を浮かべた。

「まあまあ、座りなさいよ。立ち話もなんだしネ」

オカマっぽい喋り方が特徴の三月が勧めたのは事務室の中で一番まともな、綿の出ていない椅子だった。別段疲れてはいないが、幸音は好意を甘んじて受けることにし、今にも壊れそうなパイプ椅子に好んで腰掛ける副店長を不思議な面持ちで見つめた。

服装は白いパリツとアイロンのかかったワイシャツに、伸びて毛玉のつき放題の黒いカーデイガンと黒いスラックス、艶よく磨かれた黒い革靴を履くその姿は黄緑色のジャンバーさえ着ていればまさに営業時間内の副店長そのものだ。違うのは、喉仏が覗くワイシャツの襟元がくつろげられ、第二ボタンまでだらしなく開いた拳句、鎖骨が見え隠れしネクタイがないことだった。

「陽子ちゃんね、さっき帰っちゃったよ」

「え!？」

「いや。元々勤務時間超過してたから、今日こそは早く帰ったらどうかって退勤する前にススメただけだね。そしたら彼女、もうちょっといるっていうもんだから、適度にして帰りなさいよーって言

「ただだね」

「はあ・・・」

だんだん雲行きが怪しくなってきた会話に、幸音は真暗な画面が続くコンピューターのディスプレイを心配して、手垢で汚れた灰色のマウスを指でつついた。すると、画面はすぐさま待機画面を表示させ、副店長のせいで壊れたのでないとわかり安堵する。

三月は猫のような瞳を細めて、いったいどこから取り出したのかブラック無糖の缶コーヒーを幸音に差し出した。

「ありがとうございます」

両手で缶コーヒーを受け取ると、丁度良い温度に落ちていた。熱すぎて慌てることなくほっとする。

三月は頷いてかすかに微笑み、ココアを飲み干しながら缶コーヒーを飲むように指差して促した。

幸音は会釈してからプルタブをあける。きつく鼻孔をくすぐる、コーヒー独特の香りがふんわりと漂った。

「で、三十分くらい前、僕が自宅でテレビでバラエティ見ながら満天堂DSでゲームしてた時だよ」

「き、器用ですね」

「うん。意外にこう見えて、僕って器用なんだよネ。それでね、話を戻すけど、僕が自宅でゆっくり寛いでいた時電話が掛かってきたんだ」

嫌な予感というか、予測がついて幸音は口をつぐんだ。

三月は空になった缶を机の上において、キーボードをディスプレイ側に押しつけ、ほそっこい腕を机の上に投げ出した。それから深く項垂れて机に突っ伏する。

「陽子ちゃんがさ、鬼のような言語で僕に今から時間外労働しろって言っんだ」

「はあ」

「そりゃ、僕は仕事場が家から三分、カップラーメンが出来上がる距離にいる男だよ。僕だって副店長だし、店のことは陽子ちゃんよ

りも大切だよ」

「はぁ・・・」

「でもね、一日十時間以上働くのは今日ばかりは勘弁して欲しいって言うか、僕だって一週間に一日くらいは。いや、一ヶ月に一度くらいはゆっくりしたい日があるんだよ」

わかる、ねえ、わかる？

切実な表情で幸音に視線を振り向ける男を、少女は静かに見つめた。

風呂上りなのか、風呂から出た所を狙われたのかまだ若干濡れぼそつてくると巻きつく三月の頭髪を眺めやりながら、幸音は仕方なく耳を傾けてやることにした。

「それなのに、陽子ちゃんったら、自分が勝手に残ってるくせに」
気分を害したから帰らせてもらう。けどまだ売価変更が終わっていないから、後ヨロシク』って一方的に押し付けて電話切っちゃうんだよ」

ポロリ、と中年男の目尻から零れ落ちたのは透明な涙だ。

外見が性格を裏切っているのはなにも菅野陽子に限定されたことではなかった。超絶乙女チックロマンチストで性格がそんじょそこらの乙女よりはるかに乙女らしい副店長はぐず、つと鼻を嚙りながら幸音に切実に訴える。

なんだか聞いているこちらの身の上まで悲しくなりそうだったので、とりあえず幸音は男らしく机の端っこにおいてあるティッシュの箱を無言で三月に差し出した。

「ありがとう」

ティッシュを数枚取り上げて鼻を覆いちーんと鼻をかむ。それから再びティッシュを取り上げ、鼻をかんだティッシュを中に包んで綺麗に丸め、幸音から最も遠いゴミ箱にそっと投げ入れた。丸められたティッシュは綺麗な放物線を描き、静かに円筒形の籠の中に入ったのだった。

「はあ。世知辛い」

青色吐息。

悩ましげな表情を浮かべるその中年男の横顔に、幸音は心臓が大きく跳ねたような気がした。が、まさしく気がしたただけだった。

すんすんと鼻を吸る三月から視線を外し、壁にかけられている振り子時計に視線を向ければ、時刻は既に八時四十分を回っている。先ほど来る前店内を見渡したところ、取り立てて目立ったお客はいなかったし、今頃悠馬が一人で閉店準備をしているのだろうとあたりを付ける。

放置されればされるほど仕事量が増す悠馬の性癖を慮って、幸音はあと十分程度なら三月のOL風愚痴に付き合ってやれそうだと計算した。

「売価変更終わっ たんですか？」

そう尋ねたのは、おそらく終了しているだろうことを見越してだ。

三月がわざわざ陽子と交替したあと、悠馬を使って幸音を呼ばせた理由は全てそこにある。

「ああ。うん。それは倉科くんがやってくれたよ」

再びティッシュを手にちーんと鼻をかむ三月の姿に、幸音は手元のコーヒーを見下ろし、半ば呆れながら口をつけた。話を聞くモードに移行だ。

「まったく、陽子ちゃんってばどうしてあんなに粗暴粗野なのかな。他の従業員さんたちにはそうでもないくせに」

「……………」。他の従業員さんたちというより、そういう扱いを受

けているのは副店長をはじめとして倉科くんと高良さんと石崎さん、男性陣だけだと思いますケド」

外面大王で八方美人、とは高良の言だが、嫌いな人間と苦手な人間をとことん攻撃する陽子さんの暴走を止める手段を幸音は知らない。主に男性全般を嫌悪対象として認定している麗しの美少女陽子さんは、限定的に誰か特定の人間をいじめるという性癖を所持していない。

陽子が三月や悠馬に厳しい態度を取るのは、嫌いでないことから幸音が言わずとも本人達は理解している。嫌いな人間を完膚なきにまで叩き潰して再起不能にさせるくらいへそでお茶が沸かせるくらい簡単な陽子さんが、三月や悠馬を初めとした面々を放置し続ける理由は単なる好意の裏返しである。どう接しているのか分からないのではなく、そうすることが愛情なのである。

歪んだ愛情表現を数年間も目の当たりにしてきた幸音だからわかる推論だ。

「でもでも。あからさま過ぎないかなあ？ 流石に四年間も一緒にお店を作ってきた人間としては、もうちょっと軟化した態度を取ってくれてもいいと思うんだよね」

「といますと？」

「例えば、……………」

「……………」

「……………」

「……………思いつかないんですね」

「あいや、でも。ひとつくらいこうして欲しいってのはあるネ！

幸音ちゃんみたいに特別待遇で接して欲しいってわけじゃないケド」

「ケド、なんですか？」

これが陽子の中身だったらさぞ可愛いことだろうが、悲しいかな。目の前の男はただの中年盛りのオッサンである。

八の字に足を閉じる両膝の上に丸めた拳を載せ、椅子ごともしもじとする中年オッサンのどこが可愛いものか。不覚にも胸がキュンとなってしまうた自分を恥じ、幸音は顔を引き締めて問うた。

「せめて、もう少し僕のことを大切にしてくれたら……」

恥らって俯きがちになる三月の様子に幸音は見てはならない釜の蓋を開けた気分で、酸っぱい顔をした。劇画風の漫画なればこれ以上ないほど深い皺と縦線、横線が顔表情のくぼみというくぼみに影陰を生じさせていたことだろう。

「・・・・・・・・」

「あ、今大切にされて無いつて訳じゃもちろんないんだヨ！ 放置プレイも慣れてくればそれなりに楽しいって言うか、倉科くんみたくマゾに目覚めたというわけじゃないんだけどね。蔑むような目で見つめられるのも快感っていうか。って、どうしてそんな汚物でも見たような顔をするかなあ」

自分がそんな顔をしていたとはつゆ知らず、流石に副店長相手に失礼だと、幸音は顔を引き締めかけ、結局止めた。

この人は正真正銘真性のマゾヒストだ。

快感という言葉自体既にヤバイ。

悠馬も相当だが、アレは外見に目をつぶれば、高校生とまだ若いのだし今からいくらでも取り返しがつくような気さえする。

しかし、この目の前の男はダメだ。中年盛り、オッサンと呼ばれる分類の人間になってからそういう性癖に目覚めてしまつては人生オワリだ。

情状酌量の余地なしである。

「相当終わつてマスネ」

人間的に。

「ああ。その目もいいヨネ。でも吉村ちゃんは可愛いけど、陽子ちゃんみたいな鋭さはまだまだ足りないネ。大人の色氣つて言うのかな？　なんかこう、人を人とも思わぬ目！　アレこそ僕が求める境地なんだよ！」

分かるかい？

と幸音の両手を三月がぎゅっと握り締めた。

骨と皮で、必要以上に脂肪のない蜘蛛の足のような指がひんやりと幸音の両手を覆う。

そして突然、後方からぼと、と何か重いものが落下する音が聞こえた。

「あ、あ、あ」

震える声が多分一秒間に六十回くらい振動している。

ひんやりと死人のように冷たい三月の両手に目を落としつつ、ふと幸音が背後に目を向けると、仁王立ちの美少女が顔を青ざめさせていた。二つ結びが可愛い髪の色にはお決まりの桜色のサクランボ。違うのは、彼女が先ほどの仕事着ではなく、髪留めとそろいの色彩のフリフリワンピースに身を包んでいること。そして。

「ああ、菅原チーフ。急に落とすなんて、ヒドイっす」

ヒドイと言いながら頬を赤らめ、唇を緩ませている高校生、悠馬の姿。

陽子の足元に何故か体を横たえ、口の端から泡を吹いていた。

「ヨー「さん」

「陽子ちゃん！ わあっ！」

「ぎゃっ！ー！」

「いやあああああああ、幸音ちゃん!!」

「ぎゃあああああああ、いだだだだだ。ごっつあんです！
パンプスの踵でもっと俺を踏んでください、女王さまっ!!」

予測できない事態を、不測、という。

さつと幸音から手を離し、両手を背中に隠した紫色の唇の男はパイプ椅子から立ち上がりうとして失敗し、前のめりに幸音に覆い被さった。予想だにしない行動に流石の幸音も避けきれず、手に持っていた缶コーヒーを宙に飛ばし、なすがまま椅子から引き摺り落とされて後頭部を床に強打。と同時に、凄まじい炸裂音とヒューズがはじけ飛ぶ音が木霊し、電気がいつせいに消えた。

陽子の叫び声に重なるように炸裂音が爆竹のように事務所中に響き渡り、事務所に併設する牛乳やゼリー、豆腐やおからなどの在庫をストックする日配用冷蔵庫が不穏な音を立て始める。まるで、狂った包み割り人形のような音だ。

「うっ。重い。死ぬ」

暗闇の中、破裂する音と光り輝く閃光の中、状況がつかめぬままゆっくりと瞳を開いた幸音の鼻をくすぐるのは意外に柔らかいくる

くるワカメ。そして慎ましやかな胸の上に乗った大きな手と骸骨のような顔。間違いない、これは事故だ。

だから怒ってはダメだ。

冷静になれ、自分。

「三月さん、早くどいてください・・・」

怒気を押し殺し、幸音は通告する。

押し掛かる体重は長身の男一人分。いくら三月が痩せているとはいえ、骨や臓器などは成人男性と同様だ。つまり、かなりの加重が身動きできない幸音の体に襲い掛かっていた。いや、文字通り襲い掛かっていたのである。

「ご、ごめつ。吉村さん、ゴメツ。僕はそんなはずじゃ、すぐに退くから。と、あれ？ 意外にある」

「どけつ。すぐどけ！ さつさと退け、このブタ野郎！！ 汚らわしい汚物と同等のその薄汚い手を、すぐ、今、ナウ、幸音ちゃんから退けやがれ！！」

悲鳴を上げかけた幸音を正気に戻したのは陽子だった。

罵倒する陽子の声音に被さる「女王さまっ！」という声は、正気を失った悠馬のものと幸音は正確に理解した。

幸音を苦しめていた重い塊がようやく取り除かれ、部屋の隅に避難しゆつくりと壁伝いに立ち上がると、幸音は口を「う」の字に突き出して沈黙した。闇に慣れてきた視界が、スーパーニコニコで起こった一部とその全てを包み隠さず教えてくれる。

ショートして煙を上げる三台のコンピューターと火災警報器が防犯警報機かわからぬけたたましいベルの音、火花散るコンセントとパソコン本体。頭上から降り注ぐシャワーのような水。これは間違いなく、火災用スプリンクラーだ。誤作動でも起こしたのかと一瞬思ったが、幸音は哀愁のこもった瞳で首を左右に振った。

指先でマウスをつつくと、パソコン画面は既に反応を放棄していた。立ち上った本体からの煙が、紛れもなく火災警報器を刺激したのだ。これでは、二階事務所のコンピュータも死亡している確率が高い。そうなれば、明日、レジは使えない。悠馬がおそらく陽子に罵倒されながら打ち込んだ売価変更の苦労も全て水の泡だ。いったいパートのおばさんたちにどう弁解してくれるのやら、幸音は他人事のように彼らを見つめた。

足蹴にされる悠馬と、正座しつつ土下座するワカメ男、狂ったように罵詈雑言を迸らせる陽子。

幸音は腕時計を見た。

時刻は9時3分前。

店内に客がいないことを祈りつつ、幸音はびしょぬれの体のままそっと、事務所を後にした。

幸音の自宅は、スーパーニコニコから十分程度の距離にある赤い屋根の一軒家だ。役所の近くに居を構え消防署からも近い。純和風の敷地を誇る隣の家と、大正時代の西洋風の洋館との間にすっぽり収まっている現代風の普通の家だ。

結局、正気に戻った陽子たちと水浸しになった事務室を片付け、閉店準備を終了させ帰宅すると時計は十時半を回っていた。

玄関口に電気がついており、リビング付近から笑い声が聞こえるところを察するに家の住人はまだ起きているようだ。元々夜行性の幸音の家族達ときたら、最近は夜中の十二時に寝る日が多くなっている。

仕事で既にくたくたで、面接の失敗で精神を疲弊させた幸音はよろけた足取りで玄関のたたきを上がった。靴を脱いで靴箱に収め、陽子手作りニットの靴を二階へ上がる階段にそつと横たえる。眩暈に似た疲労感がどつと押し寄せ、幸音は眉根を指でつまみながら頼りない足取りでリビングへ至る通路を渡った。

「ただいまー」

扉を開けてリビングに会する面々に挨拶をすると、丁度夕食を食べている一人の少女が箸持つ片手を挙げた。

「お帰りなさい、幸音さん」

「恵美ちゃん、ただいまー」

ショートボブのりんごほっぺをした大人っぽい顔立ちの少女が微笑んで幸音を迎えた。その背後にコタツに潜って蜜柑を食べる母親と、同じくコタツに入って居眠りをしている父親の姿、そして。

「さっちゃん、おかえり」

紙袋が会釈をする。

「ただいま、透くん」

紙袋には目と口がついていた。正確には、その部分だけ人工的にくり貫かれ、本来あるべきはずの唇や瞳などは存在しない。ただ、紙袋の内部構造が外から割合詳細に観察できる。

ハロウィンのジャック・オ・ランタンに及ぶべくもない、ただの紙袋である。

紙袋をかぶった誰かはハートマークがいか^{可愛らしい}がわしい厚手のニットの上着と、空色のワイシャツを着ている。ダメージジーンズは細身で、中にみっちり肉が詰まっている風でもなく適度に皺と空間が広がっていた。胴回りにしがみ付いているのはレースのついた白い前掛け風エプロンで、割烹着が一番好きな透にしては珍しいチョイスだと幸音は考える。

彼の白い靴下の下に影はなく、紙袋を被る何者かは白い手袋を嵌めた手で器用に柿を剥いていた。

「どうしたの、その柿？」

橙色の艶やかな果実から丁寧な種を取り除く紙袋、四辻透に幸音はダイニングの椅子を引き寄せながら尋ねた。

「あ、あのねえ幸音さん、ほれ、あたひが」

「ほらほら恵美子ちゃん、食べながら喋らない。行儀が悪いよ」

ナイフの先端を恵美子に向けながら透が嗜める。

「透くん、ナイフナイフ」

「おっと、これは失敬」

透は一度ナイフをまな板の上に置いた。

それから淀みなく剥き終わった柿を食卓に並べながら台所へ移動する。

「さっちゃん、今日は遅かったね。仕事大変だったの？」

透はガスレンジの火をつけた後、幸音専用のお椀を戸棚から取り出した。電子ポットのスイッチを入れてお湯を再沸騰させ、急須の茶葉を捨てて新しいのを缶からひと匙半入れる。

「透くん、お風呂まだタイマー鳴ってないかしら？」

蜜柑を食べ終え、お茶を啜った母親、悦子がリビングに立つ透に声をかける。

「あ、お母さんさつき入りましたよ。どうぞ、お入り下さい」

「わかった。ありがとう、透くん。最近、年のせいか聞いたことす
ぐに忘れちゃって」

ほほほ、と口に手を当てて笑い「よつこらしよ」とコタツから起
き上がった母悦子が、傍らで熟睡していた夫、光郎を揺り動かす。

「ほら、お父さん。こんなところで寝てたら風邪引くわよ」

「ん、ああ」

うつすらと目を開けた穴熊のような父親が深く頷いてあごひげを
撫でた。

「恵美子ちゃん、悪いんだけど、明日隣の八重子おばさんに夕方、
棚の中の大家饅頭持ってつてくれる？ 柿のお礼に」

「あ、はい、おば様。了解しましたー」

箸を卓上において、敬礼をする恵美子に悦子は満足げに微笑み、
最後に実の娘幸音に声をかけた。

「あ、そうそう幸音」

「はい？」

「戸締りと火のもただけはヨロシクね」

「……はい」

実の娘と交わす会話は本日これにて終了。

悦子は夫を再び揺り動かし浴室へと向かうべくリビングを出て行った。父親も大きな体を動かし、のっしのっしと去っていく。静かに扉が閉められ、テレビのバラエティ番組の司会の男が腹を抱えて笑う声が部屋中に木霊した。

「」馳走様でした」

「お粗末さまでした」

両手を合わせて食事を終え、食器を片付け始めた恵美子をぼんや

りと眺めやりながら幸音は机の上に顔をぺたりと貼り付けた。

はぁ。疲れた。

心のオアシスが欲しい。

「はい、お待たせしました。今日のお夕飯は十穀米と蕪の味噌汁、サトイモの煮っ転がしと冷奴、それからさばの煮付けですよ」

顔を上げた幸音の鼻孔を味噌の香りがくすぐった。

透が青い花柄の盆に味噌汁やらご飯やらを乗せて現れた。手際よく濃い緑色のランチョマツトの上に夕飯が乗せられていく。香るだけで心が落ち着くような気持ちがして、幸音は「これだよ、これ」と小さく呟く。

見た目にも美しく、丁寧に盛り付けられた鯖の煮付けの焼き皿。白地の安い器も何故だか透が盛り付けするだけで料亭の皿のように見えるから不思議だった。茗荷が一本、バツテン印を付けられた鯖の上皮に乗っている。鯖はよく味がしみているようで、琥珀色のこってりとしたタレをドレープの如く纏い存在を主張していた。

粟や黍、古代米などと共に炊き上げられた米は普通の白米とは違い、かといって赤飯ほど赤くもなく、美しい薄紫色に色づいている。味噌汁の中の蕪は、丁寧に皮が剥ぎ取られ、出汁で下処理でもしたのだろう、果肉がうっすらと透明になっていた。サトイモの煮っ転がしの上には刻んだ柚子が盛ってあるし、冷奴の上にはたっぷりのきざみ葱と鰹節が踊っていて、見た目にも食欲をそそる。

「さあ召し上がれ」

「いただきます」

幸音は両手を合わせて頭を垂れた。サトイモに箸を付けながら小さく欠伸をすると、幸音のためにお茶を淹れた透が先ほども恵美子が座っていた椅子を引き寄せて腰を下ろす。恵美子は台所で自分が食べた後の食器を洗っている最中だ。

「さっちゃん、今日はいったい何があったの？」

恵美子の鼻歌を耳にしながら幸音はサトイモを口に運んだ。するとじつくりと染みこんだ甘辛い出汁の味とサトイモ独特の粘っこい甘さが口の中を駆け巡る。オフクロの味である。

幸音はじつくりとサトイモを咀嚼して名残惜しげに嚥下すると、醤油指しを片手に取り少しでも冷奴につけた。

「副店長がパソコンに触って店のパソコンを全滅ショートさせた挙句、火災警報器と警備用センサーが誤作動してセキリティ会社がやってきて、それからヨーコさんが警察に悠馬くんを変質者として突き出そうとした」

「わー」

「ところを、何とか三月さんとあたしが押し留めようとしたんだけど、全身水を被って文字通り死人か幽霊か吸血鬼か死神かわけのわかんなくなった三月さんを見たセキリテイ会社の人が超驚いて警防を振り回して、うっかりヨーコさんに当たって乱闘騒ぎ。・・・地獄だった」

喋れば喋るほど、悪夢のような一時間が思い出され幸音は切なくなつた。頭痛までしてきて、二日酔いの後のように脳内が割れ鐘を叩いたようにわんわんと鳴り響いていた。

「それじゃ、明日のバイトにも差し障り、出そうかなー」

食器を洗い終え、リビングに戻ってきた恵美子が呟いた。コタツにもぐりこんで籠にこんもりと盛られた小さな青っぱい蜜柑に手を伸ばす。

「恵美子ちゃん、柿の存在忘れてるよ。ほら」

「ああー。すっかり忘れてた。ゴメンゴメン、よっちゃんが食べれない分、しっかり食べとかなきゃね」

種まで取り除かれた柿が盛られた皿を透から両手で受け取った恵美子は、再びコタツに体半分を埋めた。

「今日も大変だったねさっちゃん。ほら、お茶飲みなよ。冷え切った体もあったまるよ」

透が差し出した湯飲みが白い湯気を立てている。

白い手袋を嵌めなければ氷のように冷たい透くんの指先を見つめながら、幸音は静かに頷いた。

今日もぶっ飛んだ一日だった。

明日はいつたいどんなトラブルが起きるのか、今から楽しみ（不安）でならない。

「あ、そういえば。今日、職業安定所からさっちゃん宛にお手紙届いてたよ」

「ハローワークから？」

ちょっと待ってねと言い置いて、透くんが席をのっそりと立ち上がる。

ダイニングの傍ら、透が購入を二週間悩みに悩んだゴパン焼き機を乗せる電子レンジの黄色い編み籠の中に一通の茶封筒が納まっていた。90円で届くタイプの代物で、湿気のためか少しよれている。

「はい。これ」

差し出された茶封筒を左手で受け取って幸音は十穀米を口に含んだ後、箸を置いた。

封筒の表書きにはなるほど、「職業安定所、ハローワーク立前」との文字が刻印されている。裏には幸音の家の住所と、幸音本人の名前が印字されていた。まさしく、幸音宛の封筒である。

「今日の面接も散々だったみたいだって友達から聞いたよ。次こそはいいところだといいね」

透の情報網についてとやかく言うつもりはないが、これではあの場所ですぐに何が起き、何がどうなったのかも詳細に知っている様子である。ストーカーではないが、ストーカーも裸足で逃げ出す透くんの情報網の凄さを幸音は今更ながらに痛感した。

「はい。これ封筒カッターね」

手渡された赤く四角い小さなカッター。

四つの角の一角に小さな窪みがあり、底に尖った歯が覗いている。まるで小犬の歯のようだ。その中に封筒の上部を差し込んでスライドさせると、封筒の糊付けに四苦八苦することなく、いとも簡単に封を切ることが出来る優れものである。こういう細かなところに気が利くのが透くんのいいところだった。

動くたびにかさかさと音を立てる本日は四角い紙袋姿の透の横で、幸音は封筒を開く。中から三つ折になった白い取り出して開くと、二枚あることがわかった。

「なになに。……職業安定所から求人票の送付について。拝啓 晩秋の折、ますますご清祥のことと存じます。平素は職業安定所をご利用いただきまして、誠にありがとうございます。さてこの度ご送付させていただきました求人票の件について」

二枚目の紙をスライドさせて取り上げると、なるほど、いつも職業安定所で印刷してくる求人票がそこにあった。事業所名と所在地、賃金、待遇、保険、賞与、勤務時間、面接方法などが事細かに明記してある。

幸音は透に求人票を差し出し、自分は手紙の続きを読んだ。

「お送りさせていただきました求人票、事業主からの要望を頂き、ご送付させていただきました。つきましては、12月1日までに職業安定所に来られるか、下記電話番号まで面接の有無についてご連絡下さい。なお、職業紹介カードの発行につきましては面接が決まり次第発行させていただきます。敬具。……だつてさ」

「つまり、この会社の事業主がさっちゃんを採用したいから面接に来て欲しいって事？」

幸音は難しい顔をしながら透に読み上げていた手紙を渡す。交換に求人票を手にとって幸音はざっと目を通した。

表面的に見れば別段奇妙なところもない普通の事業所に思えた。

給料は総支給で17万8千円。

保険等も完備。

交通費も上限四万円まで支給されるらしい。

週休完全二日制で勤務時間は朝の九時から夕方の五時半まで。

一時間半休憩確保。

年金制度は三年目以上から。

賞与は年二回、約二倍の給与がボーナスに当該するようだ。

事業所はハローワークのある立前町の隣、初市にあるように求人票裏面の地図によれば国道二号線沿いに居を構えているらしい。駅からは徒歩で十分程度のもので、この距離なら通えぬ距離でもないし運転免許を所持している身の上としては車さえあれば通勤も出来そうだ。

ちなみに自家用車^{マイカー}通勤も許可されるようである。

「年齢は30歳以下。若年者積極採用なんたらってやつか。事業所人数はパートが2名、社員が18名、総勢20名ね。必須資格は・・」

「資格は？」

用紙の文面に目を通し終わった透が続きを促す。

番組がつまらなくてチャンネルを変えた恵美子が柿を口に突っ込みながら、幸音に振り返った。

ふとした沈黙が振りおり、幸音はすっかり冷めてしまった蕪の味噌汁の水面に映る自分の間抜けな顔を見つめた。

「要資格、魔術師ライセンスA以上取得者」

ナニコレ。

掠れた声が唾を嚥下した幸音の喉底から漏れた。

電灯の灯らない薄暗い店内のカウンターの中。自分が後一時間後に入る必要があるレジを見つめて、幸音は絶句した。

昨日の自体は夢だったのかもしれない。

「…………コレハ」

驚くべきことに、といっても放置すれば業務全体に差しさわりが出るので他店舗から借り入れるのだらうということは昨日の時点で予測していたが、まさか。

「まさか…………」

幸音は顎を落とし、緑色のファイルを捲る陽子の背中越しに、新品新調されたいらしいＡＣＡのレジに驚いた。開店一時間前、入荷商品補充のために出勤してきた幸音は、昨日の騒動がまるで夢だったのかと錯覚するようなぴかぴかに光り輝くレジディスプレイに目を瞬かせた。

全自動でないものの、手持ちスキャンからレーザー内臓のチエツカーガラス。電子統一された品名押しボタン（「トマト」「キュウリ」などバーコード読み取り不可の商品を別途押すためのボタンやリピート値引きの際使用するボタンの一覧）、手打ち数字ボタンに至るまで全てが真新しかった。

「エヘヘー。すごいでしょお。店長が朝一で設置してくれたんだ」

幸音の背後から陽子の明るく伸びやかな声が響いた。

「店長？」

「そうなの。あの腐ったオッサンの顔朝から拝んじやって本当に最悪な気分だったんだけどね、あの店長が久しぶりに店に出現したんだよ。明日は天から槍が降るかもね」

開店前だということもあり三台あるうちの全てのレジは今だ眠り

についているが、幸音は心躍るような心地で興奮気味に陽子を振り返った。

「ぜ、ぜ、ぜ」

「全自動じゃないよ。預かり合計打ち込み式。釣銭についてはこれまで通り」

「っ、っ、っ」

「釣り銭台もこの際新調したみたい。今までの、古かったもんね。あと、ポイントカードリーダーも最新鋭式になりました！今まで通らなくてレシートにはんこ押してたカードも全て対応の優れたものでもうち、クレジットは取り扱ってないから、クレジットカードスキャンは従来どおりまったく関係ないけどねっ」

腰に左手を上げて前かがみになり、得意げに幸音に人差し指を突きつけた陽子は極上の笑顔を振り向けた。

「まあ、流石に昨日の一件は反省してるんだよ。幸音ちゃんにはすつごく迷惑かけたって。あの生物指定外生命体の副店長の野郎がパソコンぶっ壊しやがっただけでも卒倒しそうなのに、飛び出た煙のせいでスプリンクラー誤作動起こして全身びしゃびしゃ。あたし達が事務所で散々だった間、この冷凍庫みたいな店内の閉店準備全部

一人でしてくれたもんね。ホントに、ホントに、ほんとにほんとに、ほんつとにゴメンネ、幸音ちゃん！ お詫びに今度飲みに行こうね！」

陽子と飲みに行くことが果たして本当に「お詫び」になるのか幸音ははて、と小首を傾げたが気持ちだけ受け取っておこうと愛想笑いをしようとしたときだった。

「黙れ、このザル女。自分の欲望を満たす出汁にコイツを使うな」

「ああ、高良さん」

「よ。グッモーニン、吉村。お前も朝から大変だな」

火のついてない煙草を口の端に銜え片手を挙げてのっそりと現れた青年に幸音は頭を下げた。彼の名前は美宝高良。25歳のフリーターである。愛称は「高良さん」でおじいちゃんおばあちゃんに人気の見た目は爽やかな好青年だ。

「ちょっと、高良ちゃん。店内は禁煙ですよ！」

陽子は両手を高良の口めがけて突き上げ、煙草を取り上げようとして失敗する。

「なに言ってるんのお前、ちゃんと目えついてんの？ 火い点いてないでしょーが。これじゃ喫煙とはいえないだろうが」

「そついう問題じゃないです！」

高良の身長は172センチ。

高校生の倉科悠馬には負けるが、背の高いことでは勿論陽子を凌ぐ。

成人男性らしい広い肩幅に程よくついた筋肉。背筋はたまに猫背となるが、全体的にしゃんとした印象を他に与えている。少し長めに切り揃えた黒髪は清潔感があり、形のよい耳がその隙間から垣間見えている。

足のサイズは28センチと巨大だが、それ以外は特筆すべき点もない普通の青年だった。

「あーはいはい。ムダムダ。菅原が俺に敵うわけないだろ、と。吉村あー、新しいレジのシステム自体は以前と同じだから、ボタンさえ打ち間違えなきゃ問題ないだろ？ 返品処理も施設等入金処理も以前と同様にいじつといた。防犯システムについては従来通り、い

じるところが見つからんから放置。変更なし。非常に原始的な装置だが、こればかりは仕方がないだろう」

言いながら高良は陽子の頭に片手を乗せて乱暴にかき回した。そうなると当然、陽子の髪の毛は鳥の巣のようにぐしゃぐしゃになる。無論陽子は思いつく限りの罵詈雑言と両手の握力を駆使して高良の大きな掌を押し返そうとするのだが、幸音には妹が兄にじゃれている様子にしか見えず、陽子を見つめる瞳に深い憐憫の情を宿した。

「了解？ 吉村」

「あ、はい。防犯の件合わせて了解ですが、よくもそんな芸当できましたね。店長がこの最新鋭機器持ってきたの、早朝なんでしょ？」

視線を高良に戻し関心を寄せると、彼は深く感慨深げに首肯した。

「そー。もう大変だったのなんのつて。朝の五時、俺がようやくパソコンの電源切って仮眠取ろうとした時、電話が鳴りやがってさ。クッソバカ、誰だよこんな朝っぱらとか思ってたら、珍しく店長じやん。だったら仕方ねえなつて電話に出たら、今日から新導入するレジのシステム切り替え業者が間に合わないんで、俺にやれって内容だった」

「で、断りもせず承諾したんですか」

開いた口がふさがらぬまま幸音は目の前のひよろりとした青年を見上げる。

高良は顎先に僅かに浮いた髭を指先で撫でながら、ひと刷毛塗ったような目の下のクマを擦って「ん」と応える。陽子から手を離し銜えていた煙草を取り外し、目頭を押さえる。

「店長の頼みだからな。こればかりは断れん。そういうわけで、俺の出勤時間二時間押して11時から5時まででヨロシク」

高良は煙草を銜えなおし、陽子に流し目を与える。

陽子は視線に気付いて顔を上げると、ぐしゃぐしゃになった髪を直していた右手を高良に向けて突き出し、親指を下方向に突き立てた。

「わかりました。１１時から明日の早朝５時までですね、高良ちゃん」

死ね、コノヤロウと陽子は満面の笑みで言い放つ。

「バツカお前、俺を殺す気がこの鬼畜女。ああ、とにかく、そういうことで俺は今から自宅に戻って寝る。二時間経って出てこなかったら三月さんに電話させて。じゃ」

陽子の毒舌を穏やかにスルーして高良は片手を挙げて飄々と去って行ってしまった。広い背中が自動でない自動ドアの向こう側に消えると、幸音の傍らに立ちすくんでいた陽子が悔しそうに一声上げる。

「悔しい！　なんで高良ちゃんってば、あたしの言うこと聞いてくれないのかしら！」

「・・・」

弁明すべき言葉が見つからず幸音は唇をつぐんだ。

可愛らしく陽子が怒っているうちは店はまだ安全だ。

幸音は自分自身を納得させて今日のシフトを再度確認するため、緑のファイルに手を伸ばした。

「あ、そうそう。言い忘れてたけど幸音ちゃん」

「はい？」

自分のレジ番号と今日一日の仕事の流れを確認しようとしていた幸音の隣から、再び陽子の声がかかった。

陽子は少し爪先立ちになりながら本日の夕方、11月19日の午後4時を指示す。そこには「新人研修・指導【吉村】」とボールペンで文字が書き入れてあった。これは昨日の時点ではなかったものだ。

「新人研修？」

「うん！ ほら、夜間のアルバイト募集してたって言ったでしょ？
で、店長がこの間面接して決めて」

「店長……いつの間に」

「迷惑この上ないことに店長、勝手に決めやがって、今朝急に今日
四時に来るとか言い出しやがったんで、急で幸音ちゃんにはすつこ
く申し訳ないんだけど新人研修と簡単な店内案内、レジ指導よろし
くお願いします」

ぴよこんと陽子の桃色サクランボの髪留めが跳ねた。ふわふわの
材質で作られている毬藻のような丸っこいソレを見つめながら、幸
音はしばし考え脳内の予定に組み込んだ。

「それはいいですけど、私でいいんですか？」

「うん！ もちろんだよ！！ ホントならあたしがしなくちゃいけ
ないんだけど、今日午後からレジの部会があって、すぐに帰れそう
にないんだよね。出来るだけ早く帰ってこようと思うんだけど……」

「

「イエ。任されれば喜んで指導させていただきますけれども、一時
間くらい手間取ると思います。その間、レジ大丈夫ですかね？」

今日の夕方のレジには5時まで高良、パートの早瀬さんと幸音の名前が書かれている。四時に新しいバイトの子が来るとなれば、必然的にレジは二人となり、お客が込み合う四時から六時の間が非常に不安だ。

「ああ、その点は大丈夫！ 恵美子ちゃんが早めに来てくれることになってるから。学校終わり直で来ますって昨日の夜メールが来たから安心して。多分遅くても四時半には来てくれるらしいよ」

同じ家で暮らしているのにもかかわらず、そのあたりの事情を幸音は知らず少し寂しく思った。だが、気を取り直して今日の六時までの仕事の流れを再度チェックする。

「しばらく、当分は幸音ちゃんに結構負担がかかると思うんだけど、ソレも年末が終わってしまえば後は年始だけ！ もう少しだから一緒に頑張ろうね！」

年始まであと一ヶ月半分くらいありますがという突っ込みを喉の奥に飲み込んで、幸音は大きく頷いた。

「ところで、今日来る新しい新人アルバイトの子の名前はなんていうんですか？」

「庄野由貴^{なりゆき}。近くの国立大学現代魔術学部の超優等生って噂の、魔導師さんだよ。すごいタレ目の！」

「タレ目・・・」

ああ、なるほど。

幸音は陽子がそれ以上語らないのをいいことに雑念を全て頭の中からシャットアウトし、仕事に取り掛かるべくファイルを閉じた。

第2章 トラブルメーカー 新人アルバイト

薄闇がそぞろに歩いてきたような夕暮れ。

雲行きが怪しくなり黒雲が立ち込めはじめた山側の空。

1レジでストック袋を作りながらお客の対応を終えた幸音は、群青色に染まりつくした店の外の風景をぼんやりと眺めていた。

いつにも増して空調が効き過ぎている冷凍庫のような店内にはざっと見るだけで十組前後のお客が存在する。まばらに店内を巡り、青果、精肉のスペースでゆったりと足を運んでいた。

「そろそろかねえ」

2レジで猫背気味に接客していた高良が鈍い声を出した。

事前予告どおり、高良が11時を過ぎても現れなかったため三月が高良に電話をかけたのはもう5時間程度前の話になる。

コンピューター機器と配線が複雑に絡まる高良の自宅に立ち入り禁止令を敷かれている三月は、もちろん自宅に行つて揺り起こすなどという粗相をするはずもなく1分おきのモーニングコールを自前の携帯からかけ続けていた。

何故パソコン、レジ等電子機械を破壊するくせに携帯電話とテレビと満点堂DSだけ未だに無事なのか、幸音は相変わらず理解できない。これもまた、ニコニコスパー六不思議のひとつである（元は七不思議だったのだが、一つは解決されたため現在六つとなっている）。

「そろそろですかねー」

入り口の自動ドア付近の柱に打ち付けられている白い時計に眼を向ければ、時刻は四時十分前。よもや四時ぴつたりに来ることはないだろうから、そろそろ新人アルバイトが来る時間といつてもよかった。

購入した荷物をお客が詰める台をサッカー台というが（別に玉蹴りをするわけではない）、そこに林立する人の数も徐々に多くなつてきている。恵美子が顔を出すまで後三十分以上もあり、パートの早瀬さんは現在入荷食品の陳列業務に勤しんでいる。レジが忙しく

なれば店内放送で呼び出してね、と助力を惜しまぬ主張をしてくれたが、山のように存在する入荷食品の陳列作業中に何度も呼び出す暴挙はしたくなかった。

それに今日は新導入されたレジのせいで、いつものスピードでチエッカーが出来ない。会計まであまりお客を待たせた事例はないものの、恵美子のことを考えると不安だ。

「ま、忙しくなったら菅原呼べばいいじゃん」

軽口を叩きつつ、新たにレジに訪れたご婦人の応対をし始めた高良の言葉に幸音は反射的に頷いた。

陽子は現在レジ部会中で本部に赴いており、早く帰ってくるとはいつたがまだ帰ってきていない事実を彼は知らない。だからこそ、高良が存命しているのだが。

陽子は他人の時間に厳しい。もっと正確にいうと遅刻を絶対に許さない。

ただし、男性陣に限る。

「どうしたのよ、いつも以上に辛気臭い顔しちゃって。ぺちゃくれ

た顔がますますぺちやくれるわよ」

流麗な水流を思わせる声音に幸音は顔を上げた。

「潮さん」

そこには赤毛の長身の美女が立っていた。

項でひとくくりにした長髪と赤く引いた唇は艶やかで張りがあり
艶かしい。白いネット付き帽子と白色の作業着を身に纏いクロツキ
ーで引つかいたような傷が残る長靴を履いている。

漂白された白一色の衣服を着込んだ女性は、胸のふくらみを強調
するように姿勢を正したまま嫣然と微笑した。

「なーに。そのぼやとした表情は。まあ、いつものことだけどさ」

潮が両手に抱えているのはおにぎりとお茶のペットボトル、二段
重ねになった弁当だった。今日もいつものように大量の食料を短時
間で胃に流し込む気らしい。夕食ではなく、おやつ程度の買い物で
あるということが恐ろしい。

潮の担当部門は鮮魚だ。

実家が魚屋の彼女らしい就職先と言えなくもないが、幸音は潮に直接いえない言葉を嚴重に喉の奥に引つ込めて封印した。一言でもその言葉を発すれば、潮が柳刃包丁で襲い掛かってくることは明白だ。

幸音はこの若さでまだ死にたくなかった。

「ほら、さっさと打ちなさいよ。後ろが詰まるでしょ」

といっても、潮の背後に客はいない。

ざっと見渡してもレジに近寄ってくる客はなく、人といえば丁度高良が接客していたご婦人の会計が終了したくらいだ。

「あたしの美貌に見とれるのはいくらでも結構だけど――」

「お預かりいたします。298円、88円が二点、120円の30円引き」

幸音は即座に手を動かした。

反射と言ってもいい。

台の上に置かれた弁当を両手で丁寧に取り上げ、バーコードをリーダーに読み取らせる。ピッピとリズム良く読み取り音が生じ、幸音は透明な袋（肉やこまごましたものを入れる袋）に手際よく弁当とペットボトル、おにぎりを詰め、箸を一つ突っ込んだ。

幸音は画面に映し出された合計金額を確認し、にっこりと微笑して潮を見上げた。

「ありがとうございます。1万5千円頂戴いたします」

「あ、はいはい。1万5千円ね、ってこのひょっとこバカ娘！」

潮の大きな拳が幸音の頭頂部に落ちた。

稲妻が目を走り星が舞う。

容赦なく下された拳骨に幸音はたまらず頭を抱えしゃがみこんだ。
ひどい痛みが脳細胞を確実に四万個くらい死滅させた。

涙目で幸音が潮を見上げると、彼女は高級ブランド「ロイ・ビ・
トン」の黒い薔薇柄の財布から千円札を取り出した。

「バカやってないでさっさと会計してよね。休憩時間が減っちゃう」

鮮魚コーナーで魚をさばき続けるためだろうか、腰が痛いわあと
何故か肩を回した潮の男前な両肩から間接が外れたような音が響き
渡る。

「よう。相変わらずだな。し、ず、お」

「ぎゃあっ」

ふうう、と潮の耳に息吹きかけ、彼女を飛び上がらせたのは例によつて例の如く高良青年である。

「なにすんのよバカッ!!」

「ご挨拶だな。バカやってんのはお前だろうが、静男」

潮は財布を握り締めたまま内股で片耳を押さえた。

幸音は釣り銭台の上に落ちた千円札を掴み取るとレジ台の左側に存在するマグネットで千円を固定し、数字ボタンで千円を打ち込んだ。現計ボタンを押すと、商品合計564円の差額分436円との数字が表示される。

お釣りである。

「んもう！ 美宝ちゃんったら、誰よその静男って！」

「お前だ、お前。本名、潮静男。人の名前にケチつけるのはオレの道理に悖るが、お前の親父さん達、いったいうちの倅のどこが静男

なんだかって歎いてたぞ、一昨日」

高良が潮の相手をしている隙に、幸音はとっと小銭を指先で拾っていく。一円たりとも違算が出ぬように慎重にすばやく。

小銭を全て右手に乗せると、開いた左手でレシートを取りその上に小銭を乗せて潮の方へ突き出しかける。

「嘘言わないでよ！ 大体、あんたこの一年間アタシの家に寄り付きもしないじゃないの！」

「そりゃあお前。お前が女装趣味なんぞに目覚めたからだろうが。この変態野郎、趣味で女装なんてやってんじゃねーよ」

心は女、でも体は男という性同一性障害的な病であるなら仕方がないと思うし、幸音も心を捻じ曲げてまで望まない姿であろうとする必要はないと思う。

しかし、この女性、でなく男性は正真正銘趣味の一貫として「女装」をしているのだ。

胸のふくらみは肉まんなどという旧時代の遺物ではなく、ネット通販で購入したというオイル式胸パッド内臓の豊胸ブラジャー（色

彩は黒）。さわり心地が最高なのよ、と幸音に見せびらかしに自宅を訪れたのは四日前のことである。

自前だとA Aカップのクセに、ブラジャーを装着してDカップになった静男を白々しく見つめ、幸音は息を吐いて新しい透明袋を取り上げた。その中にレシートと小銭を全部ぶち込んで潮の弁当の中に入れてやる。

高良と潮は家が近所の隣同士の幼馴染で仲がいいのか悪いのか、顔を突き合わせるたびに目の前のような事態に発展する。

「なによ！ 趣味と実績かねてやってるだけで誰にも迷惑かけてないからいいじゃない！ それにアタシのこの美貌目当てで店に来るお客さんだっているのよ」

噛み付く勢いで高良に向かい合う潮の目に、もはや幸音の存在が認知されているはずもない。

「誰にも迷惑かけてない？ 寝言は寝てから言え、この勘違い男。誰もおぞましくて口に出せんただだろうが。そのあたりをきちんと弁えた上で頭に叩き込め。実績というが、いったいどの誰が前のビボーとやらに惹かれて店にやって来るんだ？ そいつを連れて来い。病院を勧めるか目ん玉割り貫いてやる」

「んまああああああ！　いくら美宝ちゃんでも言っていいたいことと悪いことがあるのよ！」

静かに嘲笑する高良の唇に皮肉な笑みが浮かぶ。

潮に対する高良の態度を見ると、散々な言われようの陽子さんもずいぶん手加減されてるのだなあと、幸音は他人事ながら感想を浮かべる。

金切り声を上げて高良にしか届かない言語で猛反発を始めた潮を観察していると、ふと背中から視線と気配を感じ、幸音は振り返った。

「あのう」

おずおずというように片手を挙げて恵美子が立っていた。

「あ、恵美ちゃん」

ショートボブの少し大人っぽい表情の彼女は、言うべき言葉を必死で頭から手繰り寄せようとし、結局上手く言葉が見つからないまま視線を動かした。

「あ」

タレ目だ。

緑のファイルを手困惑気味の恵美子の視線が示すもの。

ペコリと礼儀正しく頭を下げた白髪、タレ目の青年がそこに立っていた。

新人アルバイト、庄野由貴。

恵美子が困惑している理由も十分承知できるが、それ以上に幸音は驚いていた。白髪というよりも、タレ目に。ここまで見事なタレ目を、幸音はお目にかかったことがない。

長い睫に整った眉、すっと通った鼻梁に形良く引き結ばれた唇。白皙の肌に刺す朱は薄く、かといって副店長より血色が悪いわけもない。ただ、どんよりと気だるげに幸音に向けられ続ける双眸は目尻が外側に向かってなだらかに傾斜していた。

どんくさいという印象でなく、不思議と青年の雰囲気合っていることは合っているし、醜悪な外見でもない。親しみをもてるかと聞かれれば、即座に「NO」と答えることはできるが、庄野由貴ほどタレ目が似合う人物を幸音は知らなかったし、たぶん他の面々も同じ感想を持つだろう。

「幸音さん、レジ代わります」

するりと無駄なく幸音をレジから追い出し、責任者番号を自分の番号に差し替えた恵美子は、必死に笑いを押し隠すように肩を小刻みに震わし、顔を幸音から背けていた。

呆氣にとられる幸音の彼方で言い争いをしていた声がぴたりと静止する。

幸音はこれ以上なく嫌な予感がして、彼らが動き出す前に先手を打った。

「ま、待たせてゴメンネ。ええと庄野由貴くん、ですか？」

「はあ、まあ」

なにが、はあまあ、だコラ。

年上に対する礼儀というものがわからんのかテメエ。

と、陽子なら我慢せずに言っただろうが幸音は陽子ではないので、笑みの裏にひっそり言葉を隠した。

「はじめまして、こんにちは。パートの吉村幸音です。今日は、庄野くんの指導を菅原チーフから任されています」

日本人らしく笑顔と軽い会釈で由貴に自己紹介をすると、彼は視線を逸らし耳の裏を手で掻いて肩を竦めるような会釈を返す。

「コンバンワ。庄野由貴です。よろしくお願いします」

気恥ずかしいのか、どことなく慚然とした声音で由貴は応じた。

生来無口なのか緊張しているのかわからないが由貴が大した反応を見せないのも、幸音は間を持たせるために背後で首を長くして待っている人々を紹介してやることにした。

「それじゃ、簡単に紹介するね。二番レジにいる男の人が美宝高良さん、白い服のオネ・・・エさんが潮さん。あなたを案内してくれたのが、元森恵美子ちゃん。他にも従業員はいるけど、それはおい紹介するね」

オレンジ色と紫色のツートンリュックを右肩に下げた少年は、ややあつて静かに頷いた。

「はい。よろしく・・・お願いします」

「ヨロシク」

「よろしくね！」

「よろしくお願いします」

高良、潮、恵美子の声が続く。

「えーと。ロッカールームとかの説明、したほうがいいよね？」

「ロッカールームですか？ 二階の事務所の左手にあるやつですよ
ね？ それなら採用が決まったとき聞きましたが」

しれっと由貴は答え淡々と言葉を走らせた。

「それじゃ、制服は受け取った？」

「いえ。なんでしたっけ、菅原？ さん？ 彼女から今日来たとき
一式貰い受けるように言われました」

ちょっと待ってヨコさん。あたし、何にも聞いてないんですけど。

制服が手渡されていないとなると、就業自体に差しさわりが出るではないか。

幸音はざっと由貴の服装を確認した。

長袖の綿シャツの下に黒いＴシャツ。プリントは白抜きの童話「三匹の子豚」がモチーフのようだ。まるっとした三匹の子豚が頭上の吹きだしに「狼に注意！」と叫んでいた。若干シニールである。

ズボンはパリッとアイロンの効いたチノパンで、本人が汚れるのを厭わなければ初日くらいは制服の代用として使用できる。さすがに靴はオシャレ靴でもなんでもなく、ごく一般的なスニーカーであるため、こちらは何も差しさわりがなさそうだ。

問題は制服が見つからなかった場合、上着を脱いで黒いＴシャツで接客をしてもらうはめになることだ。プリント柄は何かエプロンで隠せそうだし、無理だとなれば黄緑色のジャンバーを着てもらってもいい。ただ、スーパージョーニョの社員用ジャンバーは綿が入っているのが疑問なほど薄手で通気性がよすぎて寒い。梅雨の間あれを一枚羽織って丁度いいというくらいなので、防寒性を期待してはいけないうら。

出勤初日から冷凍庫のような店内に防寒対策もさせずに居させるわけにはいかない。

「制服はちよつと待ってね、事務所まで探しにいつてくるから。ところで、聞きたいんだけどそのＴシャツは長袖？」

「と、いらつしゃいませー。お買い物袋はお持ちですか？」

恵美子が接客を始める声が聞こえる。

幸音は彼女の邪魔にならないようにカウンターの奥にいま一歩入り、むつつりと唇を閉じている青年に愛想笑いを浮かべて招きいった。

「それが何か関係あるんですか？」

ヨーコさん！　ヨーコさん！

この子、なんかとってもあたしの手に余りそうな感じがするんですけど。

とはもちろん口に出さず、幸音は務めて穏やかに口を開いた。

「制服は探してくるんだけど、もしなかった場合、その上にエプロンと寒いからジャンバー着てもらおうと思うのよね。で、半袖だったら寒いんじゃないかなって確認したただけなんだけど」

「はあ」

由貴は片腕を上げると視線を落とし、やはりしばらく間を置いてから視線を幸音に振り向けた。

「俺が寒いことと、アルバイト業務に何か関係があるんですか？
寒けりゃ仕事しませんなんて俺、言いませんけど？」

「ぶっ」

頬を膨らませて潮が笑っているのが見える。

あの女装趣味め、他人事だと思っていい気になって。

休憩時間が減るってさっき言ってたじゃないか。

新人アルバイトのしらつとした瞳から逃れるように幸音は爆発で
きない苛立ちを潮へ向けてやることにした。

「潮さん、潮さーん。早くご飯胃の中にぶち込まないと、潮さんに
レジ業務押し付けますよー」

「あらやだ。人生潤いのないオンナってこれだから嫌いよ。潤いだ
けじゃなくってカルシウムも足りないんじゃない？ だから貧乳な
のよ。悔しかったら牛乳飲みなさいよ」

ほら、と遠方で胸張る潮のニセ乳がたゆん、と揺れた。

幸音は片頬が痙攣しそうになるのを必死で押さえ、潮の傍らでレ
ジ台に片手を付いて笑いを堪えている高良から視線を外すと、真っ
向から潮に対峙した。

「潮さんには言われたくないです。あたしのはいつときますけど潮
さんと違って模造品じゃないですから。自前ですから、自前」

「んまああああ、かわいくない子ね！」

一瞬酔を飲んだような顔をした潮に対する勝利宣言。

へ、と鼻でせせら笑い幸音は皮肉な笑みを顔に浮かべた。

「クク・・・確かに」

喉の奥で底笑いわき腹を抱えて痙攣し始めた高良を潮は凄まじい形相で睨みつけた。ぴょんこらぴょんこら跳ねながら、広い高良の背中をビシバシと叩いている。よほどツボに入ったらしく「腹イテー」といいながらしゃくり声を上げ、レジ業務に戻った高良の向こう脛を潮が蹴りつけた。

「イテ、エだろうが、このバカッ！　つとと、いらっしやいませー。お買い物袋はお持ちデスカー？」

仕返しとばかりに潮の腹部を肘鉄で殴りつけ、彼女が苦痛に呻いてしゃがみこんだところを袋を取るため振り返るフリをした高良の拳が襲い掛かる。潮は幼馴染の攻撃の軌道を見事に読み、紙単で避けたがバランスを崩して倒れかける。

「アリガトウゴザイマスー。1572円お預かりいたしマスー。ポイントカードはお持ちでしょうか？」

ぐ、と足を踏ん張り、すんでのところで踏みとどまった潮が顔を上げると丁度釣銭を数えていた高良と視線が交わり、両者ともお互いの健闘を湛えるように満足げにしたり顔をした。

「それじゃ、アタシは休憩行つて来るわー」

「丁度頂戴いたしましたので、レシートとポイントカードのお返しでございます。ありがとうございます、またお越し下さいませー」

蟹股で歩み去っていく潮の後姿とお客に頭を垂れる高良の動きが重なった。

神々しいものでも見た気がして幸音は目を細める。

「あの。いつまで待つてればいいですか？」

棘を帯びた若い男の声に幸音は肩を跳ね上げた。そうだ、すっかり忘れていたが新人アルバイトがいたのだった。

「それで、とりあえずさっきの質問の答えですけど。俺のこのシャツ、Ｔシャツじゃなくてランニングシャツですけど、その上からジャンパー？ 着ればいいんですか」

「あ。ゴメンゴメン。そうそう。さすがにTシャツじゃ寒いからって、ランニングシャツ？」

はて、今は11月の下旬に差し掛かるうとしているころだ。十二月まではあたたったの十日で手が届くというのに、この時期にランニングシャツとか言いやがる若者はアレですか。

バカなのですか？

「は？」

「だから、ランニングシャツです。俺、極度の暑がりなんで、こうして薄手の上着1枚着てるだけでも相当暑いんですよ」

「あ、そうなんだ。庄野くん暑がりなんだー」

それじゃ、仕方ないよねー。

アハ。アハハハハ。

って、そういう問題じゃねえ！

乾いた笑いが自然と口から毀れ、一緒に笑ってくれればいいのに向かいの少年は表情筋一つ動かさない。凄絶で無比無情の無表情で見下すように、哀れむように幸音を見つめている。「頭、大丈夫ですか・・・」と言われそうなノリだ。

いつもならあの人突っ込みを入れてくれるはずなのに、必要な時に限って必要な人材がいないことに幸音は深く落胆した。そもそも、この溜まりに溜まったフラストレーションをいったいどうしよう。

「コンチクショウめ・・・」

「は？」

「ううん、なんでもない！とにかく、突っ立つとくのもなんだから事務所まで一緒に来てくれるかな。名札とかも渡さないといけないし、店の案内もしたいから」

「店の構造なら理解していますが」

「そうじゃなくて、品物の位置とか、従業員さんへの挨拶回りだよ・

・・」

「商品位置の把握は大切ですが、従業員への挨拶、今必要がありますか？ 正社員ならそろそろ退勤時間だと思いますが、お邪魔じゃないんですか？」

そうして由貴が鉄面皮で示すのは既に四時半を回った時計だ。

くだらない言い争いをしているうちに新人アルバイトを三十分も放置していた自分が情けなくなった。

「うちのスーパー、みんな結構遅くまで仕事してるから大丈夫だよ」

「それは、退勤時間を過ぎてなお居残るということですか？ それは職務怠慢とか無能とかそういう低次元のレベルのはな——」

「とにかく、行くよ」

一緒にいると疲れる人間というものは世の中に確かに存在する。

吉村幸音にとって庄野由貴という人間が不幸ながらにそうらしかった。

由貴を伴って事務所へ行くと制服は難なく見つかった。

陽子さんはどうやら幸音に伝言するのを忘れただけで用意はしてくれていたようだ。

事務所の入り口の棚に明日貼り付けのポップと重なって乱雑に置いてあったが、「しょうのくん用」と書かれているところから察するに間違いない。

由貴が二階の男子用ロッカーで着替えている隙に幸音は彼のネームバッヂを印刷していた。もう直クリスマスを迎えることもあり、おせち、クリスマスケーキの予約を謳う文句が赤と緑にカラーリングされた名札の上部に記されてあった。

印刷の出来具合を確認しながらプラスチックの名札ケースにぐいぐいと紙を押し入れていく。これでエプロンの右胸に装着する名札の完成である。

「吉村さん」

制服に着替えた庄野由貴が、眉根をかすかに顰めながら近寄ってきた。

「サイズはどう？ 全部Mサイズだったと思うけど」

真新しいトレーナーに砂色のズボン、濃紺のエプロンに袖を通して由貴は落ち着いた様子で頭一つ分背の低い幸音の目の前で足を止めた。

「ちょうどいいですね。まあ、しいて言えば腕丈と足丈が心許ないですが」

それは遠まわしの自慢なの？

両腕袖を引っ張りながら平坦な声で主張する由貴に幸音は綺麗に感情を押し殺し、聞かなかったことにして応じた。

「トレーナー、結構あったかいでしょ？ 裏起毛なんだよそれでも一応」

「ああ。安物のわりに結構生地は分厚くてしっかりしてますね。まあ、俺暑がりなんで最終的には不要になるかもしれませんが」

「……。菅原チーフから聞いたかもしれないけど、初月給料から制服代は差し引かれるからね」

「必要」

「必要経費なの？　とか、ごにやごにや言わない。みんな通ってきた道なんだからね」

「み」

「みんな一緒だからってどうして自分も同じ道を通らなければなら
ないのかとか、テレビドラマ見すぎの台詞はいらなから。郷に入
つては郷に従え。庄野くんもうちのスーパーに入ったからには不満
があるとは思うけど、しょうがないって諦めて従ってください」

パートの分際で偉そうにとか不満を抱いたのだろうか。

口を閉じて幸音を真直ぐに見下ろすタレ目の双眸がいやに迫力があり、幸音は負けじと口角を上げたまま彼を見上げた。

「さあて。こんなところで腐っても仕方がないから、挨拶回りと店内観光としゃれ込みましようか」

「しゃれ・・・」

「言動が古いとか言わない。君より確かに年上だけど、そこまで年食ってないんだからね」

潮が聞いたら腹を抱えておばちゃん認定されそうだが、ここは見逃してもらおう。

幸音は微動だにしない由貴を引き連れて事務所の扉をくぐった。

店内を一通り巡回し、挨拶回りも済ませるとなんだかんだで時刻は六時間近。初出勤のアルバイトは初日、三時間までというのが通例だったので、あと一時間程度で由貴を仕事場から追い出さなくてはならなかった。

幸音は賑わいを見せる店内の様子を観察しながら、隣り合って進む白髪の少年を見上げた。店中を回っている時、やはり一言多いのが持ち味らしい由貴の性格は少々難はあるものの大人しく真面目な今時の大学生ということがわかった。快活さと明るさには欠けるが、悠馬と対比する方が間違っているので考えないことにした。

問題は彼の頭髪の色なのだが。

「ね、由貴くん。何か音楽やってる？」

「音楽？」

精肉作業室に入ったものの社員が帰っていることに落胆し、誰も周囲にいないことをいいことに時幸音は思い切って聞いてみた。

「えっと、例えばヴィジュアルとかパンクとか？」

「は？ どうしてそういうことになるんですか？」

「じゃ、じゃあ音楽は好き？ どんな音楽聴くの？」

「音楽……。好きかどうかといわれれば確かに好きですよ。ポップスとかロックとか結構聴きますし。友人とカラオケにも行ったりしますが、それが何か？」

カラオケに行くんだ。

しかも友達、いるんだ。

こんなにとつつきにくいのに。

由貴にとっては失礼そのものだが、表情が乏しく声も平坦で起伏がなく、寡黙そのものの少年に友達がいることが驚きだった。友人とカラオケに行き、流行の曲を歌う由貴の姿がいまいち想像できず幸音は想像力の限界を痛感する。

「そうなんだあ。いや、ちょっと意外・・・でなくて、ある意味想像通りだったから」

乾いた笑い声を洩らしつつ、幸音は愚案な質問をしたことを恥じた。

ややあつて由貴はようやく何かを察したらしく、自分の前髪をひと房掴んでぼんやりと呟いた。

「やっぱり、珍しいのか」

嘆息げにぼやいた一言は間違いなく幸音の耳に入る。彼女は慌てて由貴を振り仰いだ。

「いや、珍しいとかそういうのじゃなくて、ですね。ただ、なんで白なのかなーと。赤とか、緑とか、オレンジとか、茶色とかにしないのかなと思っただけで」

「はあ。まあ。染めたことはありますけど」

「あるんだ、染めたこと——って地毛かい！」

我慢できずに幸音は突っ込んだ。

しまったと思っても後の祭り。

由貴はきょとんと幸音を見つめていた。

老人の白髪というよりは艶やかで手入れのされている頭髮に注目する幸音に、由貴は流し目を送りふつと前髪に息を吹きかけた。

「結構人目につきますからね俺の髪。やつかんで来る奴とか高校のときとか結構いたんで、めんどくさくて黒とか茶色に染めてましたよ。でも結局一ヶ月も持たず元の色に戻るし毛先が痛むんで大学に上がるなり地毛突き通してますけど」

「意外に結構気にしてたんだ・・・」

なんでもないことのように語る由貴の髪の色にじつと視線を注いでいると、呆れたように少年が息を吐く。

「店長は、この色でも構わないって言ってましたし、菅原さんもいって言ってました。それでも気になりますか？」

染めたほうがいいですか？

遠まわしの質問に幸音は目を丸くした。

それからかすかに微笑んで首を緩やかに左右に振った。

なんだ。

庄野由貴は口数が少なくて一言多いだけで、そこらにいる普通の大学生の男の子と同じだ。

「んーん。確かにちょっと珍しいけど、もう気にならないよ。店長と陽子さんが良いっていうならたかだかパートのあたしが口出すことじゃないし。それに似合うし、良いんじゃない？」

幸音は要領を得ないと眉根を顰めた由貴を背中に歩き出した。由貴はしばらく考え込むように口元に片手を添えたが、「変な人」と呟いたきり何も言わなくなった。

精肉作業室を出てレジすと駆けつけた母親に謝られてしまった。由貴の周囲に子供達が群がり、鼻水をたらしながらぼーと少年を見上げている図はなんだか微笑ましかった。

「あら、吉村さん。新人の子？」

保険会社に務めている白髪交じりの五十代の女性が、幸音たちを目ざとく見つけて通りがかりに声をかけた。

「あ、伊藤さん。こんばんは、いらっしやいませ」

おしゃべり好きの明朗な声音の女性で、年の割りに若々しく背筋はピンと伸びていた。オシャレにも気を使っているらしく、今日は黒の革ジャンに赤いマフラー、グレーのニットワンピースに黒のロングブーツを履いている。年齢と反比例するような格好だが、背筋を正して歩くため億劫な印象は受けない。

しかし厄介な人に捕まってしまった、と幸音は冷や汗を掻く。

「えーっと。今日から新しく仲間になった子なんです」

「ハジメマシテ。新人の庄野といいます」

由貴は幸音の後ろで礼儀正しく頭を垂れた。

「伊藤さん、今日は早いですね。お仕事早く終わっただけですか？」

「そうそう。今日は主人の誕生日だね。ふうん。吉村さん、庄野くんって珍しい外見の子なのねえ」

片頬に手を当てて由貴を頭の先からつま先まで観察する。

彼女、伊藤百合子は大振りのイヤリングを揺らして幸音に視線を投げかけた。

引き攣り笑顔で思わず言葉に詰まった幸音だが、援護射撃は意外なところから来た。

「コイツのそれ、貧血のせいなんですよ伊藤さん」

「あら、美宝くん」

「コンバンワ伊藤さん。今日もお綺麗デスネ」

伊藤の声がワントーン高くなった。

潮に「ばばこまし」といわれる所以である。

突然通路の間から顔を覗かせた高良は片手にカエルのイラスト付きマイバックをぶら下げて、のんびりと歩み寄ってきた。5時上がりで既に帰ったと思ったが、まだいるとは。陽子はそんな彼を「ワーカーホリック高良ちゃん」と呼ぶ。

「それにしても伊藤さん、俺がいないときに買い物来るってひどいじゃないですかー。あ、そうそう。この間の林檎、うまかったです。ありがとうございました」

買い物袋の中身が重いのか、高良は指先に引っ掛けたマイバックを左肩に背負うように腕を折り曲げた。

「いいのー。美宝ちゃんにあげようと思って持ってきたんだから」

「あれ、密詰まってすっごく上手かったです。どこ産の林檎ですか？ 青果担当に取り寄せてもらおうかと思ってるんですよー」

言葉尻が半分以上棒読みだが、百合子は気にしていないらしい。

百合子の視線は完全に高良へ釘付けだ。大して顔立ちがよくない割りに気立てがいいと評判の高良は戸惑う幸音の視線に気付き顎先で「行け」と指示する。

百合子は良い常連客だが捕まると話が壮絶に長い。

高良はそれを見越して助け舟を出してくれたらしかった。

幸音は指先で感謝の言葉を告げ、状況を把握できていない由貴の袖を軽く引つ張って歩き出した。清涼飲料水のコーナーの前を通り過ぎ、カウンターを通り過ぎると陽子が恵美子と一緒にレジに入っているのが見て取れた。パートの早瀬さんは既に退勤しているのだろつ。

次から次へと押し寄せる客を見事に捌きながら、視線をよどみなく四方八方に走らせていた陽子が幸音に気付いて軽く手を振った。すぐにお客のほうへ体を向けたが、レジを動かないということは幸音にあとを任せるとのことなのだろう。

「とりあえず、今はレジお客さんが多いから倉庫に行こうか」

「はあ」

「そこに、練習用のレジがあるのよ。一通りはそこで教えるから付いて来て」

店の出入り口はお客の群れでごった返していた。邪魔にならない

ように体を縮めて歩きながら、幸音はふと背後を振り返る。由貴がついてきているかどうか確認するためだ。

由貴はいた。

川の流れのような人の波の手前で立ち尽くして、向こう側の河川に渡れず取り残された子供のような顔をして呆然と棒立ちになっている。

情けない顔をしていることを、本人が気付いているとは思えない。

「いったい何してんのよ」

苦笑して幸音は由貴の傍まで歩み寄って腕を引いた。

「っ」

「ほらほら。あと今日は一時間みっちり仕事覚えてもらわないといけないんだから、早くする」

従順に頷いた由貴の足がおぼろげに一步踏み出された。

少年の体温で温まった衣服が、ほんの少し幸音の指先を温めた。

閉店業務を滞りなく終了させた幸音は、誰もいなくなった店内を後にして自動スイッチの完全に切れた扉を両手で閉じた。

次いで、屈みこんでその下部にある扉の錠穴に鍵を差込み確実に鍵を掛ける。閉まったかどうか確認するため、立ち上がって扉の隙間に指先を突っ込んで左右に力を込めると、僅かな隙間は出来たものの扉はそれ以上微動だにしなかった。

陽子はトレーナーの左袖を少しまくり上げ腕時計を確認した。

時刻は九時二十分。

夜の帳が厚い紗幕を世界に振り落としていた。

漆黒一色に染まったひんやりとした夜気を肌に感じながら幸音は息を吐いた。口から魂の欠片のように白い蒸気が立ち上る。もう、秋も終わり。冬が近づいていた。

沈黙を日課とする空や山の様子を眺めながら幸音は帰宅準備をす

るため、二階の事務所へ足を向けた。二階にはロッカールームがあり、そこに着てきた衣服や貴重品などが納められている。

しん、と静寂が蹂躪する空間をスニーカーの柔らかな足音が一つ、広がっていく。

「ん？」

スーパージョジョにしてはただっ広い駐車場に一台の軽自動車が停車していた。

客が閉店時間を間違えて駐車場に車を停車させるのはよくあることなので、幸音は慎重に車へ歩み寄った。閉店して既に数十分は経過しているが、こんなところで何をしているのだろぅという疑問が生じたからだ。

近づいてみるが、車の振動音も排気音も喋り声も聞こえない。

エンジンはかかっておらず人影はなさそうだ。

車は紺色のワンボックスカーだった。四人乗りの軽自動車タイプで、おとしとある車種から発売されたまだ新しい車のようだった。

無人の車のナンバーを確認して、幸音は僅かに目を見開いた。

「へえ。珍しい。出勤じゃないのに石崎さんがいるなんて」

大柄な巨大熊、あるいは親しみの持てる猫科の大型動物。

石崎二郎（27歳）はれっきとした人間だが、他に与える印象はまさに巨大動物そのものだった。

油気が少なく、剛毛でいうことを聞かない髪の毛はいつも四方八方、それこそライオンの鬣の如く好き放題に伸びまわっている。水とアイロン、ワックスも容赦無縁で跳ね除ける壮絶な寝癖を落ち着けるためいつも無理矢理帽子をかぶって出勤する。本人は帽子のせいでいつかハゲるのではないかとひそかに危惧していたりする。

精悍な顔立ちに三白眼の三日月型の瞳。分厚く大きな唇に笑うと見え隠れする犬歯。体格も悠馬が尊敬する夢の二メートルの巨体だ。そこにいるだけで威圧感がある一方で、高良と人気を二分するほどの看板店員であり、小さなお子様からお年寄りまで男女問わずの人氣っぷりだ。

その長身を生かして中学はバスケット、高校はバレー、大学では剣道と柔道を習得した猛者である。

性格はいたって温厚温和で、明朗快活。

人ごみの賑わいやお祭りが大好きな偉丈夫だが蛇や爬虫類、蜘蛛やゴキブリ、蜂や蛾などの生物が悲鳴を上げるほど苦手な一面も持つ。

特に三月と仲が良く、二郎と性格が真反対で人ごみと明るい場所が苦手な副店長を引つ張って都市部のショッピングモールや魚釣りやキャンプなどのアウトドア、居酒屋での酒の飲み交わしにつき合わせているという。

「……なんだかとてつもなく嫌な予感がする」

幸音は閉店したスーパーの二階の事務所を見上げた。今日の夜間は陽子が引き受けてくれたため、清算業務は彼女がしているはずだった。そこへ石崎が訪れているのかもしれない。

「なんだろう、この胸騒ぎは」

片手で胸を押さえ、人っ子一人いない暗闇を歩いているとふと、誰かの声が聞こえた。

呼びかけられたような切ない声音。

ぴちゃん、ぴちょおおんと滴る水温が鼓膜を震わせた。

「・・・」

二階へ続く階段に目を向けながらおそるおそる幸音が手洗い場に眼を向けると、ぼう、と黄色い光が灯っていた。ゆらりと光が翳り、電灯が二度ほど明滅する。

「ひいつ」

思わずのけぞった幸音だが、なんということはない。

ただの男子用トイレである。

水音はおそらく手洗い場の傍らに設置されている流し台の締りの悪い蛇口から毀れているのだろう。なにを怖がることがある。たかが水だ。

勝手に拍動する心臓が痛いほど脈打つ。

「な、なによ……。た、た、ただ接触が悪いだけじゃない」

幸音は何とか心を落ち着けようと、自分の愚かさを自嘲してみたが一向に役に立たなかった。一瞬男子トイレの電気を消灯しようかと考えたが、近寄るのも気味が悪く、少なくとも一人で立ち向かわねばならない問題ではないと判断し幸音は両肩を抱いて前かがみに体をすばめて歩き出した。

こういうときに限って思い出されるのは、スーパーニコニコの六不思議である。

「まさか、ね」

幸音は吉村家居候の住人恵美子とは異なり、「幽霊某」の存在を全面的に信じている。

信心深いという話でない、歩く実物が自宅にいるのだから信じないと強情を張る方が難しいのだ。ただし、幸音と同じスペースで暮らす恵美子といえは「目に見えないものは信じない」を座右の銘としているだけあり、「目に見える」存在はイコール幽霊でないと決定付けている。なぜなら常人には「見えないこと」が世の定説となっている幽霊という存在を「ただの人間である」自分が見えるはずがない、と自称常人恵美子は主張していた。

あながち間違っていないその論点を指摘するようなマネはしなかったが、幸音をはじめとしたスーパー一同は、彼女がその言葉をいけしやあしやあと吐いたとき揃って同じ感情を浮かべた瞳で彼女を見たものである。

「いやいやいや。やめよう。考えない考えない」

努めて明るい声を出しながら幸音は階段を上っていく。

何事もなく一番上まで到着し、扉を開くと煌々と光灯る事務室前通路が広がっていた。入り口すぐ左手が女子用ロッカールームで、もう七歩先に行った右手側中央が事務所である。そのほか男女兼用トイレや休憩室が二部屋、会議室、給湯室、男子ロッカールームなどが設置されていた。規模としてはあまり大きくないが、必要最低限の施設だけは揃っている。

まずは着替えるためロッカールームに足を向け、電気をつけ戸締りの確認をしながら自分専用のロッカーへ至る。寒いので手際よく着替え終わると制服を丁寧に折りたたんでしまう。ロッカーの戸を閉め立ち上がって再度戸締り確認をし、電気を消して部屋を退出した。本来なら、このあと帰宅の手はずなのだがなんとなく事務室とあの車が気になって幸音は左手前方に視線を投げかけた。

そこには沈黙を続ける茶色の扉がある。

内側には清算業務をしているはずの陽子がいるはずだ。

幸音は少し迷いながら扉前まで進み、ドアノブに手をかけ緊張した面持ちでノブを下げた。

「陽子さん？」

突如、ガタ、ガタンと内側から騒々しい音がし、幸音は思わず手を跳ね上げた。

ガチと錠が閉まる音がし、異様な気配に幸音は目を見張る。

通常、清算業務中は強盗などの侵入対策として非常に原始的な手法ながら扉には内から鍵がかけられる仕様となっている。

「・・・・・・・・」

しかし、ドアノブは下がったのだ。

片手で軽く押し下げただけでいともたやすく下がる。

鍵などかかっていなかった。

あの陽子が鍵などかけず清算業務をするということがあるだろうか。

確かに天然素材で抜けたところが多々ある陽子だが、仕事にかけ

ては誰よりも熱心で容赦も隙もない。一緒に仕事をさせてもらっている数年間のうち、彼女が鍵をかけ忘れたのは実に二度しかない。その限りなく低い確率が今日であるはずがどこにあるだろう。

幸音は嫌な予感的中したのではないかという不安に苛まれ、不穏な考えを払拭するようにゆるく被りをかぶった。

だが。

ガタ、ゴトン。

再び耳を疑うような強烈な物音が耳朵を打つ。

幸音は扉から離れて壁に背中を預けた。ドアノブに着目すると小刻みに上下に揺れている。誰かが扉の向こう側から必死にノブを動かしているようでもあった。

よもや強盗か。

「ヨーコさん・・・」

彼女が、たかだが普通の強盗程度に遅れを取るとは思わないが、今回はどうだろう。いや、今日は石崎二郎がいるのだ。だとしたらやはり、陽子さんたちが予想外の事態で窮地に陥る可能性は限りなく低い。

それにしてもいったい事務室の中ではなにが行われているのだろうか。

ドアに鍵がかかる音がしたということは外部からの入室を拒んでいるということに他ならない。陽子さんが清算途中に鍵をかけていないことに気付いて慌てて鍵をかけたという可能性はないだろうか。

幸音は壁に背を預けたまま顎先に手を当てて深く考え込む。

「あれえ？ 幸音ちゃん、こんなところでどうしたのー？ 何か忘れ物？」

「え」

「おー。吉村。今日も寒いのが。どうしたんじゃ、そんなところで突っ立って」

伸びやかな声に顔を上げると、事務所の休憩室から缶コーヒ一片手に現れた私服の陽子とBMWのロゴ入が入った帽子を被る同じく私服の二郎が不思議そうな顔をして歩み寄ってきた。

「陽子さん、石崎さん」

「どうしたんじゃ吉村。幽霊でも見たような顔して」

完全にからかうノリで二郎が大きな口をあけて笑った。

声は廊下を響き渡り空気を振動させた。その余波をおそらく受けて、事務所から何か金物が大きくひっくり返ったような音が沈黙降った空間に響き渡る。

「誰？」

陽子は幸音に事務所を指差して問いかけるが、幸音がわかるはずもない。首を左右に振って神妙に眉を顰めた。

「二郎ちゃん」

スーパ―の中で唯一、陽子がまともに会話できる男性にして巨漢、石崎二郎は凛々しく頷いた。

「そこどいとれ、吉村」

「石崎さん・・・」

「女子には危ないけん、わしが適役じゃろう。わしが今から中に入をなこって様子を伺ってくるけん、お前らはそこでじっとしとれ」

某県の特異なイントネーションがしつくり馴染む二郎の口調は「その道の人」仲川さんも家業お店に勧誘したいと太鼓判を押したほど、迫力があつて恐ろしい。拒否する理由はないので幸音は陽子に招かれて、その傍らに進み寄った。

「幸音ちゃんは下がって。いざってなれば、あたしが引導を渡す」

それが警察へ向けての引導なのか、冥府に向けての引導なのか。幸音は限りなく後者だとあたりをつける。幸音より背の低い陽子が一際大きく頼もしく見える瞬間でもあるのだが、いかんせん言葉内容が物騒すぎて諸手を挙げて万歳する気にはなれない。

スーパールのパート業務で久しく錆び付いているが、幸音だって魔術を使う人間の端くれだ。肉弾戦では石崎に及ぶべくなく、魔術の腕では陽子に劣るが何か役に立つことがあるかもしれない。

石崎が慎重に壁に背を預け爆弾処理でもするかのようにドアノブに手をかける。

息詰まる緊張に幸音も生唾を飲み込んだ。

指先に電撃が走る気さえする。

「開けるぞ」

押し殺した声音で二郎が唸った。

陽子は鞆の中から取り出したボールペンを両手に握り締めている。
幸音は陽子の頭越しに、指先に神経を集中させた。

「いち、にの」

すう、と誰かが息を吸った。

「さん！」

バキッ。

力任せにドアノブを破砕し猛烈な腕力で扉ごと、二郎が引き剥がした。

「げほっ」

土ぼこりが立ち込め、幸音は大きく咳き込む。

ドライアイスを炊いたかのような白煙が周囲に撒き散る中で、ただ陽子と二郎は冷静だった。二郎はすぐに引っぺがした扉を向かい壁に向けて投げ飛ばす。

振動と衝撃に幸音は目を瞑った。

「っ！」

「どいつだ」

「命知らずな人は、お仕置きです！」

示し合わせたわけでもないだろうに、お互い一歩ずつ扉のうちに足を進めている。

遅れて反応した幸音を放置して、まず二郎がその健脚で事務所の中に飛び込んだ。追って陽子が素早く歩を進める。幸音も顔を上げようやく晴れてきた霧、でなく埃の中を目を細めて確認する。

事務所の中の構造を頭に思い描き、躊躇うように足を動かした。

部屋に踏み入れた瞬間、ぞっとするほど冷たい冷気がそこここに充満していた。まるで、凍土の中にいるようだ。

幸音は身震いし、鼻を吸った。

と耳に、懐かしい音が響き渡る。

「典礼律するところに我あり、汝の行く先に栄光あれ！」

しまったと反応するより早く、体は自然と動く。両目を塞ぐように右腕で視界を覆うと、瞑つても塞ぎきれなかった閃光の衝撃が網膜を焼くように点滅した。音なく弾けるように幾つもの小さな光の珠が冷氣の中で存在を迸らせていた。

「二郎ちゃん、右右!」

「わかつとる! すばしっこい奴じゃ! おとなしゅう観念せい!」

「違つよ、左!」

「わかつとる! つうーか、菅原。いきなり魔術使うなや! 危ないじゃろつがっ」

「緊急事態だからいいの! ああ、もう。二郎ちゃん、右だって、右!」

「じゃあああああ。もう、なんねえ!? いい加減にせいっちゅうの!」

どうやら犯人はちょこまかちょこまかと動き回る人間のようにである。

「あ、幸音ちゃん！ 逃げて、危ないッ！！」

「へ！？ だうっ！！」

何かが突進してきた。巨大な猪の塊のような弾力のあるそれはおそらく犯人か――。

相手の方も予想外だったと思え、激突してきた衝撃に慄いて僅かに後退ろうとする。

逃がすものか！

幸音は両手を伸ばしてよく伸びる布を掴んで爪を立てた。

「いででででで！！ 痛いっスよ、幸音さん！」

「あれ？ この声は――」

幸音は対象物を掴む手の力を緩め、うつすら晴れ始めた霧の中からその人物の面影を探した。

「ちええええすとお、じゃあああああああ!!」

破竹のように声が爆発した。指先で旋風が巻き起こり一気に霧が晴れる。

石崎二郎は魔術を使えないはずだと幸音は冷静に思考をめぐらせたが、この際どうでも良いことだった。冷気と霧がひと掃いに消え去ると、徐々に灰色のシルエットが浮かび上がる。

「こなくそ、盗人が！ 観念せえいつ。うりゃああああ」

「ギャー。ギブツ、ギブですって二郎さん！ もう重いダメ俺、死ぬうう。でもきもちいい」

エビゾリ型に動きを寝技で固められた悠馬が顔を真っ赤にしながら苦々しい声を絞り出していた。

冷たい床を掌で何度も叩きながら涙目で降参を示す悠馬。しかし、二郎は当分その背中からどうこうとしなかった。

「うわあ。キッツ。見るんじゃないかった。この上なくグロイね」

幸音の背後で顔を顰め吐き捨てた陽子の声はどこか落ち着いている。

犯人が悠馬だとわかったからではもちろないと、察したくないのに幸音は察してしまった。

「陽子さん？」

「なーに、幸音ちゃん？」

振り返る先にはいつも通り邪悪な笑顔を振り向ける陽子の姿があった。

真冬中、水濡ればそる盗人の言い分はこうだった。

「だから、チーフにはめられたんっスよ！」

パイプ椅子に荒縄でくくりつけられ、床に引き倒された拳句、陽子さんから容赦ない足蹴り攻撃を頂いている少年、倉科悠馬は言葉の合間合間に「押忍！ ごつつぁんです。姐御！」と叫んでいる。

悠馬の白と黒のツートンカラーのコートが無残に埃まみれだ。

幸音は悠馬の精神状態を哀れんでそつと目尻の欠伸涙を拭った。

「菅原にはめられたちゅーてもなあお前。菅原はさっきまで休憩室でお笑い番組観ちよったんじゃぞ。いくらなんでも、二つの空間に二人の人間が同時に居れるはずがなかるう。魔術使うてもそんなことはできんっちゅーことは、お前さんがようわかつとるじゃろうが」

仁王立ちをしつつ嘆息と憐憫の情を悠馬に下す二郎の言葉は正しい。万能と思われがちの魔術だが、空間と時間を歪めることは基本的に不可能とされている。基本的というのには注釈が付き、一部の例外が存在する。

我々が現在、空間と称し時間と認識するものの概念には人によって捉え方や感じ方のばらつきが生じる。例えば老年者と若年者の一日の時の流れはまったく異なる。それは主観的な感覚の捉え方が個人によって異なるから、と考えられてきたがそれだけでないことがわかつている。

時間は視覚化できず、「流れ」と称される時間の向きは未来から過去へ一方行のベクトルでもって通過していると考えられてきた。また、この理論は現在でも通説の一種である。光や熱といった感覚が物質が振動することによって生じ、体感的に察知できるものだとするなら、「体内時計」という言葉が存在するように「時間」と称する非物質的な存在はどういう現象が作用して「時が経過した」と感知するのに至るのだろうか。

「体内」で「時計」を感知しているものは、人体を構築する部位――。骨や筋肉、臓器、感覚感知の中核でありその集合体である神経、脳ではないかという仮説が立てられた。そもそも感覚という言葉自体も脳が取得している情報の一つに過ぎない。また、それだけでなく、「細胞性成長個体差異説」に裏づけされるように細胞が感知する分裂速度、成長のスピードこそが「時」そのものでないかと考えられた。

ならば、仮説に従い時計というものの存在が脳によって作用されるとするなら――。

つまり、外魔術的な術の一貫で脳に与える情報を遅延させる、あるいは混乱させる術式を展開すれば一時的に「同じ空間」に「二人の人間が存在する」、あるいは「消えたはずの人間」が「再び現れた」と脳が錯覚する事態が生じる。人体の内部から外へ向けて魔術を作用されることは難しいが、外部から内部へ受動される情報を操作することは難しくない。人間は受動的な生物だからだ。

よって、外部から脳に感知されうる視覚情報を混乱させる魔術を駆使すれば、表面的に「幻視」「幻覚」と称されるパフォーマンスも可能であり、これらはまったく月並みな古代からの手法に他ならない。

結局、魔術をしても、人間生来の感覚を錯覚混乱させなければ時間空間を操ることはできないのだ。

そして、表面的にはあっても対人間の中枢に作用する例外魔術を扱うには特別な資格が必要で、陽子の持つ魔導師ライセンスでは法律上この手の魔術の使用は、認可されていない。

「違っつスよ！ 女王様、いや、菅原チーフは俺に清算押し付けて魔術で部屋に外から鍵かけて、閉じ込めた拳句、お気に入りバラ

エティ番組見るためだけに出てったんすよ！ 俺はただ、来月のシフト取りに顔出しただけなのに・・・」

「ヨークさん・・・」

「菅原・・・」

「ただ、勘違いして欲しくないのは——っ！ 俺は密室放置プレイも嫌いじゃないっスよ。無論大好きっス！ でも、いつまでもこんなところに閉じこもってるのも詰られがいないっていうか。俺としては面と向かって罵倒される方が好きなんスよね」

「ディープじゃなあ・・・わしでも大概引くわ」

「男に引かれてもなんも萌えないっス」

「大体事情はわかったけど、なんであんなに物音がしてたのよ」

話がまったく進まない上に陽子は素知らぬ顔を決め込んでいる。事態の全体を把握するには当事者から話を聞くのが一番だ。

「まあ、最後まで聞いてください。俺がようやく清算業務終了して、

さあ帰ろうとしたときですね、一時的だと思ってたチーフの閉じ込め魔術は呪解しない限り永遠に扉を封じ続けるという事実が判明しました。あれこれ試してはみたんすケド、もちろん鍵はかかりっぱなしだし、俺の力じゃ解除できないし。どうしようかと思ってたんスよね」

「・・・でも、扉の外から触ったとき、鍵はかかってなかったみたいけど」

「ああ。それは、こうっス。閉じ込められ続けてなーんもしないっつーのも、俺の主義に反するって言うかぶっちゃけ暇で。じゃ、この時間を利用して予行練習すれば良いんじゃないやね？ ってと考え付いて、ですね。ここなら失敗しても誰にも迷惑かかんないぜ、ラッキーと思ってあれこれ魔術を試してたんスよね。もちろん常識範囲内ではありますが」

「はぁ・・・。それでうつかり練習中にどうしてか鍵抜けの魔術が成功して、一瞬だけ鍵が開いたんだね」

「そうっス！ で、俺超ツイてるじゃん。やばくね？ 超天才って小躍りして脱出しようと思ったときにちょーど誰か来て。・・・。実は、練習の結果、部屋中スモーク炊いたような魔術冷気で南極も目じゃないくらい凍り付いちゃって。これがチーフにバレでもしたら大問題と思ったんで、慌てて鍵掛けなおしたんっス」

そのちょーど来た人間というのが幸音なのだろう。

悠馬は白々しく見つめられていることが堪らないらしく身悶えしながら頬を赤らめる。

「それから部屋の解凍作業に勤しみつつ、使ってた台を片付けようとして足を滑らせ後頭部をうったり、湯気のせいで先が見えず脛をぶつけたりと散々だった」

幸音は転がったまま擦れた表情をする悠馬を見下ろして呆れ声で問う。

「諸悪の根源がヨーコさんだろうと、そうでなかつたら、仕事場の一部と備品使って練習するのどうかと思うよ。一体なんでそんなことしたのよ。中から助け呼べばよかったでしょうが。石崎さんいることだって二階の窓から見えてたんでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。石崎さんの車があるのは、見えただっすけど」

そうして穿つ表情で悠馬は珍しく陽子のほうへ渋い視線を向けた。

「菅原チーフ、遠慮容赦なしに軽く防音加工までしてくれちゃって

たんすよね・・・」

「防音加工・・・」

「おお。すごいな菅原。それなら中で何かが爆発しても、よほどの音じゃなきゃ外に聞こえんわ」

「えへへー。防音処理と密室加工は得意分野なんだ。完全犯罪の必須事項だよな」

問題発言です、ヨークさん。

では、幸音が物音を聞いたのは本当に奇跡のようなものだったのだろう。

防音処理と密室加工を陽子が「得意」と称するなら、生半の技術での呪解は困難だ。

「あとねー、印象操作もできるんだよー。気配を完全に絶つことができるのだ！」

「忍びみたいじゃのう」

「えっへん！」

両腰に手を当てて胸を張る陽子を両手を叩いて賞賛する石崎の常識の行方性が理解しがたく、幸音は落胆じみた溜め息を長く吐く。ともかく事態全容解明をするのは、寸で常識の崖っぷちに足を留めている幸音の役割だろう。

幸音は思考労働のため頭痛がし始めた脳内を落ち着けるように眉間に深い皺を刻み、目頭を指で押さえた。

「――で、何の練習をしてたのよ」

「いや。大したことじゃないンスけど。毎回恒例のアレの練習してたっス」

「アレ？」

「あー。毎回恒例のアレね、アレ！　へえ、アレかー」

「なるほどのう。お前も憎い男じやのう！」

陽子は両手で拍手を打ち、石崎は両腕を組んで納得したように首肯した。

その傍らで幸音だけが記憶の中に迷子となり、要領を得ない。

「前回俺、元森ん時大成功、いや、大失敗してイロイロ物足りなかったっスからねー。今回は是非良い反応が見たいので鋭意努力中っス！」

「悠馬くん。前回の、アレ。今回もまたするの？」

「いやあ。流石に同じ轍を踏むのは怖いっていうか、二番煎じはつまらんっていうか。今回はちょっと趣向を変えてみようと思って試行錯誤中っス」

「ヨーコさん、アレってなんでしたっけ？」

「ありゃ？ 幸音ちゃんには知らなかったっけ？」

会話に取り残され続けるのも寂しいので、幸音は傍らでぴょんぴょん跳ねる陽子にそっと尋ねてみた。すると、耳ざとい悠馬が大きな声を上げる。

「あー、チーフ。幸音さんは前回の時、その場にいなかったっスよ。後で高良さんと合流したじゃないっスか」

「そうだったねー。幸音ちゃん夜番、高良ちゃんと二人でやってくれたから来るのが遅かったんだよね、確か」

「恵美子ちゃんの歓迎会の時ですか・・・」

それなら確かにおぼろげに記憶がある。

確かあの時は、参加希望者が多すぎてシフトを組むのが困難になり、前座の悠馬と幹事の陽子を外すことができず休日だった幸音を駆り立てて店を閉店させたのだった。高良はあまり興味がなかったことと、幸音を会場まで連れて行く「足」となるべく夜間を引き受けたのである。

「あの時は、ゴメンネ。でも今回はちゃんと幸音ちゃんの休日に合わせて歓迎会を開く予定なので、安心してください」

「今回、誰が閉店居残り組みですか？」

「えーっとね、店長と副店長と、潮ちゃん。潮ちゃんならレジも大丈夫だし、どうせあの人5時から仕事ないから」

あっけらかんと朗らかに語る陽子だが、潮本人が聞けば火山噴火は確定である。

5時から仕事がないのではなく、鮮魚室の掃除と殺菌除菌任務があるのだ。もちろん、陽子はそれも承知の上、潮にやらせつつシフトを組んでいるはずだ。

「開始時間は7時からでー、あたしは6時まで店にいるのね。で、そこから潮ちゃんとバトンタッチ」

「潮のやつ、休憩時間がないようじゃがそれは大丈夫なんか？」

「だいじょーぶだいじょーぶ。休憩時間って行っても潮ちゃんはお飯食べるだけだし。仕事終わって飲み会に参加するんだったら、そのとき残り物食べてもらえば良いでしょう？」

「なるほどのう」

「今から楽しみっスねー」

「うんうん。今回の新人くんは反応がすっごく楽しみなねー」

「それはいいんじゃないが。だれぞ日程と店を決めたんかのう？ 吉村、次の休みいつじゃ？」

「休みですか？　確か6日後だったかと思いますが」

「何か聞いとるか？」

「いえ、初耳でした」

「え！？　まだ決めてなかったんすか！？」

驚愕に見開かれる悠馬の双眸に深い落胆が浮かんた。

がつくりと肩を落とし床スレスレまで顔を近づけぶつぶつと呪言のような声で呟き続けている。

あまりの落胆ぶりに必要以上の罪悪感に苛まれ、幸音は少し後ろに下がる。と、背後から「隣のメトロ」の可愛いオルゴール音が聞こえた。

「俺の苦勞が。俺の苦勞が。俺の苦勞が。俺の苦勞が。俺の苦勞が」

「おっと。電話電話ーっ」と

音は陽子の携帯電話からだったようだ。陽子は四角い革の鞆からワインレッドにカラーリングされたスマートフォンを取り出し、慣れた手つきで画面を操作した。幸音がディスプレイを覗き見るとそこに「ワーカホリック高良ちゃん」と二段構えの文字が羅列されていた。

「もしもし、高良ちゃん？」

陽子の電話が始まったので一度会話を中断させ、悠馬、二郎と一緒に彼女に着目し、様子を見守る。

『よおチビ。今大丈夫か？』

音量が大きいため自然と高良の声が漏れ聞こえる。

隠すような会話でないのだろう。陽子はそのままの音量で話を続けた。

「図体でかいやつにとってチビもクソもねえだろうが。で、なあに、

高良ちゃん」

『ハハ。相変わらず凄まじい言動だな。年上じゃなかったらぶっ飛ばしてやったのに。残念だ』

「そつれはご愁傷様だね、高良ちゃん。年齢も人生経験も高良ちゃん如きがあたしに敵うわけないんだよ。うふふふ」

『ハッハッハ。そりやお前が歳食ってるだけだろうが、このサバ読みババア』

「えへへへへ。地獄に落ちろ、この変態ロリコン」

『ハハハハ。いい加減にしやがらねえとお前の性癖全員にはらすぞ』

「うふふふ。やれるものならやってみれば良いよ。みんながどっちの言葉を信じるか、明白だよ？ 失敗した時、あーイタイイタイ変態野郎って思われるの高良ちゃんただだよ？」

『ハハハハハハ』

「えへへへへへ」

しばらく数秒ほど、両者の気味の悪い笑声の応酬が続いた。幸音は陽子の顔に張り付いた能面のような笑顔に身震いしつつ、少しだけ二郎側に体を退ける。

『ま、冗談はさておいて。27日の飲みの件なんだが』

「飲み？」

小さく抗するような声をあげたのは悠馬だ。いつの間に縄抜けまで習得したのか、体中に付着した埃を押し掃いながらけてけと幸音の横に並んだ。両手には綺麗にとぐるを巻く荒縄を抱いて。

陽子は携帯電話を肩口と耳の間に挟んだ。先ほどまで明瞭に聞き取れていた高良の声がくぐもり、なにをいつているのか幸音たちの距離では判別できなくなる。

陽子が高良の声にしきりに頷いた後、鞆から四苦八苦しながら手帳を取り出すと、手にしていたボールペンでさらさらと何かを書き込んでいく。

「了解了解。店は宮ノ内の駅前なんだね、了解。『串活さん』だねー、うん。うん、前に幸音ちゃんと一緒に行ったことあるよ。店舗

は狭いけど個室もあるし料理もおいしかったなーって。お酒の種類も豊富だし泡盛もあるんだよね。はいはい。七時開始、行ける人から宴会はじめてれば良いんだね。わかったー」

「菅原は何の話をしとんじゃ？」

「さあ・・・」

「宴会って言うてたし、飲みって言うてたっすから例のアレじゃないんすか？ 個室とかなんか聞こえたし」

取り残された三人が脱力してボールペンと手帳をしまった陽子に視線を向けると、彼女は携帯を手に持ち替えてブイサインをして見せた。その表情は悪戯に成功した子供そのものである。

『つーことだから、車メンバーの割り振りとシフト調整、と伝言ボックス』

「アリガトー、高良ちゃん」

『お前、言い出したくせに何もせんな本当に。アリガトーとか、全然感情こもってないじゃないか』

「お前にやる情はねえ」

ぶつ、と陽子は着信を切った。

傍から聞いていてこれほど心臓に悪い会話の応酬はないだろう。

携帯電話の画面を操作してロックをかけた陽子は硬直する幸音の傍まで寄ると、その腕を組んで引っ張り歩き出す。

「わっ」

「さあ、帰ろうか幸音ちゃん。いつまでもこんなさむーい部屋にいたら風邪引いちゃうよ」

まるで何も起きなかったという態度で陽子は幸音の腕に腕を絡めて廊下に進み出た。幸音は破砕された事務所の入り口を視線で捉え、ぐいぐいと引っ張る陽子の力に僅かに抵抗しつつ背後で呆然とする二人組みの男子を見つめた。

ふと、陽子が思い出したように足を止める。

「明日の朝までに扉、直しといてね」

ほら行こう、幸音ちゃん。

ぼとつ、と悠馬が何かを落とした。蛇がごとく足の上に落ちたのは彼が手に持っていた縄だ。後ろ髪引かれながら幸音たちが二階の入り口を出たと同時に、意味不明の悠馬の嬌声が廊下中に響き渡った。

日常は駆け足で過ぎていく。

新人バイトの庄野由貴は相変わらず寡黙で、一言多いが仕事ぶりは熱心で真面目、飲み込みも早かった。

ただ、その性格が災いしてなかなか周囲の人間と打ち解けられず、ややアルバイト仲間からも浮いた存在だった。幸音は彼と何とか人間らしい良好なコミュニケーションを築こうと四苦八苦していたが、やはり年頃の少年の心は反抗期なみに頑なだった。

放置すればいつかは打ち解けるよ、と陽子は言っていたし幸音もそうだろうとは思っていた。時間が解決してくれる問題だと、取り敢えずは棚に挙げ、日々の仕事に打ち込んでいた11月下旬のある頃。

歓迎会を二日前に控えたある日、事件は起こった。

それはある穏やかな夕下がり。

最低気温が大町町では珍しく3度を記録した日のことだった。

時刻は午後5時35分8秒。

いつにも増して冷凍庫のような冷たさを維持するスーパーニコニコの店内、道路側入り口付近。栄養ドリンクの陳列ケースの裏手。カウンターと1番レジが併設する場所に一人ずつ真剣な面持ちで役職に当たる女性達がいた。

そしてもう一人、2番レジに白髪青年が立っている。

月一の棚卸し作業の一貫として食品の数量リストと格闘し、在庫合計金額を計算していた幸音は、普段はつけない右耳のはめ込み型インカムから毀れた音声に眉を顰めた。計算機を叩く左指の動きを止め、数字の羅列を追っていたボールペンを絡める右手を静止させる。

2番レジでようやく慣れてきたレジ作業に少し退屈していた由貴も耳から届く同僚の凜然とした声音に眉を顰めた。出勤するなり耳にはめ込むようにといわれた黒色のフリーハンドインカムである。声の主は、二度ほど同じシフトとなった年下の倉科悠馬という高校生の少年だ。

「——恵美子ちゃん、聞こえたね？」

背後の１レジで業務に当たっていた恵美子が真剣な面立ちで軽く頷いた。

「この時期に珍しいですね。別名、命知らずともいいますが」

「そうだね。間が悪いよね。さて、棚３方面目標発見。副店長に１０番連絡」

珍しく緊張した面持ちの幸音の双眸が店内区画のある一転を見定めて、細く眇められた。遠方で片耳に手を添えた悠馬の姿も確認できる。悠馬は一瞬幸音たちに視線を送ると、再び何もなかったように棚の影に消えてしまう。

「了解しました。棚３のち１０番、三月さん了解です。援護要員は必要ですか？」

「……。今日は陽子さんがいないからね……。潮さん、もしくは石崎さんは？」

「潮さんは休憩中です。石崎さんに９番情報通しますか？」

「一応お願い。駆けつけ時間10分前後つてところか……。詰めるかな」

「油断しなければ、おそらくは――。店長に外線1番で10連絡了解済みです。可及的速やかに対象を確保するように、と、9番通信繋がりました。石崎さん応答確認」

「でかした、恵美子ちゃん。で、後は編成か」

悩んでいる時間がない分、無駄な焦りが生じて幸音は唇を噛む。こんな時、陽子がいてくれればどんなに心強いだろう。己の采配ミスが失態に繋がらないように留意しながら幸音は頭の中で今日の人員と動かせる要員を選択していく。

「幸音さん」

「ん？」

顎先に指を当てて思考していた幸音に、恵美子が呟きを漏らす。

「あのっ、幸音さん……。あたし――」

「ちょい待ち恵美子ちゃん。それは言わない約束だよ。フオーし合っつのが仲間の義務なんだから」

思いつめた恵美子の表情から心情を察して、幸音は緊張をほぐすように朗らかに頷いてみせる。

「レジは任せていいね？」

「ハ、ハイ！ もちろんお任せ下さい！！」

からかい込めた軽やかな幸音の言葉に恵美子は深く頷き、己の責務を再確認する。幸音は恵美子の肩を軽く叩いて視線をその彼方へ送った。それから、ぎこちなく右耳を指で押さえた庄野由貴の顔を確認する。

事情はわからないだろうに僅かに緊張しているらしく、タレ目の双眸が揺らいでいる。

なんにしても察しのいい子である。

指示を仰ぐため口を閉じた恵美子に幸音は優しく笑いかけ目を瞑

り、口の端を歪めた。耳の後ろをボールペンの先で掻き脳内をフル起動させる。皮肉げな表情を一瞬浮かべるとすぐに表情を引き締め、目を開いた。

「わかった。それじゃ、私の補助に由貴くんつけるかー。仕方ない。緊急時だから店内放送で潮さん呼び出しお願いね」

「了解です」

恵美子は真白な歯を見せて自信に満ちた光を目に浮かべる。

幸音は客がちょうど由貴のほうへ流れたこともあり、彼女と一時的にレジを代わる。

『スカウト 偵察からコマンド 司令部へ。目標4棚アルファへ移動中。どうぞ』

さあ、ここからは時間の勝負だ。

恵美子はレジを幸音と入れ替わると淀みなく体を電話機へ勧めた。受話器を持ち上げ、シャープ、9とボタンをおす。

ピンポンと緊張感に欠けた音が店内に響き渡った。

同時に幸音が立つレジへ男性の客が買い物籠をもって訪れる。

「いらつしゃいませ。お預かりいたします。お買い物袋はお持ちですか？」

店内放送に神経を向けながら幸音は両手で籠を受け取った。台の上に音なく置き、50代中ほど程度の男性客が静かに頷くのを認める。ありがとうございます、と笑顔を維持しながら幸音は応じ滑らかに商品を手早くレーザーに読み取らせていく。

「298円、128円、98円が・・・3点、498円、546円」

「本日は、お忙しい中スーパーニコニコにお越しくださいます。誠にありがとうございます。業務連絡します。潮さん潮さん、引田様

から10番にお電話です。至急カウンターまでお願いします」

通常電話であればわざわざカウンターまで来て電話を取る必要はない。各部門の作業室に電話はそこかしこに設置されているし、社員ともなれば自前の店内ピッチを支給されている。

しかし今は違う。この店内放送は緊急の応援を要請していた。

「178円の50円引き、98円の半額が2点。ありがとうございます
ます、1990円頂戴いたします。ポイントカードはお持ちですか
？」

店内放送が木霊のように終了し、恵美子は静かに通信を遮断する。それから再度ボタンを操作し受話器を上げたまま1と0を連続して押した。

放送を聴いていたのだろう。

恵美子が連絡を入れた人物は2コールで出た。

「おつかれさまです。カウンターの森元です。西山副店長、棚3にて引田様ご来店です。・・・はい。先ほど潮さんに応援頼みました。はい。編成は偵察倉科、スカウト部隊吉村。ユニットそれから援護要員庄野の三

名です」

「ありがとうございます、お先にポイントカードをお返しいたします。2000円お預かりいたします。――10円のお返しでございます、お確かめくださいませ」

「了解しました。スカウト偵察による現認1回目。倉科によると現在は4棚付近で遊覧中とのことです、通過もレジで確認します」

「ありがとうございます。またお越しくださいます」

頭を垂れ、お客が籠を持ってサッカー台へ移動するのを見送り、幸音は釣銭をレジの中に仕分けしていく。

「わかりました。幸音さんへ代わります」

名に反応して幸音が顔を上げる。

恵美子と入れ替わりにレジを抜け、保留かかったままの受話器をとると点滅する1番内線の蛍光グリーンのボタンを押した。

「お待たせしました。お電話代わりました、吉村です」

『吉村さん、お疲れ様』

受話器から届くのはいつも通り落ち着いて、そこはかたなく湿り気を帯びている三月の声だ。しかし、先日のような情けなさや頼りなさといったものは欠片もない。

ただ穏やかに確信めいた信頼を幸音に向けて放っていた。

「おつかれさまです」

『状況は聞いてるよ。そちらに任せるけどいいね？』

「了解しました。確保に全力を尽くします」

『怪我をしないようにね。もしの場合は自分たちの身を優先させること』

幸音はぐと奥歯を噛み締め顎を上げた。

寄せられているのは絶対の信頼。ただし、己の力量を過信するな

との忠告も入り混じる。

「了解です。庄野くんにも徹底させます」

『では後は任せるね。関係各所への連絡は僕に任せるといい。健闘を、祈るよ』

笑って静かに切られた言葉に胸が熱くなる心地がして幸音は鎖骨下をそつと撫でた。

「吉村さん。俺はどうしたら？」

力が抜けた由貴の声に幸音は頷いた。恵美子が気を利かせてこちらに寄越してくれたらしい。幸音はインカムから断続的に流れる悠馬の声に神経を尖らせつつ、視界を動かした。すると、帽子を脱いで脇に挟み、軽く引き締めた顔立ちで大股に歩み寄ってくる赤毛の女の姿があった。

彼女は紅の色をなくした唇を動かして右耳を指差す。

どうやら、後は任せるということらしかった。

そろそろ夕方ラッシュの時間だ。

先方もそれを見越してこの時間を選んだに違いないとするなら、確信犯の上に常習犯の可能性がある。

人ごみと忙しさに紛れて、獲物を逃がすわけにはいかない。

受話器を元の場所に戻し、恵美子と視線を交わすと、幸音は由貴を真直ぐ見据えたまま右耳に指を当てて通達を下す。

「吉村幸音です。これより、副店長指示でケースOからケースSに移行。対象名をM18、チームコードをYとし、吉村、倉科、そして庄野は、犯人確保に全力を投じ戦力を展開します。なお、新人一名を随行投入するためコードの簡略化は不能とします。以上^{オーバー}」

『了解』

『りょうかい』

『了解っす』

『了解です』

『わしの見せ場も残しとけよ!』

ピリと耳朵を電気が打つ痺れが走り、由貴は僅かに顔を顰めた。しかし、視線は凜然と声放つ幸音に向けたままだ。

いったいこれから何が起きるのか。

彼女の言葉がなにを意味するか判断できず由貴は混乱する。

「吉村さん」

「さあ、庄野くん。我々のスーパーニコニコが、スーパーたる由縁とくにご覧頂きましょうか」

嫣然と微笑する年相応の笑顔を閃かせた幸音に、由貴は戸惑いを隠せずなすがまま頷いたのだった。

これから何をするんですか、と調味料棚の売価チェックをしながら傍らでボードファイル上の用紙にボールペンで書き込む女性に尋ねてみた。

彼女は視線を由貴に向けず、時刻を確認し、英数字を罫線の内側に書き込んでいった。

それから、ちょっとした狩りだよ、と笑った。

「狩り、ですか・・・」

「そう。狩りだよ。本当は、狩りにならねばいいんだけどねえ」

彼女は少しだけ笑みを含ませた表情で真直ぐ由貴を見上げると、視線を右通路に走らせ由貴と同じように左手で焼肉のタレの瓶を前出ししながらボールペンを持つ手で右耳に触れる。

「Y1からY2へ。対象補足に関して通達はあるか」

彼にとって、吉村幸音は苦手な人物だった。

真面目なフリをするかと思えば馬鹿馬鹿しい冗談交じりの会話をしてくる。掴みどころがなく、なにを考えているかわからない。心を見透かすような目をして、大体的外れでないことを言ってくる。

彼女と対するたび、庄野由貴は嚴重に隠していた箱を見つけられ、中身を暴かれたような複雑な気分になる。かき回され心うねるような、けれどどこか安心して自分のこれ以上ないほど苛立たしく由貴はその度に言葉を無くすのだった。

今でなお、それは変わらない。

『Y2からY1へ。M18は棚7から棚9へ移動開始。所持物は帆船トートバック。色、藍。大きさB3。衣服は黒のキャップ、白いマスク。黒のジャンパー、灰のニット。財布チェーン付き紺のジーンズ、黄色いスニーカー……。堂々としてますね』

「カゴは？」

『所持が認められません。入店の際から所持していないものと判断します』

「了解した。Y1はY3と随行してR通路から棚10へ移動する。
Y2はそのまま現状維持」

『了解』

「さて、庄野くん次の棚いこうか」

「はあ。でも前出し」

「半分以上残つてるとか言わない。ほらほら、時は金なり金なり」

屈み込んでウスターソースの容器を前に出す作業を続けていた由貴は僅かに不満げな声を漏らしたが、幸音の声によって先を制された。

彼女が先に歩き出し、右側の通路に姿を消してしまった。惣菜コーナーに群がる客にいつも通り愛想よく挨拶をしながら、ちょうど鮮魚コーナーから出てきたパート従業員と朗らかに目交わしをする。パートは銀色の長い板の上に乗せた出来立ての惣菜を手際よくケースに並べていく。

「いらっしやいませ」

何も変わらない。普通どおりの少女の姿。

小柄な女性の後を付いて歩きながら由貴は右耳から断続的に聞こえてくる暗号めいた言葉の羅列に脳細胞を活性化させていた。

やがて二つ棚を通過した幸音たちは中華料理の材料やレトルトパツクが並ぶ棚に到着する。

『Y2からY1へ。M18、製菓用のチョコレート入れました。棚9を離脱、レジ方面に向かっています』

「了解。Y2は行動O進行して、副店長に10番連絡」

『10番連絡了解。O実施します』

由貴は一瞬言われている意味がわからず幸音を見上げた。

幸音はファイルにボールペンで何かを書き込みながら、笑った口の形で傍らの由貴に話しかけた。前髪が降りた目の奥の瞳に剣呑な光を浮かべながら。

「気を締めていこうか。今回も、楽だといいいんだけど」

「はあ」

締りがない庄野の顔を幸音は咎めない。

ただ、再び棚から漫ろに歩き出し、店の出入り口付近へ向けて歩き出した。通り過ぎる家族連れ、老年の男性、女性。中年の婦人にいつも通りの挨拶を交わしながら。

やがて冷凍コーナーを通過すると、レジの様子が見えてきた。幸いなことにあまり多くの人の混雑は確認できない。緩やかにレジ通路に人が飲み込まれていった。

店内の凍るほど冷たい冷気が由貴の項にかかり僅かに身震いする。面接に来た時から気付いていたが、ここの冷気は異常だ。熱がりの自分でさえトレーナを着てちょうどいいと感じるほどに。それからもう一つ、おそらく幸音たちの今日のこの一連の行動に最も起因する問題点を由貴は早々から察し、長く疑問を抱いていた。

「吉村さ——」

「ちょっと待って」

清涼飲料水の手前に作られた「島」と呼ばれる酒類の集合体の存在を認めると、幸音がぴたりと足を止める。つられて由貴も足を止め、あ、と声を上げそうになった。

青果方面に向けてレジを無視して足早に歩み去っていく、黒い帽子の男。猫背気味に両手で藍色の大振りなトートバックを握り締め

ている。歩くたびに尻ポケットから飛び出た銀色の財布チェーンが環のように弛んでいた。

「Y1からY2へレジ横通過を確認。M18、青果へ移動中。確認できるか」

『確認済みっス。常習犯っスねー。動きに無駄がねえっスもん』

「・・・・。Y2の現在地は？」

『おっとすみません。Y2現在地は日配aです。——っと、幸音さん、今出ました！』

悠馬が大声で叫んだと同時に、キーンと共鳴が耳中で生じ、ひどいノイズが鼓膜と脳内を痛烈に刺激した。

由貴も幸音も同じ方向へ揃って同時に仰け反り、反射的にインカムを外す。

「っ」

「てえ・・・」

レジ方面から「イツテエ！」と野太い男の声が聞こえた。おそらく恵美子や潮、悠馬やインカムをつけているパートに至るまですべて同じ感想を抱いただろう。

由貴はインカムの起動を確認するため僅かに耳を当てると、耳障りな音が続いていた。モスキート音に近い高周波を延々と流した針の先のような高い音と雑なノイズが連続的に入り混じっている。

すると今度は、遠方から悠馬の怒鳴り声が聞こえた。

「待て！」

幸音は由貴の苦渋に満ちた表情を確認し、僅かに躊躇したがこれまで手に持っていたボードファイルを青年に押し付ける。

「行くよ、庄野くん！」

「は!？」

説明もなしに幸音は由貴を放置して走り出した。

小さくなる幸音の背中に事態が把握できず手渡されたファイルに目を落とすと、由貴はく、と目を見開いた。そこには先ほどまでインカムで交わしていた内容の全てが一秒単位で事細かに記録されていた。

『窃盗用防犯通信』と刻印されたインクの黒文字が僅かに滲んでいた。

「くそつ。そういうことか！」

由貴は絡まりあっていた複雑な糸がほぐれ、この事案がいつたい何で、どうして彼女達がこうしたまどろっこしいことをしていたのかようやく得心がいく。

ある程度予想はしていたが、まさか。

時間との勝負。

「時は金なり」と幸音が零した言葉の意味がくつきりと輪郭伴い明らかになる。

由貴は慌てて幸音の背後を全速力で追いかけた。

彼が幸音を追って、店の二つあるうちの一つの入り口――、青果コーナーに接する扉外へ到着するとその前で悠馬が倒れていた。

「くっそ・・・」

悠馬は舌打ちをしながら四肢を奮い立たせ、何とか立ち上がろうとするのだがその直前で手足から力が抜け再び地面に倒れ込んでしまふ。

「倉科！」

由貴が駆け寄れば、悠馬は眉根をきつく寄せて自由に動かない片手で由貴の胸倉を硬く掴んだ。指が白ばむほど強く握りこまれ、由貴は喉が圧迫され慌てて悠馬の両手を引き離そうとする。

しかし予想外に強い悠馬の握力は由貴が敵うところではなかった。

僅かに出来た布と皮膚の間を走ったことによって生じた冷たい汗が流れ落ちる。

悠馬は歪めた表情で声を発した。

「庄野、さん……幸音さん、を」

呼吸が苦しいのか悠馬はゼエゼエと息をついている。先ほどまで軽口が叩けるほど元気だったのに、この変わりようは異様だと由貴は彼に視線を走らせた。すると奇妙な違和感を悠馬の片手から感じる。

彼の手の甲に薄紫色の刻印が焼きついていた。

「これは……」

蜘蛛の糸のように張られた六角形の幾何学模様。

大学の授業で習った魔術刻印に間違いない。

「さち、ねさん、に。伝……。標的は——る」

蚊の鳴く声で囁かれた聞きづらい単語の一部を唇の動きで読み取って、由貴は息を呑む。

状況を察した由貴に悠馬は察したようにゆるく微笑んだ。

それから、由貴の胸倉から手はずし再び冷たい地面に沈没する。

魔術のせいで体が言うことを聞かないのだろう。

由貴は刻印によって生じた術式が、筋肉や神経組織を一時的に麻痺させる弛緩系の魔術であることを理解した。これは「魔導師ライセンス」A以上の資格がなければ知識を持っても使用を法律上で禁止されている系統の魔術だ。

禍々しい刻印を認め、由貴は歯噛みした。自分が所持するライセンスでは、解呪が出来ない。人体に直接影響する魔術の解呪は「命に直接関わらない限り」該当ライセンス取得者でなければ許されない。

「おっと、すっかりミスだね倉科くん。大丈夫かい？ 君が失態を犯すなんて珍しいこともあるもんだ」

「——え？」

心配がなかった。

由貴が瞠目する傍らで誰かが屈みこむ気配がする。

萎びた。けれども光沢のあるワカメだ。

「お仕事ご苦労様、庄野くん。君は無事みたいだね」

伸び放題ねじり放題の黒髪の下から三月の二重の双眸が眇められた。

「みつ、きさ」

「おやおや。喋る元気はないはずだろう？ 黙って大人しくしていい」といい

神経が痛むのか、指先一つ動かそうとするたびに苦痛が走るようだった。

副店長、西山三月は由貴の脇に座り込むとうつ伏せになっていた悠馬を仰向けに転がし、全身を観察する。ふーんとか、へーとかのんびりとした感想を洩らしつつ、自分のこけた頬のざらつく肌を指先でしきりに撫でていた。

「いやはや。これはちと面倒な……。ところで吉村くんの姿が見えないみたいだけど、彼女はいつたどこに行っただい？ 倉科くんがここでこうで、庄野くんがここにこういるってことは、犯人は？ もう確保して連行してしまったのかい？」

はて、タイミングが悪かったかなと三月は非常にのんびりと首を傾げた。

由貴は二度しまったと言葉を零し、すぐさま顔を上げた。視線をめぐらせると周囲には野次馬が囲いを作っている。それもそのはず、店の入り口で倒れている従業員と副店長が固まっているのだから。それに――。

「待てつつつてんでしょうが!!」

爆音雷光が如くはるか遠方から女性のものとは思えない怒号が響き渡った。

雷が地上に落下したかのような音量で、由貴は最初誰の声のものが判別できなかった。

なんだなんだと駐車場で自家用車を停車させた客達が足を止め始める。店の敷地の出入り口。二号線側でなく、近隣民家と隣接する細い道路に向かって二人の人物が壮絶な追いかけっこを繰り広げて

いた。

一人は体格立派なまだ若い黄色い靴を履く男。

今一人はずり落ちるエプロンを脱ぎ捨てて全速力で追いかける小柄な女性。

「神妙にお縄を頂戴しろ——！」

吉村幸音だった。

片腕を振り回しながら悲鳴を上げて逃げる男を鬼の形相で追走している。

「……なんだ、あれは」

呆氣にとられる由貴の傍らで「げふっ」と今度こそ本当に悠馬が沈没する。三月は慌てた風でもなく「ややあ、しまった」と呟き、見かけ以上に力があるらしく、悠馬を小脇に俵抱きにして立ち上がる。

「庄野くん。あとからすぐ、多分二分以内に石崎くんが来ると思う

から、それまで吉村くんをよろしくね」

言うなり三月は平然として気絶した悠馬を伴い倉庫へ向けて歩き去ってしまふ。

罪人座りのままばかと口を開けたまま様子を見守っていた由貴は、三月に言われた言葉を再度頭の中で反芻し、視線を右下から左下に移動させた。悠馬が伝えたかったこと、三月の言葉の意味。由貴はそれを正確に理解すると息を呑んで顔を上げる。

右耳に指を触れかけ、そこにはないものに対して大きく歯噛みした。

「くそっ」

こうなれば、直接彼女に伝えるしかないと由貴は立ち上がった。

周囲から「おお、立ったぞ」、「なんだなんだ」と声上がるがまったくお構いなし、外界の声をシャットダウンして由貴は幸音のいる方角へ向けて猛然と疾走し始めた。

幸音が追う対象は18歳くらいの少年だった。目深くキャップを被り顔を隠している上、幸音に背を向けながら全力疾走しているため、顔立ちは確認できない。背丈も脚力も幸音の及ぶところではない。

「くそっ」

入り口で倒れていた悠馬はおそらく由貴が回収してくれているはず。三月もそろそろ連絡を終え、二階から降りてきているだろうし、何より石崎も到着するはずだ。

だとするならば自分がすべきことは唯一つ。

「逃がすか!!」

幸音は必死で手を伸ばすが指先三寸で空を切る。風に翻る黒いジヤンバーの裾をも掴めず、幸音は己の不甲斐なさに思い切り眉間に皺を寄せた。

肌を切る初冬の風が鋼の切っ先が如く頬を打つ。駆け続けた為、喉や肺が空気を求めて悲鳴を上げていた。心音が痛いくらい拍動し、幸音は頭の隅で「ああ、明日は筋肉痛だろうな」と呟いた。

「いい加減に、しろ！」

幸音の怒号が空気を震撼させた。

青年の光を反射する黄色い靴が石を引っ掛けてまろび転げる。

——その隙を幸音は見逃さない。

「くなくそっ！」

「くっ」

倒れかかった男の体が前のめりに体勢を崩す。幸音は必死になつて両手を伸ばし、ジャンバーの薄いポリエステル表面を思い切り握りこんだ。布が裂けて綿が飛び出し、爪と肉の合間に細い丈夫な糸が入り込む。摩擦が生じてぶつ、と肉が切れた。

幸音は構わず押しつぶすように男の背中に雪崩れ込み、全体重を
押しつけてマウントをとる。

「吉村さん!!」

両膝を男の背骨の頂に寄せ、動きを静止させようと体位を変えか
けた時、鋭い呼び声が幸音の耳を打つ。

一瞬力を抜いて、後方から走り来る人物に眼を向けたとき、視界
が、ブレた。

正しくは、二重に。

分厚いレンズ越しに歪んだ由貴の姿が見えた。

「しゅ」

しゅのくん。

らしくなく、焦燥と動揺を緋い交ぜにした表情で庄野由貴が幸音
に向けて片手を伸ばし――したはずだった。

「あ・・・」

視界の先が暗転し、油を溶かしたような世界が広がる。水溜りにガソリンを零したような、異様な世界。状況を理解するより早く、幸音の体が硬くて冷たいものにぶつかった。顎先が削れたような痛みと、掌を引っかいたような熱さ。

昔、遊戯の途中で転げた時の感覚と奇妙に一致した。

「幸音さん!!」

指先を動かすたびに、針先で細かに指されたような激痛が走り、幸音は思わず声にならない悲鳴を上げた。

「幸音さんっ!!」

いつたいたなになが自分の身に起きたのか、確認しようと瞑っていた瞼を必死で押し上げ、幸音は息を飲んだ。揺らぐ視界のブレた焦点の先、心配そうな顔で駆け寄ってきた由貴の背中に陽炎のような人影が回りこんでいる。

幸音は気付くや否や両手を伸ばして、それを引き倒していた。

「うわっ！」

白髪の毛先が宙に舞う。

すぐ後、腹部と肩口を鈍痛が襲い、幸音はたまらず大きく咳き込んだ。

「げほっ」

爪立てて引き倒したその人物の傍で焦げ臭い匂いにする。

冬ではありえぬ突然の蒸気。立ち上る陽炎。

体の下にあったはずの体温と弾力は既になく、腹部を庇って蹲った幸音の意識の向こう側で足音が響いた。

「幸……、吉村さん！！ 吉村さん、大丈夫ですか！？」

逃げ去っていく二人分の足音。

揺り動かされながら、痛みのため幸音は返答も出来ず、石崎が慌てて到着するまでのほんのしばらく、冷たいアスファルトの上で身を丸めていた。

第3章 誰が為に腕は鳴る!?

無鉄砲、無鉄砲、無鉄砲。

「幸音ちゃんの、無鉄砲の大馬鹿者!」

顎下にガーゼ、掌に包帯を巻きつけ自宅で療養していた幸音を見るなり、陽子は顔を真っ赤にしてかんかんに怒った。

「透くん」

「僕は知らないからね。用心するようになって以前から言ってたことだし」

本日は灰色のパーカーの上から割烹着を着た狐の面の透が薄情な声を出す。

おまけに「自業自得だよ、さっちゃん」と口笛を吹きながら来客用に用意した林檎を呆れて傍観する四名の友人達に差し出した。

「もらい物ですけど、どうぞおあがり下さい」

ウサギ型に器用にカッティングされた林檎に突き刺さるのは五つの爪楊枝。

「お、旨そうな林檎。いただきますーす」

「高良さん、遠慮って言葉と無縁ですよね」

お手拭をくると丸めながら、右手で林檎を一つ取り上げた高良の横で紅茶を盆に乗せて現れた恵美子が呆れたように言葉を零す。

幸音の部屋に集った面々はそれぞれ手前勝手に好きな場所に腰を下ろしていた。

寝台の脇に陣取るのはウサギの毛皮で作られた鞆を斜め掛けにした幼女風少女、菅原陽子だったし、高良は部屋の中心、液晶テレビと対面する赤いソファに陣どっていた。恵美子は透の手伝いをしながら本棚の手前にクッションを敷いて足を伸ばしていたし、透は給

仕をするためあっちに行ったりこっちに行ったりと部屋の白い扉から、幸音の寝台側まで忙しなく移動していた。

「こーゆーのは早い者勝ちなんだぞ。ひの、ふの、み、いつ……。一人一個、俺が四個。ほら、西山も庄野も遠慮なく食えよ」

自分の手柄のように林檎を差し出す高良に三月と由貴は肩身を狭くしながらしよぼしよぼと受け取った。幸音の家に訪れる道中、散々陽子に絞られたためだった。

彼らが部屋の四隅、本棚の脇にぽかりと開いた板床の空間に二人して暗い顔をして固まり、正座しているのは陽子が命じたためである。

そして、陽子は寝台の上で重湯を啜っていた幸音に人差し指を突きつけ容赦なく可愛らしい声で怒り狂っていた。

「女の子なのに顔に傷作ってどうするの!？」

「あ、いや。ヨーコさん、あたしより倉科くんの方が重症なんですケド」

駆けつけた三月の処置が早かったため、軽症で済んだもののあの

まま放置されていれば間違いなく倉科悠馬の頸部を中枢とする四肢神経はその末端に至るまで活動の意味を忘れていたはずだ。よくもまあ、あの激痛の中で動けたものだ。幸音はひそかに悠馬を尊敬してみたりした。

しかし、陽子は違つたらしく悠馬の家を見舞うなり「男のクセに情けない」だの、「股下についてるものちゃん切れ」だの、女性としては有るまじき発言を連発していたらしい。さすがに言いすぎだろうと笑つのは高良の言で、倉科邸へ赴く陽子の抑え役として同行を求められたものの、まったく役に立たなかった恵美子は己の責任を感じて深くしよげていた。

しかし、高良青年が言うところによれば陽子の怒りがこの度あまりにひどいのは「ストレス発散のための自分用サンドバック、通称倉科悠馬が、自分以外の人間によって使用不可能に一時的に成り下がったこと」と説明した。

もつと噛み砕いた説明を求めた恵美子に対し、高良は煙草の煙を燻らせながらのんびりと応じたという。

曰く、陽子は自分以外の人間が自分の所有物に手出しをしたことが許せなかった、という。

ああ、なるほど、と理解の早い恵美子はばん、と手を打ちかけすぐに言葉を撤回した。

そのあとストレスを溜め込んで持て余した菅原陽子は、タイミン
グ悪く現れた三月に噛み付いて、放送禁止用語を駆使して罵倒し始
めた。恵美子はその陽子の姿を生暖かく傍観し、静かに記憶を心の
奥底に封印したのだった。

「そういう問題じゃないでしょ！ 副店長からくれぐれも、安全第
一にって言われてたはずだよ！」

ぶりぶりと怒り心頭の陽子さんは林檎をボリボリと貪っている高
良の背後、視線が合うなりギクリと身を強張らした二人の野郎を鋭
く見つめた。吐き捨てるように「役立たずどもめ」と言い捨て、少
しは落ち着いたのか恵美子が白いテーブルの上に用意した紅茶に口
をつける。

幸音は陽子さんが静かになったので再びゆっくりと重湯を啜った。

幸音の部屋は恵美子の部屋の隣にあり、家の二階に面する東向き
の朝日が眩しい六畳スペースの洋室で、恵美子の部屋は昔筆筈が在
った名残の和室である。幸音には一人妹がいるが、破天荒で天真爛
漫、しっかり者の性格で二年前に突然家を飛び出し、自宅から10
分のアパートに未来の結婚相手と同棲生活をスタートさせた。それ
以来空室になった部屋を恵美子がい使い始めたのが去年の五月のこと
で、妹と仲良しの恵美子は彼女の家にもよく遊びに訪れているとい
う。

昼前の明るい日差しが部屋に入り込み、ゆるく引かれたライムグリーンのカートンを照らしている。寒いので部屋は締め切り、暖房を入れているが人口密度が高いせいかやや暑い。幸音はひんやりとした指先で首筋を触れ、その冷たさに小さく息をつく。

今日は土曜日で、本来なら飲み会が開かれる手はずとなっていたのだが、主要メンバーがこの有様であるので見事に順延の運びとなった。キャンセル料は取られなかったし、別の日程に組み替えればよかったただけなのだが幸音は由貴に申し訳なく思う。

「なんか、すみません」

幸音は重湯を握り締める両手にもろもろの思いを込めて、深く嘆息した。

陽子は口をつけていた紅茶から唇を外し、やや目をまん丸にする
と今度は慌てて首を振った。

「さ、幸音ちゃんは悪くないよ！ 悪いのは万引き犯！」

「そうだぞー。お前が謝る必要なんてどこにもない。と、菅原ー林
檜もらうなー」

「ちょ、っと、何かつてに人の食べ物許可なく喰ってんのよ！ い
いわけねえだろ、この節操なしつ。——高良ちゃんの言うとおり、
幸音ちゃんが悪い要素は一つもないよ。悪いのは犯罪者！ 大体な
んで無抵抗な人に向かって魔術なんて使うかな。頭、沸いてたのか
な」

「あ、それは俺も思った。いくら知識があるからつてたかだが万引
きだぞ。魔術まで使つて逃げる必要あるとは思えんな。それに結構
な健脚だったんだろ？ 足に自信があるなら使う必要がそもそもな
いだろつ」

「だよー」

「たかだか、万引きって・・・」

恵美子が失望したように両肩を落とした。

透は恵美子の横で裁縫道具を広げながら、自作のクマのぬいぐるみのボタンを付け替え始めた。染み抜きされた真白な割烹着にはパリッとアイロンが掛けられており、透の几帳面さがわかるというものだ。

「いやあ、元森くん。高良の言うことにも一理あるね」

「なあにー役立たず、今度はどーゆーいいわけ考えたの？」

「ヨーコさん」

「ふんだ」

幸音がやんわり嗜めると彼女は頬を膨らませてそっぽを向く。

まだ許したわけでないとの意思表示である。

しかし通常ならここで陽子のご機嫌取りに手を打つ三月は軽く陽子を見無視して背筋をただし、鬱屈とした闇色の瞳を幸音たちに向けている。由貴は軽く唇を引き結んでただ黙ってことの成り行きを見守っていた。

三月はちょっとだけ薄い唇で笑みを作り、透が差し出した紅茶を受け取ると角砂糖のポットから山のようにざらざらと砂糖をカップにぶち込んだ。琥珀色の液体が僅かに水面上から上昇するが、カップの外に零れ落ちることなく静かに水面上で波紋を連鎖させる。

銀色のスプーンをかき回しながら三月はカップに視線を落とす。

「みんなが知つての通り、魔術師、魔導師なんて資格、国家資格というわりにずいぶん沢山の人間が取得してるよね。それこそ自動車免許か調理師免許みたいに。曲り形にも医師免許や看護師免許と準じるくらい責任を伴う資格だって言うのに、下は小学六年生の青少年、上は九十のご老体までさまざまだ。しかもこの資格はある一定の条件を満たさない意外、返還の義務がない」

幸音は寝台脇の丸机に重湯の入った皿を置く。

三月は砂糖湯同然の紅茶を優雅に啜りながら一息つくと、透が差し出した皿から礼を述べて林檎を一つ取り上げ、突き刺さっている

爪楊枝をくるくると回した。ひっくり返った林檎ウサギが回転している。

「学校の教育も充実しているし、今からちょうど20年まえに当時の文科省が魔術を学問として学習指導要領に導入したかいあって、今ではどこでも珍しくない一般的な資格となってる。授業で扱われている英語のように、魔術も学問としての体系を社会的に認められたんだね。でもその一方で魔術は現代社会に大きな膿を生じさせてしまった。吉村くんや元森くんたちは生まれてない頃だから知らないだろうけど、昔ある事件があってね。自由と可能性の象徴として社会全体に常識として浸透していた魔術という存在に一石を投じるきっかけになった事件なんだ」

知っているかい？

ひよろりとした笑みを閃かせた三月は恵美子、幸音を順に見た。

由貴は面を上げ口を動かそうとして失敗し、再び押し黙ってしま
う。

「それ——、今から二十八年前に社会問題を引き起こした魔術倫理問題ですね。生体に影響する魔術を利用して成長や能力を高めようとして子供達の多くが犠牲になった事件。確か、西梅田林臨海魔術事件でしたか」

人形のボタン付け替え作業が終了した透がクマの人形の手足を動かしながら顔を上げた。

物知りだね、と感心する三月に照れたようにフードの後ろを掻いて透は言葉を続ける。

「魔術とは、一種の自然科学的方程式の延長線上に位置し、術式を展開することで通常世界では考えられないような異常状態を生じさせる、一種の擦れた物質学なんです。物理学といってもいいかも。魔術ではざっくり分けて作用できないもの、作用できるものの二つに構造が分解されます。代表的な作用できないものは非物質的存在である、時間、空間、精神、心、魂、といった目に直接見えない存在。そして、作用できるもの」

「熱、光や風、水。物体の所持する振動数や固体元素が有する振動派、通常波長と称するものが操作できる存在だな。熱なら物体の振動数を増やして摩擦を起こせばいい、発火なら空中に散在する炭素原子を集積し摩擦で擦過熱を生じさせ、火種に与えてやればいい。風もこれを応用できるし、水なんかそれこそ空気中に粒子が存在してるからな」

恵美子が食べない分の林檎を抓んで頭からかじりながら何の気なしに高良が応えた。

「魔術の術式は自然界の法則や物理秩序に従ったもので、その枠組みを超えて作用することは難しい。生体脳科学者なんかは魔術を使用できる人間の脳派を調査して、素質のない人間と素質のある人間の区分研究をしようとしたが結局失敗してたな。スプーン曲げや念力、空中浮遊なんてやつはマジックじゃなけりや大概魔術の一部だ。超能力とかいわれてた存在も、概念としちゃあ魔術と大差ないいや、本当は言葉なんてどうでもよくて、事実どっちも同じものだ。言葉には力、波動が宿る。それが方程式内で世界という魔法瓶の中で化学反応を起こしているに過ぎないのさ」

「・・・・・・」

恵美子がぽかんと口を開け、高良を真直ぐに捕らえる。幸音も恵美子とまったく同じ表情をして林檎にかじりついた高良をじっと見つめた。

静かな沈黙が気まずく部屋中を満たした時、注目の中心にいた高良は異様な視線を察知して声を上げた。

「な、なんだよ。揃って俺を見やがって、何か間違ったことでも言っただか」

「いえ。ただ・・・」

「高良さんが珍しく、まともなこといったなあって」

「うん。そこまで深く考えてるとは思ってなかった」

「ひどい！ お前ら最悪！ 今まで俺をなんだと思ってたんだ！？」

喚き散らす高良を横目に女性陣の反応は淡白なものだった。

「わがままで」

「やりたい放題」

「自己中心のナルシストで、ロリコンの超変態男。つまり人類の敵、だね！」

さすがに陽子さんほど高良のことを悪く思っていなかったが、幸音と恵美子は顔を見合わせ申し訳なさそうに眉尻を下げた。

それがますます高良の不快感を誘い、高良は額に手を当てて背後に仰け反った。

「だーっ！！ 何度もお前らの窮地を救ってやった俺を、お前らはそんな目で見てたのか！？ 特に吉村。お前は俺にでっかい借りがあるはずだぞ？」

「うっ」

指差し名指しで幸音を睨みつける。

心当たりのある幸音は目を泳がせ高良から顔をそらした。高良はむっつりと押し黙ったまま由貴へ視線を送り、軽く肩を竦めると今度は陽子に向き直る。

「それにだな、俺は確かに有能で自他共に認める天才だが、ロリコンの変態とはどういうことだ菅原！」

「そのままの意味だよ。何か語弊でもあった？」

きょとんとわざとらしく小首を傾げた陽子を、高良は刺しそうな目で睨みつける。

「ぜんっぜん違っただろうが！ お前の性癖と俺の趣味を一緒にするな！」

「へー。やっぱり趣味なんだー。幼女好きは趣味なんだー。へー。そうなんだ。キモーイ。高良ちゃんのヘンターイ」

「誰が幼女好きだ！ 勘違いするな。ったく、だから俺はお前みたいなトウの立ったような若作り女は嫌いなんだ。お前みたいな人間がこの世に四割以上存在するとかえるだけで辟易してくる。それに引き換え子供はいいぞ。純粋な疑いを知らない目！ お前もちっとは見習え！」

「うわ、キモ。マジキモ。相当キモ。子供好きとかどの顔がほざくかって言うか、子供って言うとなりの子も対象内？ ってことは、ゲ

イでシヨタでロリコン？ うっわー。マジばねえっスよ高良ちゃん、もう人生オワリだね」

「お前は、なっ！！」

「キヤー。高良ちゃんに犯されるっ」

「誰がお前なんか！！ 寝言は寝て言え！！」

「おやおや。賑やかでいいことですね、っと。庄野さん、紅茶どうぞ」

「あ、ども。いただきます」

透は空になった皿を脇に下げながら由貴へ紅茶を勧めた。話が明らかに逸れているのに誰も止めようと元の軌道に戻そうともしないのは、このやり取りが面白いばかりでなくと陽子のばっちりを受けるのが嫌だからである。

由貴は慣れない手つきで紅茶を受け取ると、やや冷めた薄手の力ップに口をつける。

「まあ、高良たちはさて置いて、先ほど四辻くんが言っていた西梅田魔術臨海事件についての概要をざっと説明しようかな」

ざらつく顎の髭を撫でて三月は何事もなかったかのように話をし始めた。

自然と視線を正した幸音は指先にかすかに走る痛み顔に顔を顰めつつ、深く頷く。

三月は手にしていたカップを手を伸ばして机の上に伸ばすと、足を崩して体育座りをした。陽子は高良と嫌味の応酬を繰り返しており三月の行動に気付いていない。

「まあ、庄野くんも堅苦しく考えず足を崩して聞きなさいよ。事件が重大な割には、内容はいたって簡単簡潔だね」

自分が膝を崩したものだから傍らの由貴にもすすめ、共犯の絆をいつそう増した三月は油で光る眼鏡を取り外して自分の袖でレンズを拭く。

「あの事件はね、魔術で操作できない時間というものを、細胞を成長させることによって無理矢理可能とした事件なんだよ。個体にはそれぞれ成長のスピード、細胞が分裂する周期や時間に差があつてね、だから同じ時期に生まれた子供でも一人は背が高かったり低か

ったりするという差異が認められる。それは自然界では当たり前のことなんだよ。誰もが誰も、同じ成長スピードの中で生きているわけではないのだからね」

「西梅田魔術臨海事件というのは、子供達の個別の成長スピードと関係あるんですね」

「まー、言ってしまうえばそうだね。当時、西梅田に最先端の魔術科を所持する養成高校があつてね。子供達といっても第二次成長期途中の15歳から18歳までの高校生を対象としたものだったんだけど。魔術も個体差によって使える能力の限界や特性がある。それを均一化するために、遅延している人体側面的な成長を活性化する魔術を教師みずから生徒達に施したんだ。もちろん自分の能力が高くなるなら、と生徒側も両親側も承認してのことだったけどね」

「教師自ら、両親も・・・」

「周知の通り我々の細胞は日々死んで、皮膚の下から新しい細胞が次々と生まれ出でている。酸素を吸入するほどに人体は酸化し、老化に結びついているのだけど。ともかく、成長スピードを速めればそれと比例して死へと近づいていくわけだよ。能力を平均化、あるいは増強するために始まった実験的な成長増進術式の展開によって、人間の細胞が急激な変化に耐えられなくてね。皮膚が溶解し、細胞が内から破壊されて蛾のように溶けて死んだ子供、あるいはまだ高校生なのに老女のような容姿の娘、細胞の過剰増殖などによって指や目玉が増えた少年。実際に目にとすると映画のスプラッターなんて

はるかに生易しい、そんな有様だった」

まるで実際目にしてきたかのように三月は瞳に複雑な色彩を浮かべていた。

「もちろんメディアに露出するには時間が足りなかったね。最初は生徒達の両親も賛成していたみたいだけど、やはり自分の子供達が犠牲になっては黙っていられなかったんだろう。人為的に魔術を人体に加えた結果、生じる結末をどこかで予想していたのにな。まあ、こういう理由であれ魔術が生体に与える影響が考えられ始め、魔術倫理という分野が出来たのはこの事件がきっかけなんだ」

誰もが当たり前のように取得する魔術のライセンス。それ故に、魔術を防御以外の目的で人に向けることは禁止されている。大体、日常生活で魔術などという代物はまったく不要だった。作物は水と光があれば成長するし、現在の科学技術では品種改良がなされ、より質が良く病気にも強く成長しやすい品種が多く誕生している。火を熾す道具も昔ほどではないにしろ、ガスやライターなどの代物もあるし、少数派ではあるが魔術とまったく無縁の生活をする人々も存在する。

ファンタジーの世界ではないのだから、魔術と魔術で戦いあうという事態はほぼありえない。それこそ、犯罪と位置づける事案でなければ登場さえしてこない。

魔術があらゆるところに当然の顔をして存在する中で、現在生じている殺人事件の主要凶器は刃物であったし、銃社会でないにしろ魔術は命を奪う道具としてそのずっと低い位置にある。

望めば空を浮遊したり、肉体にかかる負荷と四肢を千切らす危険を顧みなければ可能な限り早く疾走することも可能だ。火の玉や水の玉だって作り出すことも出来る。

しかし、魔術は世界の法則の枠組みの中にあり、それを使う人間も法則の内側に存在する。発火を伴う魔術を使うのだって指先から炎を生じさせる場合も、「いかに自身の指を火傷しない方法」を編み出すことが重要なのだ。魔術で容易に火は出せるが、扱うとなると何でどう扱うかが重要になる。

木の杖であれば熱で焼けるか焦げるか、燃えるかであるし、前述したように指先であれば皮膚が熱傷を追う可能性も考慮しなければならぬ。現実にはゲームではないのだ。魔術は必ずしも万能でないし、無から有を生み出せないのは世界の理である。

高位ライセンス保持者はその理の中で自在に魔術を操っているように見えるから、高位ライセンスを取得するに至るのである。

「そう考えると、魔術なんて学問まだまだ発展途上もいいところで、かなり危険な学問なのかもしれないけど。とにかく、ライセンスという枠組みが体系化され、魔術に倫理が伴われるようになったのはこういう経緯があったからなんだ。だから、魔術を使うものは魔術による身の防御、もしくは命の危機に関わる場合の他は生体を対象にその使用を全面的に禁止されている」

「西村さんは今回の一件をどう処理するつもりですか？」

透が三月に視線を投げた。

狐面に額から鼻頭にそって描かれた三本の赤い線が白い光沢を放つ。

三月は静かに微笑を湛え、はて、と小首を傾げる。

「まあ、僕に判断できることじゃないからそれは店長と役所の人たちに任せるよ。捕まえたあとね。時に庄野くん君はどう思うね？」

長い間押し黙って沈黙を守ってきた由貴に三月は唐突に語りかけた。由貴は驚いて顔を挙げ、そしてまた俯いていしまう。何か言いにくいことでもあるのだろうか。

幸音はまだ鈍い痛みを放つ指先に込めていた力をそつと外し、会話の中心となつた由貴の白髪を注視した。

「どう、とは？」

「おや、僕の勘違いだったかな。君は今回のこの一件に関して何か含むところ、いや、言いたいことがあるように見えたんだけど」

軽く苦笑して肩を竦めた三月に、由貴はぎよつと目を剥いた。波打つワカメの隙間から真剣な色をした三月の瞳があった。

由貴はすっかり冷めてしまったカップを机の上に置くと、三月に倣って足を崩し僅かに身じろぎすると隣横の男ではなく寝台の上の女性に顔を向けた。顎にガーゼを貼り付け指には包帯がぐるぐると巻かれている人だ。

あの時、幸音が由貴を引き倒していなければ間違いなく寝台にいたべき存在は自分自身だったし、彼女は無事だったはずだ。だが、彼女は己の身を優先せず愛想も協調性もない自分のような人間の安全を優先した。

ひどく、それがイラついて由貴は瞳に複雑な色を浮かばせる。

「別に、俺は。個人的に含むところがあるわけじゃないですけど」

ぼつりと呟いた由貴の言葉に誰もが動きを静止した。

慎重に言葉を選びながら青年はその白い前髪を指先で弄ぶ。

「……、あえて言うなら。店の防犯面はもう少し強化できなかったんですか？ 他店のスーパーと比べてうちの店のセキュリティは甘すぎますよね。むしろないほうがマシというくらい穴だらけで、警備も店独自の防犯システムというより外部民間企業に委託してい

るみたいです。これでは今回のような魔術的事案についての対処がしかねます。防衛防御主体の魔術防犯システムが店で認可されていれば、逃亡した窃盗犯に対し店の財産権利を守るためという名目で捕縛遅延系の魔術の使用が許可されるはずですが」

「まじゆ、え、ぼう？ 幸音さん、あたし頭悪いからよくわかんないんですけど、庄野さん、え、何言ってるんですか？」

とても理解が追いついていかないと恵美子は引き攣った声を喉から押し出した。幸音は呆れるでもなく失笑するでもなくやや困った顔で恵美子を見つめ、噛み砕いた説明をしてくれるものはいないか周囲に視線をめぐらせる。しかし陽子と高良は部屋を中心にプロレスを始めてしまっているし、副店長は副店長で新しく注がれた紅茶に砂糖をぶち込むので必死のようだった。

上手く説明できる自信がないものの、恵美子を放置するわけにはいかず幸音が口を開きかけた時だった。

「恵美子ちゃん、いたって簡単にざっくり説明するとね」

「よっちゃん」

狐面の透が深く頷いた。

「さっちゃんところの店の防犯システムがあまりにも使えないから、魔術で悪いやつを捕まえられるような装置を作ったらいいんじゃないかって言ってるんだよ」

「あー。なるほど。そういうことかー」

ざっくり説明しすぎだが透の言うことは間違っていないので幸音は曖昧に首肯した。

由貴が指摘するようにスーパーニコニコの防犯システムはザルだ。非常に原始的な手段を用いての防犯、つまり現在も二十年前に使用されていた古典的手法での防犯対策しかしていないのだ。具体的には防犯カメラと夜間の警備システムの導入で、それ以外は特に何もしていなかった。しかしこれには重大な理由があるので、店の事情を知るものは口を挟むことを避けてきたし、ある種の禁忌タブーといってもよかった。

「え、防犯システムって。あの、あれって、あの・・・」

事態の深刻さを自ら認知し、気付かなくていいことにまで気付い

た恵美子は泡を食ったように言葉を濁し始めた。顔面蒼白に色を転じ、視線をあらゆるところに彷徨わせている。

「でもまあ、今回みたいな法を犯した窃盗犯が出現する確率自体は少ないし、現状発生した窃盗犯のほぼ九割は確保、警察への引渡しを経て店の出入り禁止の処置はとっているはずだから。今回の一件が^{イレギュラー}とても特殊^{イレギュラー}ってただだよ」

「……うん。でも」

両肩を情けなく落とした恵美子はちらりと幸音を窺った。

その心情が痛いほどわかり、幸音は曖昧に微笑がえすことはせず無言で首を横に振った。恵美子は僅かに不安げな表情を解いたが、次なる由貴の言葉に凍りついた。

^{イレギュラー}「特殊^{イレギュラー}って、気軽に言いますけど今回は怪我人まで出たんですよ。悠長に見逃し続けていたツケのせいで。この問題を放置し続けると、また同じ事態が生じるとも限りませんし、まだ犯人は捕まってる^ん」

「犯人がもう一度店に来店する可能性は低いかもしれないよ？」

「予測予想で物事を解釈してもらっては困ります。今回が不測の事態とおっしゃるなら、また次回同じかもっとひどい不測の事態が生じるかもしれない。倉科だって処置が遅ければ一生動けない体になっっていたかもしれないし、吉村さんだって」

「え、あたし？ いや、あたしは全然平気。こんなの別に怪我のうちにはいらな」

「吉村さんであるということが重要なんじゃない。俺は、……いや、僕は誰かが誰かのせいで怪我をするのを見るのはもう沢山なんです！」

拳を硬く握り締め、由貴がはじめて怒鳴った。

鳩が豆鉄砲食らったが如く目をまん丸にした面々は、続く力説に口を挟む隙を与えられない。

「とにかく、防犯システム、主に魔術系の対処方法について再考していただくか、システム自体の見直し、強化を求めます」

いつもの陽子なら「嫌なら辞めてもらってもいいんだよ」と零すところだが、今回は違った。何か思うところがあるのか高良の髪の毛を掴んで背中に押し掛かった状態で、考え込むように目を閉じる。高良は背中ofやんちゃ娘を負ふさりながら暢気な声を出した。

「おい、お前。どうして現状の防犯システムがザルだとわかった」

システム担当の高良が興味深そうに尋ねた。その声音はどこか面白がっているようでもあり、倉科由貴という人間を試しているようでもあった。

幸音はなんとなく、壮絶に嫌な予感がした。

高良に話をふられ、由貴は一つ首肯すると慎重に答え始める。

「以前から、……バイトとして入る前から気にはなっていました。それに、対象の捕縛行動を開始する前、吉村さんが今回も楽だと言っていました。彼女の言葉から、今までにも同じことがあったことに相違ない、と俺は予測します」

「……」

苦々しい顔をして齒噛みした幸音の傍らで恵美子が不安げに眉を顰めた。

「うちのスーパーは田舎といっても学問機関が密集する地区に近い

場所にある。利用客は十代前半から六十、七十代前半と幅広いですが中心層を担っているのが十代後半の若者や三十代から四十代にかけての主婦層です。昼間には役所の人間や学校関係者、ナマ協の社員、そして近隣大学や高校からの生徒の姿も見受けられます。俺を含めて、同じ年頃の人間はバカが多いですからね。色んなやつがいるし、全員がいいやつとは限らない」

「ほう。それで？」

背中から陽子をずり落として聞く体制に入った高良は面映げな光を生じた瞳を由貴に注いでいる。由貴は最初は戸惑いつつも、やがて滑らかに言葉を押し出していった。

「中にはゲーム感覚で万引きを繰り返す連中もいるってことです。失礼ですが、万引きの総てが従業員に認知されている可能性は限りなく低い。実際は見えないところでの犯罪が多いと、俺は思います。今回はたまたま棚卸し作業でいつもより注意力が散漫になるからインカムをつけただけで、偶然倉科が素行の怪しい人間を発見したに過ぎません。それに、その人物だけに着目して注意を向け続けているとかえって他の場所で生じている犯罪などには目を向けられなくなる。はつきりと言わせてもらえば、今回犯人が二人いたという事実も防犯システムが完備され、連動して作動していたなら誰も傷つかなかったし、犯人を手っ取り早く確保できたと思いますけどね」

「正論だな」

「どうも」

皮肉の混じる高良の声音にも表情一つ変えず由貴は小さく会釈した。

「じゃあお前さんもううちの防犯システムは強化が必要って言つ立場なんだな」

「このまま働かせていただけるなら、是非もなくまずシステム強化が必要だと思います」

「ふーん。なるほどねー。ま、俺は最初から賛成だけど」

「ちょっと、高良さん!」

声を上げたのは恵美子でなく幸音だ。

寝台から体を動かして高良たちに鋭い視線を送っている。その顔には苦渋が満ちていて、お世辞にも穏やかとはいえない。

「さっきから聞いてればいいいたいこと言いたい放題、ちょっとは事

情つてものを加味して加減してくれてもいいでしょう!？」

「どうして吉村さんが怒るんです？」

急に声を荒げた幸音に驚いて、彼女のために言葉を紡いでいたはずの由貴は軽く目を見張って目を瞬かせた。

「怒るもなにもっ」

「——吉村、俺は最初から言ってただろ。ちゃんと責任持てるのかってな」

「それは・・・」

「菅原もこの件については口を挟めない。お前の独断専行で店長に願ひ出たんだから、責任取るとなればお前の首だろうが。ま、パート如きのお前の首なんぞアテにもならんが、ないよりはましだ」

いつもは幸音に優しいはずの高良が敢えて痛烈な言葉を練りだすのは、彼にだって今回の一件に対する複雑な思いがあったからだろ
う。

本来店と店員を守るべき防犯システムが作用しなかったことを彼は齒がゆく思っていたのかもしれない。完璧であってはならない防犯システムゆえに、それでも最低限の処置を施していたはずだったが、彼の置き土産は意図に反して幸音たちを守るに至らなかった。さらに、あの日現場に高良はいなかった。結局、何も出来なかったという自責の念が彼を苛んでいたのかもしれない。

店の防犯担当にとって何よりも手痛い衝撃は、自らの責任ではないにしろ「守るもの」が「守れなかった」ことにあるのだらうと幸音は検討をつける。

高良は一呼吸置いて幸音から恵美子、そして透を眺める。

「スーパーは遊び場じゃない。馴れ合いがしたいならよそでやれ。俺たちは店とその財産を守る義務がある。そのための防犯システムだ。先の一件を除いて、俺が今まで窃盗が生じて黙認していたのはお前たちが揃って無傷で犯人を確保できたからであって、現状の防犯システムの存在を許認したわけじゃない」

「・・・・・・」

布団をきつく握り締めるものの視線を逸らさぬまま真直ぐ高良を見据える幸音の様子を眺め、高良は爪楊枝を口の端で銜えたまま猫背気味に頂垂れた。悄然としているのはかえって高良のほうだ。

「おい、三月」

「おやなんだい、高良。ここまで言ったくせに、後は僕に押し付けるなんていうつもりかい？」

「………わかった」

高良は深く溜め息をつき、なりゆきを見守っていた由貴を盗み見る。

「何が、わかったんですか高良さん」

幸音の言葉尻から僅かな怒気が漏れ出ていた。

ここで感情を爆発させるのはお門違いだと、彼女自身もわかっているはずだ。けれど、それでも高良は言わねばならなかった。

「俺は最初からこっち側だ。それを今更変えるつもりはないし、今後也多分ない。だがそうだな、お前が本当に現状維持を望むならチャンスをやってもいい」

どこまでも偉そうで、どこまでも勝手な高良だが、それは彼がこれまで培ってきた経験と数々の実績に裏づけされた言葉だった。経験も年齢も、実績さえも不足している幸音が真っ向から対峙できるとは思えない。だから、それをわかった上で高良は一つだけ道を残してくれるようだった。高慢に見えて公平、それが美宝高良という人物だった。

「どうすればいいんですか」

「知りたいか」

緊張する幸音に対しにや、と高良は意地の悪い笑みを浮かべた。

否、意地が悪いというよりは新しい玩具を手に入れた子供そのものの無邪気（邪悪）な笑顔だったのかもしれない。

「要は簡単なことだ。現状の防犯システムで維持をし続けられるということを立証すればいい。だが、また窃盗を誘発するような事案は限りなく避けたい。そこで、だ」

「ごくと生唾を飲み込んだ幸音をはじめ、由貴や恵美子は身を乗り出して高良の言葉に耳を済ませる。

「今回の窃盗犯を捕まえる。地の果てまで追いかけて、資格を剥奪した上で牢屋にぶち込んでやれ。今年中に。条件はそれだけだ」

「・・・それ、だけ？」

「ぱちぱちと瞬きを繰り返す恵美子の傍でいつの間にか移動していた陽子が「なーんだ」とつまらなさそうな声を伸ばした。

三月と透は苦笑し、したり顔の高良は幸音にやわらかく微笑みかける。

「ただの窃盗犯としちゃあ今回のやつは同じ魔術を使う側の人間からして許せんだろう。だったらそれ相応の報いを用意してやらんと先方さんにも失礼だ。だが、俺はまだ防犯システムの改善と向上について諦めたわけじゃない。そこだけは勘違いするな」

言葉に喜色をまぶしながら高良は声高く宣言した。

「よって、これより、チーム制による犯人捕縛作戦を展開する！」

破竹のように轟いた高良の一言に、三月以外の全員が揃って批判の声を上げた。

「ちょっと待ってください。危険なことはするなって、そういう考えじゃなかったんですか!？」

いの一番で声を荒げたのは珍しいことに恵美子だった。もともと表立って主張をすることが得意でない彼女としては珍しく、片足立ちになりながら高良に突っかかる。

高良は片眉をかすかに上げると遠慮なく話を続ける。

「そうは言っていないだろ元森。俺が言いたいのは現行の防犯システムじゃ不十分で、現状維持したいならそれ相応の成果を挙げて見せるってことだ」

「威張って言うことですか!」

「威張るも何もお前、いったい吉村が何のために迂遠な言い方したのかわかってないのか?」

「そ、それは」

頬杖を付いて赤いソファに寝そべる高良は気まずく視線を戦がせる恵美子に退屈な吐息を吐いた。

「お前が反対する理由もわからんでもないがな。俺とてこんな面倒くさくてなんも利益にならんことは極力したくない。だが、そこにいるソイツがただじゃ引き下がりゃって言う目をしてるもんでな」

ソイツと指差されたのは紛れもなく幸音のことである。

「まあ、それに、吉村が言っていた事情とやらも加味してやらんことには話は進まんし、可哀想だろ。俺とて別にお前たちが憎くて言ってるわけじゃないんだからな」

「そんなことはわかってますけど。でも」

「あーはいはい。その先は言うなよ。まったく、どいつもこいつも頭が固い連中ばっかでやんなるよ、ホント。お前は違っような、吉村？」

「高良さん、条件ってホントにそれだけなんですよね？」

おどけて肩を竦めた高良の言葉に念を押すように問いかけて、幸音はしんと静まり返った部屋中で背筋を正した。

「幸音さん！ 本気ですか！？」

幸音の声にぎよつとして声を荒げた恵美子は彼女を振り返った。幸音は恵美子の問いかけに応じず、凜然とした態度で高良の言葉を待つ。しかし、高良が言葉を選んでいく間に恵美子が口を挟んだ。

「ダメですよそんなの！ 相手なんて何か知れたものじゃないし、第一、その人たちのせいで幸音さんが怪我をしたって言うのに。躊躇なく無抵抗な人間に向けて魔術使うような日と達の気が知れない。そんな相手に危険を冒してわざわざ会いに行く理由はありません」

「恵美子ちゃん」

「今回ばかりはダメです。幸音さんがなんと言おうと、あたしは絶対絶対、絶対に反対ですからね！！ どうしても行くって言っなら」

「おい、お前。いい加減にしろ。そんなことで吉村は引き下がらんですよ。それに、その先を言ってもみる俺じゃなくて菅原が確実にお前を叩き潰すぞ」

「そんなこと、しないよお」

てへ、と黒い微笑を漂わせる陽子は笑っていない眼を三日月型に歪めた。機嫌よさげに両頬に手を当ててころころとカーペットの上で寝転がっている。

恵美子はぞつとして一瞬口を閉じてしまふ。合間を縫うように発言したのは幸音だ。

「誰になんと言われようと、この一件は私の責任として処理する他ありません。高良さんも陽子さんも副店長だつて止めることは出来ないし、止める必要もないと考えているはずです。庄野くんと高良さんが主張するようにうちの防犯システムは穴だらけで、その原因はすべて私にあります。この問題がわかっていながら、何とかなるだろうと楽観的に考え、その結果、仲間を危機に追い込んで怪我をさせた……。売られた喧嘩は買うというか、出された招待状は貰い受けるというか。とにかく、もろもろの事情を含めて私は絶対に犯人を許しません。——だから」

「俺は反対です」

息つく間もなく決意を並び立てていた幸音の言葉を分断したのは庄野だった。青年は幸音を鋭く睨みつけると嘲笑めいた表情で、見下げるように鼻で笑う。

「ハ。なんですか、ソレ。自己満足とか大概にして欲しいんですけど」

「自己満足？」

由貴は前髪の端を弄びながらさらに失笑した。

「だってそうでしょ？ 自分が一番重い責任背負ってるって雰囲気だしまくって、自分が一人で処理しなければならないって、ナニソレ、何様ですか？ 俺よりも劣る魔術の腕で、魔導師のライセンスも取れていないくせに法律犯してまで窃盗ゲームをするような人間と対峙する気ですか？ どうかしてる。そういうの辞めてもらえませんか？ はっきり言って、すごくイラつく。見ていて不快ですよ。そこまで何を守りたいのか知りませんが、全部自分の責任として背負い込んでその結果また失敗して、今回みたいに怪我とかしたらどうするんです？ それこそ馬鹿らしいし、目も当てられませんよね」

「・・・」

「防犯システムが穴だらけの理由が例えば吉村さんだとして、倉科が怪我をした要因がそれとして。もし今回の事件がただの怪我でなくて死亡事故に繋がったとした場合、吉村さんは同じ台詞を吐けるんですか？ 聞いてて反吐が出るくらいの偽善者ぶりに怖気が立ち

ますよ。死んでしまったら責任も何も取れるわけがないじゃないですか。それを、樂觀的に考えてた？ 売られた喧嘩をかう？ 自己陶醉もここまでくれば立派ですね」

「何が言いたいの」

冷やかな視線で感情を押し殺し静かに応じる幸音に、由貴は凄絶な微笑で持つて応じ口元を綻ばせた。

「だから言ってるでしょ？ 俺は反対です。そんな連中無視して店の防犯対策に万全をきたす方が先決です。憂いがあればこれを立ち、失策があればこれを埋める。原因がわかっていながらそれを取り除いて、改善策を提示する。当たり前のことですよ。それともなんですか？ わざわざご託を並べてまで守りたいもの、隠したい理由でもあるんですか？」

「理由がないと責任を負っちゃあいけないってわけ？」

「いいえ。責任を取るということに関して言えば至極立派な志だとは思いますが。けれど俺が言いたいのはそのうちじゃない。命をかけて犯人を捕縛する義理や義務があなたにはあるんですか？」

「愚問だわね。論点が堂々巡りしてるわよ庄野くん」

三月も陽子も、高良も透も口を挟まない。恵美子は息を吞んで幸音と由貴を交互に見る。彼らは互いに一步も譲らず絶対零度の舌鋒を繰り広げていた。

室温が一気に零度まで下降したような肌寒さに思わず両肩を擦ってしまふほど。

「店の防犯対策さえ万全なら、再びやつらが来たとしても対処のしようがあるし、もっと楽に捕縛できる。防犯カメラの証拠だってあるんですから、陣地を固めて網を張っておく方が安心だしずっと楽でしょう。少ない情報から犯人を探し出す徒労を思えば、その方がずいぶん効率的だし、合理的です。それに警察組織もあるんですから、捜査は彼らに任せておけばいいと、俺は思いますけどね」

「あら。ずいぶん悠長なことを言うのね。このままあいつらを放置しろっていうつもり？ 確かに警察の届出はしたけど、お役所なんて連中下位の事案になればなるほど着手するのに遅くなるっていうのに、手を拱いて犯人捕縛まで待っているって言うの？ それこそ冗談じゃないわね。野放しにしたら何をするかわかったものじゃないわ」

「それを民間人の俺たちがやる必要がどこにあるんですか？ 任せられるんだったら任せておけばいいじゃないですか。警察だって――」

「君になんといわれようと、誰がなんと反対しようと、あたしは今回だけは自分の考えを曲げる気はないの」

嫣然と微笑して幸音は口元を勝ち誇ったように綻ばせた。

思わず息を吞んでしまうほどの説得力のない威圧感に、由貴は言葉を飲み込んでしまった。それは明らかな敗因の一つで、幸音は小さく呼吸を繰り返すと高良、三月、陽子へ順に視線を送る。

恵美子にはもはや何もいうことが出来ず、透は呆れて物も言えず、由貴だけは頑として納得せず、交渉は一部決裂した。そうして結局、幸音は高良の要求をのみ、条件を果たすべく四日後から奔走することになる。

これが西暦2011年11月27日に生じた、通称「スーパーニコニコ分裂騒動」の中核を担う事件の一端であった。

頑として己の主張を曲げない幸音と、新人アルバイトの由貴の間には当然ながら深い亀裂が走った。もともと協調性があるわけでもない由貴と、無理矢理にでも人間らしい職場仲間環境を築こうとした幸音の苦労はこの一件で総て水泡に帰してしまふこととなった。

勤務中ともなれば表面的に必要な最低限の会話をするのだが、お互いのこだわりが解けぬまま事態は平行線を辿り、まったく似通わない二人の性格の中で唯一つ厄介な一点だけが揃って合致し待ったが故に、時が問題を解決するとも言えず周囲の者達はやや困惑気味だった。もとより、必要以上他人に深入りしようとする陽子をはじめ、何を考えているのかわからない三月、「犯人確保」などという火に油を注ぐ事態に発展させた高良などは我関せずを突き通し日々の職務を全うしていた。

そんな11月の下旬も下旬。

幸音は部屋にやってきた面妖な格好をした少年、透によって保留していたもう一つの事案を対処しなければならなくなり、頭を悩ま

せることとなる。

「さっちゃん」

四辻透は、寝台の上で雑誌を読みふける羊の寝巻き姿の幸音に一通の封筒を差し出した。

彼の服装は灰鼠色の着物と、それに合わせた羽織に煙緑のマフラーを巻いたスタイルで、顔に着用している面は何故か食い倒れ人形だった。にこやかな表情がかえってシユールで恵美子などは若干引き気味だ。

しかしポリシーをもってその日の気分で面を選ぶ透は他人のことなど一向に気にしない。

「これ、忘れてると思って持って来たよ」

「ナニコレ？」

「ほら、やっぱり忘れてる。こないだハローワークから来た求人票だよ」

連日連夜仕事が終わってから防犯カメラを撤き戻しては当時の状況を眺める作業を繰り返していた幸音は満足に睡眠も食事もとっていないせいか、肌の潤いは欠け、目の下に大きなクマを作っていた。しかも、防寒装備が十分でなかったことと疲労のため風邪をひきかけている。

「ん・・・ありがとう」

鼻の調子も悪いのか、少し鼻声で幸音は封筒を受け取って中を確認するため雑誌から手を外した。

痛々しかつた顎のガーゼは絆創膏に代わったものの、指はまだ完治しておらず職場でレジを打つには不自由な指先にはまだ薄く包帯が巻かれていた。

「あんまり無理しちゃダメだよ。根詰めてもいいことなんかないんだしさ」

「はいはい」

「緊張感ないんだから。忙しいとは思うけど、早くそれに返事だしなね。調べたところによると、どことなく普通の会社っぽいししかしたらさっちゃんにお似合いの会社かもしれない。受けるかどうかは別として、明日中に返事の一本電話でも何でも入れないと十二月になっちゃうからね」

早くしなよ。

透は表情が笑みのまま変化のないお面に光を反射させ、言いたい事だけ言うつとさっさと部屋を出て行ってしまった。取り残された幸音は、雑誌と封筒を交互に見つめ、嘆息してようやく求人票を取り出した。

三つに折りたたまれた真白の紙を開いて幸音は無言で文字を追う。

「就職、かあ」

もとより正社員として就職することを今年の目標として掲げていたというのに、失敗に失敗を重ねもう年の瀬だ。次から次に生じる厄介ごとに息つくまもなく、かといってその間就職活動をしていなかったわけでもないのに、縁がなく職にありつけなかった。

幸音は頬杖をついた。

夜間のアルバイトは憎らしくも有能な庄野由貴を迎えたおかげで順調に回りつつある。悠馬、恵美子、由貴に高良。もちろん高良はパートなので朝から出て5時に帰ってしまうこともあるが、由貴が来てからは夜間に回されることも多くなった。陽子さんもなんだかんだ言って閉店まで付き合えるよう、午後出勤が多くなっている。

その代わり、陽子さんと同じ社員の岡本が朝勤務となっていたり、パートのおばさんたちが上手い具合に午前と午後に分散してくれていた。いたりした。

発狂するほど忙しかった先月、先々月が終了し恵美子も仕事を覚え、それ故に幸音は己の存在がもはやスーパーニコニコにとって必要なものではないかと感じ始めていた。

所詮パートの身の上としては、いくら時給が高くても社会的に安定した仕事に就いているとは言いがたい。パート勤務でも年間所得を103万円越える為、所得税を払わねばならぬし、その上に年金や保険も払っていかねばならないのだ。携帯料金や家庭に納めるお金も必要となるがゆえ、いつまでもこのぬるま湯に使ったような状態で働き続けるわけにはいかなかった。

社会には沢山仕事も職業もあるのに、幸音はまだそのどれにも引つかかることが出来ていない。誰もが持っている資格や当たり前の学歴を経ていれば正社員など確実に獲得できると考えていた2年前の自分が馬鹿馬鹿しく感じるほど、世間は厳しく世知辛かった。

幸音は求人票を折りたたむと封筒の中に戻し、再び雑誌に目を落とした。

12月2日。

午後8時55分。

閉店間際のスーパーで吉村幸音は床に這いつくばっていた。

フランク・シナトラの「ムーンリバー・オルゴールヴァージョン」が流れる中、白々しく冷ややかな視線を送る由貴をまるきり無視して、気まずい空気が流れる夜間レジで幸音は必死に床に転がったあるものを探している。

落ちたのは一円玉だ。

レジ業務の最大の敵は違算を出すことだ。

ドロア（レジの釣銭が納められている部分）から飛び出した一円があればこれを拾い、金銭授受の際には確実に二度確認をし、お客に手渡すのが鉄則である。

閉店間際に駆け込んだ客が、由貴が閉店業務でレジを離れている最中1レジで書類の整理をしていた幸音のレジを利用した。閉店間近ということもあり、男は焦っていたのである。適当に出した小銭を銭形平次のように投げ、レシートも受け取らず、釣銭と商品だけ持つとあわただしく退散した。

閉店直前駆け込む客がいるのは珍しいことではない（ただし、その客が嫌われる確率は非常に高い）のだが、考え事が多すぎて注意力散漫になっていた幸音は、あるうことが硬貨の中で最も軽くハネやすいアルミで作られた一円玉をレジ台の下に転がしてしまったようである。

方位は四時の方向。音からあまり遠方には飛んでいないようだが。

冷え込む夜間の空気と本日、久々に顔を合わせるなり必要最低限のこと以外会話もしていない幸音と由貴に協力関係はない。現在はいわば冷戦状態で、もとより積極性と協調性に欠ける由貴が業務中だからとその鉄壁無表情を生かすことはなく、怨恨入り混じった冷やかな視線で幸音の行動を傍観しているのだ。

幸音としても分かり合えない余地を残して、わかりあう必要はないと淡白にも思っているところもあり、由貴に助けを求める気は毛頭なかった。

舌打ちしたい気には大いにさせられたが、それは年の功でカバーすることにする。

埃とゴミが散乱するレジ台の下の惨状を久々に目の当たりにして、幸音は顔を苦々しく歪めたがしばらくして目的のものを発見した。よくよく確認すれば、誰かが拾い忘れたのだらう。十円玉がその近くに落ちていた。

幸音は包帯の外れた指先で硬貨を一枚ずつ跳ね寄せる。

あの事件が起きてからというもののスーパーニコニコには予断を許さない緊張感が流れていた。二日も仕事を休んでしまった幸音はその間の概要を同じく職場復帰した悠馬から耳にすることとなる。

まず、レジ付近での朗らかな雑談の量が減った。

当然のことだといわれればそれまでだが、従業員や客との雑談コミュニケーションが大幅に減少したのだ。これにより作業の効率化と効率化が図られたものの、味気ない必要事項だけのやり取りは一部のメンツ（主に悠馬）の颯爽を買うことになる。

次に、放送の回数が増えた。

先日的一件で店中の小型インカムが全滅し、現在修理中のため細かな連携作業が出来にくくなった挙句、事件以来、不審人物に過敏反応するようになった二人の人物（恵美子と由貴）が馬鹿の一つ覚えが如くに応援の要請をするようになった。

作業中のパートやアルバイトはもとより、社員も常に気を張っていなければならず些細なミスが大きなトラブルに発展することも多くなり店全体の雰囲気が悪くなった。

また、クリスマスや年末に向けたケーキやおせちの販売数も獲得せねばならない上に、歳末の大売出し、大掃除の準備、手順確認のために手間を取られ通常業務が大きく滞ることとなる。犯人探しより以前に、店の雰囲気を戻すためにあれこれ細工を施すほうに気がかまけ実際それどころではなくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6504y/>

スーパーの吉村さん

2011年11月30日22時52分発行